２０１９年3月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の番組審議会での答申を受け「２０１９年度近畿地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０１９年度近畿地方向け放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、事前に視聴してもらった、「鉄オタ選手権～阪急電鉄の陣～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	添田　隆昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	矢崎　和彦	((株)フェリシモ　代表取締役社長)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜「鉄オタ選手権～阪急電鉄の陣～」

（２月２２日(金)総合 後 8:00～8:42 近畿ﾌﾞﾛｯｸ放送）について＞

○　番組を初めて見たが、阪急沿線の住民でさえ、ふだん接することのない深いところまで紹介していたので、興味深かった。鉄道オタクであれば、より楽しめる内容だったのだと思う。ＮＨＫのようなマスメディアと、ニッチなオタクという組み合わせが

斬新に感じられた。テレビ番組はインターネットで配信されている時代なので、番組放送後に関心層に伝ぱしていくこともあるのではないか。ＥＣ（イーコマース）ビジネスの世界ではロングテールということばがよく使われるが、極めてニッチな商品でもインターネットを通じて世界をマーケットにすることによって、放送のロングテールといったことにもつながっていくように感じた。

○　この番組は、各鉄道会社の協力を得ているところがおもしろいと思うが、どのように制作されたのかと感じた。また、教養番組なのかお笑い番組なのかわからなかったが、どういった視聴者をターゲットとした番組なのだろうか。最初は引き込まれて見ていたが、後から出演者がどんどん増えていくので、わかりにくかった。内容的には、クイズがあったり、人気アニメのパロディーのようなコーナーが出てきたり、リズミカルに展開する点ではおもしろいのかもしれないが、あまりにも盛りだくさんで少ししんどく感じた。クイズの内容がマニアックで、もう少し普遍性があれば、おもしろかったと思う。ただ、３月デビュー予定の観光列車や創業者の小林一三などを紹介していたのはとてもおもしろかった。

○　この番組は好きでこれまでも視聴しているので、いろいろなネタが出てくるのはお約束だと感じた。自分にとって、電車と言えば阪急電車なので、今回ははるかに思い入れがあった。番組で３つの路線が同時に発車するのが見えるポイントが話題になっていたが、当たり前の光景が、珍しいことに気づいた。また、十三駅の南側に、スイッチバックして京都線から神戸線に乗り入れできる線路があることには驚いたので、次回近くを通る際には注意して見たいと思う。出演者が珍しい光景に興奮するのは理解できるが、スイッチバックの際にカメラの撮影の方向をふさいでしまっていたのは残念に感じた。また、能勢電鉄の北極星入口駅を紹介するシーンはよくわからなかったので、もう少しきちんと紹介してほしかった。自動改札機の導入は阪急が日本初だったことや、淡路駅手前の信号待ちにイライラすることなど、懐かしい話題が満載で楽しかったし、サックス奏者の上野耕平さんは発車メロディーなどを完璧に奏でていてすばらしかった。これまで社員チームの優勝確率はかなり高いと感じるが、芸能人チームなどほかのチームに花を持たせればいいのにと思う一方で、負ければ会社で白い目で見られるのだろうとも感じた。今回の番組も楽しかった。

○　淡路駅周辺で立体交差工事をしていることなど、新しい情報を得られて、楽しかった。娯楽番組の王道だと感じた。番組を全部見たのは初めてだったが、まもなくデビューする観光列車や淡路駅のリニューアルなど新しい情報もうまく盛り込まれていて、特に観光列車には乗りたいと強く感じた。ＮＨＫは料金のことはあまり紹介しな

いと思うが、通常料金で乗れるという説明もあったのでとてもよかった。京都線から神戸線への乗換えなど出演者のはしゃぎぶりに、“鉄オタ”の人たちが喜ぶツボを知ることができて、興味深かった。一方で、ロマンチックな映像も出ていたが、北極星入り口駅を紹介する話がよくわからなかったのは、少し残念に感じた。また、出演者が少し多過ぎだと思った。随所に出てくるＶＴＲを紹介した際に画面を装飾するアニメーションは楽しかったが、高齢の方には見にくいのではないかと思った。番組のＢＧＭはよかったが、若い世代は知らないような選曲だと感じた。この番組で、ほかの鉄道会社と比較しながら、阪急電鉄の特徴もいくつか紹介されていれば、よりおもしろくなったと思う。

○　“鉄オタ”ではなくても電車に愛着が湧く４２分間だった。発車メロディーのくだりなどわからないところはあるが、“鉄オタ”の出演者がとても興奮している様子はおもしろかったし、思いのほか手が込んでいて驚いた。ホテル、車庫、研修所、西宮北口と場所も雰囲気も変わっていくので、一緒に旅をしている感じで、工場見学のような気持ちにもなった。クイズも全部解ける問題ではなかったが、感心する問題ばかりでおもしろかった。観光特急には一度乗ってみたいと思ったし、十三駅を経由して西宮北口へ向かうふだんは見られない線路や、自動改札の実用化は阪急電車が初めてだったことなど、ためになるおもしろい情報もあった。チームにはそれぞれ阪急電車を思う気持ちや楽しみ方があって、最初から社員チームが圧勝する感じにはさせなかったのもよかった。入り込むところと客観的に見るポイントがそれぞれあったので、“鉄オタ”ではない自分にもおもしろかった。

○　ふだん阪急はあまり目にすることがないが、バラエティーとして本当におもしろかった。冒頭のつかみで大笑いしたので、そのまま集中して見ることができた。出演者では天才的なサックス奏者の上野さんが出演していたのは特別感があった。“鉄道好きな女性アナウンサー”としても有名な久野知美さんのマネージャーもそうだったが、番組の冒頭でしっかりと紹介されていない出演者もいたので、番組の進行とともに出演者が増えていくと、少し混乱した。また、アニメのキャラクターの物まねのシーンなどをどう理解したらいいかと戸惑ったが、内輪で盛り上がっているような印象はなく、視聴者に伝えようとする姿勢を感じた。

○　出演者の皆さんが妙な興奮状態にあって、本当に電車が好きなことがよくわかった。３路線が同時にカーブを曲がっていく光景は鉄道ファンでなくてもぐっとくるものがあった。サックス奏者の上野さんのことを初めて知ったが、ひたすら発車メロディーや電車の接近音を吹くことに徹していたのがとてもよかった。気になった点をいく

つか挙げると、カットの長さもエピソードも細切れな印象を受けたので、ついていくのが大変だった。おもしろいエピソードはいっぱいあったかと思うが、余韻に浸る間がなく、もう少し深く長く知りたかった。また、阪急電車に乗ったことがない私には、どこをどのように走っているのかがわからなかったので、土地勘のない人にはわかりにくかったのではないか。車体を古い順に並べるというクイズがあったが、フリップの電車の写真が小さくわかりにくかったので、視聴者には画面を４分割にした写真を見せてもよかったと思う。番組を見て、自分も好きなものを見つけてどこかに出かけようかと思わせてくれるような、春先に見るにはとてもいい番組だと思った。

○　私自身、阪急電車はほかの電車と比べてきれいだという印象を持っているので、同じように羨望のまなざしで見た人が多かったのではないか。社員チームが優勝したことに意外性はなかったが、もしも負けていたら、会社で周りの人に何か言われてしまったのではないかとも思った。

○　“鉄オタ”はもちろん、沿線に住んでいる人や、通勤や通学などで利用している人にとっても大変おもしろい番組だったように思う。確かに昔から淡路駅の信号待ちは長いし、今はない西宮北口の直角に平面交差する線路などは非常に珍しく、大変懐かった。阪急の梅田駅は大阪万博のときに新しい場所に移り、動く歩道などいろいろなものができたのだが、こうした歴史的な話もあればもっとおもしろくなったと思う。関西の大手私鉄の５社すべてに乗る機会があるが、それぞれに個性があっておもしろいと感じる。そうした個性の比較をしてもおもしろいと思うし、大阪市の地下鉄も民営化されたのでそういう意味では私鉄という気もする。鉄道よりも自動車に興味があるので、冒頭に登場した阪急電車仕様の自動車に驚き、誰が所有しているのだろうかと思った。

○　阪急は、創業者の小林一三が沿線を伸ばしながら住宅や文化施設を作るという経営戦略をとったため、特に阪神間は「阪急平野」と言われている。これが阪急沿線の特徴だと思うが、この番組では阪急電車の特徴はあまりよくわからなかった。西宮北口駅の平面交差や、淡路駅の信号待ちが長いという話題のときに、路線図でピンポイントに指し示していたら、阪急沿線になじみのない方にもどの駅の話題のことかよくわかったように思う。クイズ番組の特徴かもしれないが、騒がしく感じた。司会のお笑い芸人の方は“鉄オタ”だが、キャラクターがもっと出ていたほうがおもしろかったように感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は2016年に始まり、当初は休日の朝８時台など、ゴールデンタイム以外の時間帯で放送していた。その後、視聴者からの反響があり、東京の小田急電鉄の回を制作するなど、広がりを見せた番組だ。

（ＮＨＫ側）

万博開催時の話題や、阪急平野の話題も盛り込めばよいという意見は参考になった。この番組は、担当ディレクターが新人の時に出した企画で、2016年の南海電鉄の回以降、同じディレクターが制作し続けている。委員からは出演者がにぎやかすぎだという意見もいただいたが、制作者の若い感性が反映された面もあるかもしれない。

（ＮＨＫ側）

今回は５回目なので、これまで出演した方の紹介はだいぶ簡略化しており、初めて番組を見た方には確かにわかりにくい状態になっていると思う。どのように番組を企画・制作しているかについてだが、基本的にはＮＨＫ側から各鉄道会社の広報の方に実現したいことを提案したうえで、その中で実現できそうなものに協力していただいている。十三から西宮北口に行く場面では、ふだん乗客が見ることのできない回送車両が使うルートを紹介させていただいた。また、北極星入口駅のコーナーがわかりにくいという指摘だが、毎回出演している物まね芸人のシリーズだったこともあり、演出を省略したために、初めての方には大変わかりづらくなっていたので、もう少し丁寧に説明できればよかったと思う。また、出演者が多すぎるという指摘をいただいたが、鉄道を好きな方以外にも楽しんでもらいたいという思いがあり、いろいろなお笑い芸人の方に出演してもらっている。今回は、前回よりは出演者を減らしたが、それでも多すぎるということで、参考にしたい。社員チームの優勝が多いという指摘だが、社員チームが簡単に優勝できないよう、対戦チームのメンバーの選定や問題作りを必死に考えてはいるものの、社員さんたちの勝たないと帰れないという危機感が勝っているという状況だ。番組のＢＧＭは、若手の担当ディレクターが選曲もしている。話題に合わせて、できるだけ多くの人にとってわかりやすい曲を、新旧織り交ぜて使用している。

＜放送番組一般について＞

○　２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第５回「“ノーベル賞会社員”～科学技術立国の苦闘～」を見た。国の研究費の助成の方法が、競争的資金の助成を増やす一方で、人件費に関わる基盤的経費が減っていけば、日本の科学技術は崩壊することを伝えていた。対照的だったのは、会社の姿勢で、田中耕一さんの研究に毎年巨額の研究費を投入し、血液で病気の兆候を捉えるところまでたどり着いたという展開になっていた。ノーベル賞受賞者は皆、若いころの研究が数十年経過してから評価されているケースが多いようなので、若いころに自由に研究させることが重要であるということも伝えようとしていたのだろうと感じた。田中さんの研究は象徴的なケースだと思うが、将来の科学立国としての存在意義に関わる問題だと思うので、文部科学省や財務省の予算に携わる方々に見てもらいたいと感じた。

○　非常に心にしみる番組だった。ノーベル賞受賞当時、田中さんの記者会見を非常にほほえましく見ていたが、今回、実はものすごく大きな葛藤の中にいたことを初めて知り、とても身近に感じた。その後１６年たって、当時の謙虚さに自信も加わった田中さんにいろいろな話を聞くことができて、とてもうれしかった。最後に、「偶然も強い意志がもたらす必然である」というナレーションがあったが、どの世代でもそれぞれの道を探してもがいていると思うので、そういった人たちにとっても心強いエールをもらったと感じた。こうしたことばを引き出した制作スタッフに感謝したいと思った。

○　科学の分野に縁のない自分でも、顔を見たらすぐにわかるぐらい、ノーベル賞受賞者の田中さんのことは印象に残っている。田中さんがインタビューで感情を高ぶらせて早口で話した場面があったが、笑顔でおとなしい方だという印象があったので、すごく興味が湧いた。その後、「すみません。感情をあらわにしまして」と話していた様子に、謙虚で真面目な人柄と、ノーベル賞受賞後の苦悩がよくわかった。インタビュアーの国谷裕子さんが本当に聞き上手で、安心して見ることができた。

○　数々のノーベル賞受賞者の中で、一番印象残っているのは田中さんで、記者会見の映像を見て懐かしかった。番組は１６年間もがいて来たという衝撃的な内容で始まり、カメラ初潜入の部分や、博士号を持たない受賞者は世界初だったこと、ノーベル賞を受賞したことが嫌な思い出だということなどが伝えられていたので、最後までのめり込んで見た。受賞後の田中さんのこれまでの苦闘が描かれていたが、アスリートにと

ってのオリンピックの金メダルと同じように感じられた。失敗してもいいということや、成果を求めずに短期間で結果を出そうとするよりもいろいろなことに挑戦することの大切さ、一つのことを極めず二刀流や三刀流が大事ということは、すべての分野に通じるものがあると思った。今、将来の夢を子どもたちに聞いても、科学者や研究者という子はほとんどいないので、研究したいと思える環境になってほしいと思う。化学の分野でいうと誰かの命を救うことにつながるため、すぐに結果が出なくても予算が下りる仕組みは大切だと感じるので、これからの課題だと強く感じた。

○　田中さんというノーベル賞会社員を通して、平成の科学技術立国日本のいいところと悪いところがうまく描かれていた。助成金の仕組みなど難しい内容もあるが、わかりやすい図解や丁寧な描写などで理解しやすくなっていてとてもよかった。日本が多くのノーベル賞を受賞したことを“昭和の遺産”と表現していたが、平成史のドキュメントとして改めて考えさせられる番組だった。一つ一つが発見することばかりで、国谷さんも田中さんの話をうまく引き出していた。一方、田中さんが勤めている会社は我慢を重ねながら 1 年に 1 億を田中さんの研究に投入し続けてきたことも本当にすごいことだと感じた。若手にタンパク質分析装置を開放しているという話は、平成から次の時代に活躍する人たちへのバトンのように感じられて、希望が見えた。この問題は、次の時代に向けて、もっと国全体で考えないといけないと思った。ただ、最後に田中さんがふるさと富山市を一望できる山の頂上を訪れる場面はなくてもよかったのではないかと感じた。番組をまとめに入っているように感じたし、ここまで事実を積み上げてきたので、最後にドラマチックにしなくてもよかったように思う。この問題を国全体で考えるために、しかるべき立場の人たちに見てほしいと思った。

○　ノーベル賞にふさわしい研究成果を上げなければならないという田中さんのプレッシャーは非常に大きなものだったと思う。田中さんは、アルツハイマー症の兆候を発症の３０年以上前からつかめる技術を開発したということだが、この病気は、早期の発見と治療が重要なので、実用化までの道は険しくても頑張ってほしい。研究資金の問題で、自由に研究できる環境が失われつつあると思うが、今回の田中さんの研究成果は、看板研究者に会社が毎年巨額の研究費を捻出し続けたことと、ノーベル賞受賞者だったことが競争的研究資金の獲得に有利に働いたからとも考えられる。ノーベル医学・生理学賞を受賞した本庶佑さんが「科学立国になるまでには明治時代から 150 年を要しており、１、２年でどうにかなるのではない。」と話していたが、今のままでは、すぐに取り残されてしまうのではないか。田中さんが「イノベーションを新しい捉え方と定義し、もう少し柔軟に広く解釈すればイノベーションをもっと容易にできる。自分自身を低く評価している若い人たちがいるが、もっと気楽に考えよう。」

というのは、この１６年で到達した境地であり、過去の自分に対することばでもあったのではないかとも思う。

○　感動するよい番組だ。ノーベル賞受賞後の田中さんの苦闘は知らなかったし、「受賞に値することを成し遂げたのか」と自問自答する姿など、田中さんの人柄がうまく描かれていたからだと思う。特に最後の「偶然も強い意志がもたらす必然である。」ということばは本当に印象深いものだった。また、国の科学技術政策に対して問題提起をしたことも意味があったと思う。2003 年の国公立大学の法人化は不完全で、当初現場は混乱する中、基盤的資金が毎年１％ずつ削減され、研究者の就職先がなかなか見つからない状況になっている。本庶さんが指摘したポスドク問題も、３０代から５０代の研究者が不安定な制度の中で生活している。解決するためには、世論を動かすのが重要で、さらにこの問題を掘り下げ、問題提起していってほしい。一つだけ気になったのは、田中さんの苦闘と、科学技術予算の構造変化によってもたらされる科学技術立国としての危うさとの関係性がわからなかった。ただ、全体的にはとてもよい番組だったと思う。

○　イノベーションは、科学技術の分野だけではなく、すでに日本の社会全体にとって必要なことなので、いろいろな人たちに伝わるものがあったと思う。ノーベル賞受賞者があのようになるんだと驚いた。会社のサポートのもと、地道にコツコツと頑張る田中さんの話や、国の科学技術戦略など、さまざま問題提起があり、多くの学びがあった。「若いときには失敗してもいいから挑戦してみる」ということは、研究者の世界だけでなく、あらゆる分野で必要だと思うので、ＮＨＫが啓もうすることは重要だと思った。また、ノーベル賞受賞者の一言一言が光り輝いていた。今、選択と集中ということばがはやっているが何も生まれないという状態の中、本庶さんの「『選択と集中』と『バラマキ』は、両方いると思う。ライフサイエンスという何がどこに潜んでいるかわからない分野では、いろいろな人にいろいろなことをやらせることが必要だ。しかし、やるためにはまとまった研究費はあげないといけない。」ということばには考えさせられた。また「クローズアップ現代」でかつてキャスターを務めていた国谷さんが久しぶりに出演していてうれしかったし、とても説得力があると感じた。

○　田中さんは若くしてノーベル賞を受賞し、第一線の研究者としての時間が長かったので、次の研究に対するプレッシャーが大きかったと思う。いろいろな葛藤の中で頑張ってきて、新たな成果を出したことは大変すばらしいと思う一方で、日本の科学技術政策は一貫していないと感じた。「田中耕一がどこにいるのか」という話に象徴されるが、日本は研究成果を把握するのが十分ではないように思う。そうした課題を啓

発する番組だったと思うし、本庶さんの意見には共感した。最後の「イノベーションとは、今あるものの組み合わせ」という考え方は、経済学者のシュンペーターから来ていると思う。

○　田中さんのインタビューで、「科学」は「サイエンス」、「化学」を「ケミストリー」と注意深く使い分けているのが印象に残った。また、田中さんの苦闘と研究者一般の苦闘は若干異なるが、最後はうまく混ぜ合わさっていた。今の研究者たちは競争的資金をいかに獲得したかで、研究者としての資質が問われる風潮にあり、こうしたことが論文の水増しや、1 本の論文を複数に分けて成果と称することにつながっている。研究者は、現場を離れると、若手をいかに育てるかが最後の仕事になるが、田中さんが５年を期限に年間７億の研究費を獲得し、若い研究者２０人を雇用したことに深く感動した。イノベーションを起こすうえで他分野の専門家に意見を問うという非常に素直な態度や、若い人たちに対する態度は、非常に学ぶところがあった。本庶さんのインタビューにもあったが、研究には研究費をばら撒くことも大事で、時間をかけても研究成果があがらないこともある世界だ。こうしたことを社会のゆとりとして認められなくなっている。本庶さんや田中さんの含蓄のあることばは、若い研究者にとって励みになると思う。非常に考えさせられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

制作のきっかけは、全くメディアに出なくなった田中さんを「平成史スクープドキュメント」で取材できないかと東京から相談を受けた京都局のディレクターとプロデューサーが番組の趣旨を田中さんに丁寧に説明し、出演を了承していただくことができた。

（ＮＨＫ側）

田中さんは、これまで基本的に専門メディア以外のインタビューは受けないという方針を貫いていたが、番組の趣旨を理解していただき、取材に応じていただいた。インタビューを通じて、ノーベル賞受賞後にどれだけ自問自答していたかをうかがい、このことを詳細に伝えることこそが、今回の番組の肝になるのではないかと確信を持った。田中さんの苦闘と科学技術立国日本の苦闘が、それ自身はイコールではないという指摘についてはチームでも議論を重ねてきたところで、田中さんの苦闘そのものが平成の科学を代表するものではないが、それ以上に田中さんの苦闘を見ることが平成の次の時代の科学技術立国としての再生のヒントになる

のではないかと思い、そこを重点的に伝えようとした。イノベーションということばは、日本では技術革新の意味になっているが、田中さんは経済学者であるシュンペーターの示した「新しい結合、あるいは新しい捉え方」という解釈のほうが本来的な意味で、この解釈のほうがもっと大事だということを伝えたかったようだ。

○　連続テレビ小説「まんぷく」はもうすぐ終わってしまうが、本当に楽しく見ている。３月２日(月)は、奥田瑛二さんが演じる大臣のところに萬平があいさつに行く回などは、大阪放送局制作ならではの遊びが感じられて、おもしろかった。ようやくまんぷくヌードルの開発の話になったので、残りの放送も楽しみにしている。

○　３月２０日(水)の「まんぷく」で、母親の鈴が入院したが、元気になってほしい。毎週楽しく見ていたので、来週で終わるのがとても残念だ。

○　３月１８日(月)の新聞に「東日本大震災の際、災害遺族が、病院搬送後のトリアージのミスで亡くなったとして病院を提訴した」という記事が掲載されていた。１月１７日(木)のＮＨＫスペシャル「命をめぐる決断～災害多発時代　神戸からの問いかけ～」(総合 後 10:00～10:45)で予備知識があったので、阪神・淡路大震災以降に起きたこととして、興味深いニュースだと感じた。

○　大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（はなし）～」は、これからストックホルムオリンピックというときに、出演者の降板があり、関係者は大変苦労していると思う。今回の大河ドラマは、この枠を借りた、脚本家・宮藤官九郎のドラマの最高峰だと思う。毎回感動があるのは、用意周到な脚本や、タイミングなどの緻密な計算がされているカット、そして、センスや緊張感などが注ぎ込まれているからだと思う。いつもの大河ドラマよりも、視聴者が積極的に関わっていく努力が必要で、集中して見ていないといけないドラマだ。歴史が好きで見ている人にはつらいかもしれないが、それを乗り越えたら、本当におもしろくなるドラマだと思う。出演者に不祥事があると作品がお蔵入りになることがあるが、最終的に見るかどうかは個人の責任になるかと思う。作品を放送することにいろいろな意見はあると思うが、お蔵入りにせず、ＮＨＫオンデマンドの配信なども復活させてほしい。

○　出演者の不祥事があっても、ドラマに罪はないと思う。平成２８年度前期の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」は大好きだが、見られないと思うだけでさみしくなる。今後の対応を見守りたい。

○　３月１５日(金)の「めざせ東京！滋賀のパラアスリートたち　前編」(総合 後 7:30～8:00 滋賀県域)、１７日(日)の「めざせ東京！滋賀のパラアスリートたち　後編」(総合 後 1:05～1:44 滋賀県域)を見た。番組では、滋賀県には多くのパラアスリートがいると言っていたが、本当にそうだと思う。前編で、全盲のスイマー木村敬一さんを大津放送局が長期間取材してきたものを見たが、滋賀県にこのような人がいることをとてもうれしく感じた。後編では、平成２９年ごろから取材してきたものをまとめて放送していた。オリンピックよりも注目度が低いと感じていて、パラリンピックのこともう少し認めてほしいと思っていたので、この番組を放送したことに本当に感謝をしている。番組に出演していた増田明美さんが、アスリート一人一人に向き合ったよいコメントをされていて、印象的だった。

○　３月１２日(火)のクローズアップ現代＋「“転勤”が廃止される！？　働き方の新潮流」、３月１３日(水)のあさイチ「給料は？待遇は？“非正規”の働き方改革」、３月１４日(木)の「おはよう日本」の新年度に向け「先生の働き方改革」を見た。４月から働き方改革関連法が施行されることも意識して取り上げているように思うが、大変よかったと思う。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０１９年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらった、ＮＨＫスペシャル「命をめぐる決断～災害多発時代　神戸からの問いかけ～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	添田　隆昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	矢崎　和彦	((株)フェリシモ　代表取締役社長)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

(主な発言)

＜「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　若い世代に向けてインターネットを活用することに注力していると感じた。資料には「『共生世界』の実現」というキーワードが出てくるが、これから人生100年時代

に入っていくので、世代ごとにアプローチをするだけでなく、世代間をつなぐという視点での番組作りをしてほしい。また、きれいな映像を楽しみたいので、４Ｋで制作した番組を増やしてほしい。

＜「２０１９年度近畿地方向け地域放送番組編集計画（案）」について-諮問-＞

○　各放送局から防災・減災に関する話が出たが、災害時の大きな課題は、外国人住民にどのように情報を伝えるかということだ。現在、日本では外国人住民に対して情報がほとんど発信されていないと感じている。一部の番組では、二か国語放送や多言語での放送サービスを行っていることは知っているが、日本在住で片言の日本語ならわかる外国人に向けて、日本語でどのように発信するか研究していくべきだと思う。わかりやすい日本語の基準が定まっておらず難しいが、こうしたノウハウを持っているのは日々視聴者に日本語で語りかけているＮＨＫではないかと思う。例えば、「じしん　あぶない　にげて」といった初心者にでもわかるような日本語のテロップや、「震源地の〇〇区役所の△△さんと電話がつながっています」など難しいコメントには「じしんのおこったまちのひとにはなしをきいています」といったテロップを出すなど、災害の初動時の伝え方を研究してほしい。また、ＮＨＫ大阪局には今後も公正・中立な選挙報道をお願いしたい。ニュースの取り上げ方によっても、特定の政党を支持する報道になりかねないので、注意が必要だと感じる。

○　日本に住む外国人向けのテロップの話を聞いてのアイデアだが、非言語でも伝えられるものとしてピクトグラムという手法がある。1964 年の東京オリンピックの際に日本でよく使われるようになったもので、放送ではあまり使われていないが、検討してみてはどうか。

○　諮問された「2019 年度近畿地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜ＮＨＫスペシャル「命をめぐる決断～災害多発時代　神戸からの問いかけ～」
（総合　１月１７日(日）後 10:00～10:45 放送）について＞

○　トリアージということばを知らなかったので、タイトルを見ても想像がつかなかった。極限状態に遭遇した人たちが番組に出てきたので、伝わってくるものがあった。番組が問題提起をすることで、考えるきっかけを提供してくれたと思う。こうした問題を社会全体で理解し、判断していかないと、家族を亡くした人も、命を救えなかった消防隊員もつらい状況が続くと思う。放送後、番組の感想はインターネット上に見られたものの、国民的な議論につながっていかないことを残念に感じた。ＮＨＫは、テレビやラジオ、インターネットなど多様なメディアを持つ一方で、人びとは世界中とつながれるスマートフォンを持っているので、人びととメディアとコンテンツをうまくつなげることができれば、ＮＨＫが社会において公共的な場を提供する可能性が広がるのではないかと感じた。

○　本当に重い番組だった。これまでトリアージは非常に合理的な救命システムだと思っていたが、番組のことばを借りると、見殺しにされる人がいることに大変ショックを受けた。命を助けてもらえなかった家族の「あのとき助けてくれていたらという思いはもう一生消えない」ということばは理解できる一方で、元消防隊員の西山恒美さんの「もっと救命率の高い現場を優先すべきと言われるかもしれないが、ロボット的な考えは誰ひとり持っていなかった。それが人間だ。」ということばや、２１人の命を助けた花山昇さんの「人殺しと言われたこともあったが、言われた方にではなく、自分自身に悔しい。」ということばを聞いて、消防隊員のほうも一生引きずっていくのではないかと感じた。人の命に優先順位をつけるということに理解は得られないと思うが、この番組で問題提起されていたと思う。消防隊員と市民の方の議論の場を紹介されていたが、ＮＨＫはさらにこの問題を取り上げて議論につなげていく必要があるのではないか。次回は、消防隊員にもう少し焦点を当ててもよいと思う。これまで日本では、自分の命は自治体や警察、消防などに守ってもらえるという前提だったと思うが、「次の大災害の前に何ができるのか。その問いは、私たち一人一人に向けられています。」という最後のことばで、「いつか起こる」ではなく、「必ず起きる」と考えていかなければならない時代になったと感じた。

○　２４年前、災害時のトリアージという概念は、医療現場にもほとんど知られておらず、阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件を経て、災害や大規模なテロが発生した場合には、少しでも多くの方を救命するための対策の一環として、認知されるようになったかと思う。番組では、これまで患者の生命の維持と明らかに亡くなっている人以

外はとにかくすべて病院に搬送することが業務とされてきた救急隊員が、大災害時には被災の現場で命の優先順位をつけなければ、1人でも多くの助かるべき命を救うことにはつながらないという事実を前に苦悩している姿が描かれていた。しかし、大災害発生時には、短時間内にすべての被災者を搬送することはできない事実があるので、限りある資源を最大限有効活用して、1人でも多くの被災者を救命するためには、現時点では救急隊による被災現場でのトリアージは必須となる。これをできる限り円滑に実施するためには、番組でも紹介されていたような隊員の方々の日ごろの教育と訓練、今回の番組のようにメディアから継続的に啓発することが、重要になってくると思う。そして、大災害時の救急隊員によるトリアージが国民にある程度受け入れられ、災害時には広く実施されるようになったとしても、生命に優先順位をつけるという判断は非常に重いものであり、判断に携わった隊員の心にはいつまでも心に後悔と懺悔の気持ちが残っていくと思う。

○　神戸の震災はまだ終わっていないことを実感するとともに、震災を忘れないことが亡くなった方や遺族の方々の気持ちに添うことだと思うので、こうした番組を作り続けてほしい。自分がこれまで知っていたトリアージということばや方法は医療現場のもので、救助のトリアージは、決断の明確な判断基準がないために、消防隊員が苦しんでいたことがよくわかった。「優先救助をしないと、結果的に被害を大きくする」という結論は、隊員の体験談や、3,000 人規模での研究会などを通じて時間をかけて行き着いたもので、「もっと救命率の高い現場を優先すべきというロボット的な考え方は持っていなかった」といった思いとのギャップを必死に埋めようとしていた。また、ＮＨＫや自治体の情報発信などで、救助のトリアージについてどの程度触れられているのか、知りたいと思った。最後に、ＳＮＳの可能性にも触れていたが、ＳＮＳの情報に従って消防隊員が出動したことは一度もない事実に驚く一方で、精査されていない情報は、余計に判断基準を怪しくするのだろうと感じた。さらに、ＡＩで取りまとめた情報を精査して判断するという神戸市の試みが紹介されていたが、ＳＮＳ以外のいろいろな情報もマッチングして、現場での迅速なトリアージに生かしていく可能性もあるように感じた。

○　タイトルも重いと感じたが、選別ということばにも厳しさを感じた。大阪府北部地震の際、茨木市では 409 件の通報に対して１０台しか救急車がなかったことや、阪神・淡路大震災では東灘区で 1 万 9,000 棟が全半壊したのに対して 113 人の隊員しかいなかったという現実を示す数字や、２４年前の映像を見ると、厳しい現実があることがわかった。被災した人や隊員の話を頭では理解しても、いざ自分に現実として起きたときに対応することはかなり難しいと感じた。ただ、この番組で大切だと思っ

たのは、後半で、全国救護活動研究会の八櫛徳二郎さんたちの活動を紹介する際、「災害が多発する今こそ、トリアージの具体的なイメージを社会全体で共有する必要がある」というコメントがあったが、これに尽きると思った。こういう現実を知っているのと知らないのではかなり違うと思うので、１人でも多くの人に番組を見てもらいたいと思った。いざ災害に直面したときに、自分たちでもなんとかできないだろうかと思う人が１人でも増えていくことが減災につながっていくのではないか。最後のＳＮＳやＡＩも有効活用していく試みは、少し明るい材料でよかったと思う。こうした情報は、絶対に災害はあるという前提で、さまざまな人々に向けて、形を変えて発信し、社会で共有してほしいと思った。

○　とても考えさせられる内容だった。阪神・淡路大震災のときの記憶は幼少期だったこともありほとんどなく、どこか“平和ボケ”している自分がいると番組を見て思った。特に過去の映像が使われていたが、ＳＮＳが普及しておらず、紙で一つ一つ救助対象となる場所を潰していくような時代だったということなど、初めて知ることばかりだった。大きく分けて３つ高めていくべきものがあると感じた。まずＡＩの力。そして、消防隊員の判断能力の高さで、消防隊員には全員助けてあげたいという気持ちがまずあるので、気持ちを抑えて冷静にトリアージに対応することの重要性に気づいた。３つ目が被害者や被害者の家族になりうる私たちの力で、トリアージや震災に対して理解しないといけないと思った。先日訪れた広島県福山市で、西日本豪雨の人命救助において、消防隊員だけではなく、地域の人たちで構成される消防団員の力も大きかったという話を聞いた。消防隊員の皆さんに力を借りるのも大事だが、私たちができることもたくさんあることを、改めて考えさせられた。

○　これまで消防隊員による救助のトリアージを知る機会はなかった。冒頭の西山さんと花山さんのインタビューにとても衝撃を受けたが、目の前の人を助けることが消防の基本ということで、花山さんは１人でも多くの命を助けるために、現場で究極の判断をしていたのだと感じた。ＮＨＫが全国 439 の消防本部にアンケートをした結果によると、救助に優先順位をつける方針を立てているのは全国で３１％ということで、消防隊員に向けた指針をもっと作ってほしいと思った。「人の命を天秤にかけなければならないという、心的ストレス」というコメントがあったが、指針があれば少し楽になれるのではないかと思った。いちばん複雑な気持ちになったのが、熊本の消防隊員のトリアージの訓練の場面で、若い隊員がどうやってその場を乗り切ればいいかわからなくなっているときに、上司が「助けるには難しい状態だということを丁寧に説明をして、次の現場に行く」よう話をしていたが、消防隊員の現場力に委ねられ、究極の選択に迫られていると感じた。最後に神戸市のＳＮＳやＡＩを使うという試みが

紹介されていた。岡山県倉敷市真備地区の豪雨災害のときに、信憑性の面では厳しいかもしれないが、なぜＳＮＳの情報を使わないのかと思っていたので、この試みに大変興味を持ったが、ここまで神戸市が進んでいるのは過去の経験値だと思う。また、「次の大災害の前に何ができるか」という問いかけには、心を強くつき刺されたように感じた。番組を見たことで、私たち個人でもできることがないのかと考えることができた。

○　本当に考えさせられた番組だった。番組は地震の映像と女性の悲鳴から始まり、「助からなかったかもしれないけれども、もし助けてくれていたら」という遺族の話で、災害の現場に連れて行かれたような思いがした。救助の人が来てくれれば、二次災害の危険がないかぎり、必ず助けてくれると思っていたので、現実はそういうものではないことを認識した。市民のアンケートにもあったが、やはり頭ではわかっていても、家族を救助されないことを了解できないと思う。家族の気持ちと、消防隊員の気持ちのどちらにとっても非常につらい選択だと思うが、いつそういう立場に置かれるかわからないということを、私たち自身ももっと真剣に考えないといけないと思った。昔に比べて、延命治療や臓器提供をするかということを、家族で確認するようになってきているが、それに加えて、災害のときに瀕死の家族を助けないことがあることを、日ごろから話さないといけないと思った。また、番組を見ていて、人間はすぐに忘れるものだと感じたので、この究極の状況をいつもどこかに意識していくのは、本当に大事だと感じた。今後いろいろなところに生かしていけたらと思う。

○　番組を見て、阪神・淡路大震災のときに木造住宅の下敷きになった母親を見捨ててしまった女性のことを思い出した。そうした精神的なトラウマを癒やすための手段はほとんどないが、東日本大震災以降、「傾聴」で、被災者の話を聞いてあげると、トラウマから解放される可能性があるといわれている。また、命をめぐる決断をせざるをえなかった消防隊員の精神的ケアも、番組の切り口になると感じた。命の選別を、トリアージというかっこいいことばで置き換えてしまうと、現実の生々しさを忘れてしまう。トリアージということばを使わず、命の選別をすることもあることが伝わることばを使ったほうがよいのではないかと思う。また、大災害のときには道路が崩壊することもあるので、今後はドローンによる撮影が必要になると思う。自然災害の可能性が高まっているので、新しい技術を導入した取材方法にも、これから資金や技術を投入する必要性を感じた。

○　救助のトリアージの重要性と消防隊員の苦労がよく描かれていた番組だったと思う。いつかはひと事ではなく自分の身に降りかかることだと社会全体に広めていくこ

との重要性がよく表現されていて、自分の携わる活動の中でも広めていきたいと改めて感じた。この番組を見て行動を起こしていきたいと思った人間がいるということだけでも大変意義のある内容だったと思う。

○　当時の映像を見ると、自分も被災したが、それぞれの人にとっての阪神・淡路大震災があるように感じる。当時の消防隊員の手記を読むと、自宅は燃えていて家族がいるはずだが、歯を食いしばって、災害現場へ向かったという話があった。自衛官や警官や消防隊員は、人命救助のための訓練をしているが、命の選別をするという重い仕事も請け負わざるを得ないということが、今回の番組でよくわかった。心配するのは、消防隊員が命の選別をして、現場で受ける罵倒や、救出できない方の家族の残念な表情を見て、ＰＴＳＤになることだ。トリアージを消防隊員に課すという過酷な決断は果たしていいのだろうかと思った。消防隊員の苦悩もわかるが、救出される側の当事者に立つと、トリアージを理解できても共感できないということはあるかもしれない。これは永遠に続く課題だと思う。こういったことを国民的論議につなげて、経験を積んでいくしかないと思う。

（ＮＨＫ側）

2019 年は阪神・淡路大震災から２４年になるが、ＮＨＫ神戸放送局にとって１月１７日というのは非常に大きい節目で、毎年、震災関連のＮＨＫスペシャルが終わると、翌年に向けて取材を始める。今回の番組は、いろいろな見方や要素があるが、取材相手の方々から貴重な証言をいただいたことは非常に大きかった。映像として記録を残すという意味でも、放送局として大きな役割を果たしたように思う。指摘をいただいたが、番組は問題提起だけでなく議論につなげるきっかけであり、そうした議論もこれからの課題だと思っている。

（ＮＨＫ側）

阪神・淡路大震災のときは、現場から中継を出そうとしても、中継車にケーブルがつながっていないと放送できなかったが、最近はカメラに特殊な機材をつければ、カメラマンが１人で現場に行き、中継が出せるというようになってきている。また、ドローンについても都市部では、運用のルールがかなり厳しくあまり自由には飛ばせないが、ドローンを使った映像はかなり普及してきているので、さらに活用の幅は広がってくるだろうと思っている。ＳＮ

Ｓの情報については、玉石混交なのでそのまま放送に使うことは難しいが、年々、技術は進化しており、公的な機関でも使っているので、ＮＨＫでも、災害報道など役立つ形で使っていきたい。

（ＮＨＫ側）

今回はテーマを選ぶときに、災害が多発する中、２４年間で積み残された課題は何かと、大阪局と神戸局で議論して、救助のトリアージをテーマにすることにした。本当に難しいテーマだったが、今回の番組で、議論のスタートは切れたと思うので、引き続き取材していきたい。「トリアージ」について、積極的に発信をしている自治体は少ないと思うが、神戸市の消防関係者が講演などで時折「助けにいけないことがある」ということは伝えているようだ。

（ＮＨＫ側）

自助と公助の間の共助の重要性をつくづく感じている。大阪府北部地震のときに茨木市消防本部に通報が 409 件あったことを番組で紹介したが、そのうち３割から４割は「電気が消えた」という通報など、消防に直接関係ない通報で、１歳の赤ちゃんがタンスの下敷きになって通報した方は、４０分間電話がつながらなかったということだ。被災した方々にとってはそれぞれ一大事だが、全体を知ることで１人でも多くの命を救うことになるのではないかと痛感した。それが原点となり、さまざまな消防署の協力を得て、今回の番組を制作した。実はこの番組でもっとも反響が大きかったのが消防関係者の方からで、439 の消防本部はすぐにアンケートに回答し、今も再放送に関する問い合わせが来ている。議論につなげていくべきではないかという指摘があったが、放送局として継続して取り組むべき課題だと痛感している。今回取材したディレクターや記者は、阪神・淡路大震災のことを実体験としてあまり知らない世代も多く、取材してこのような現実があったことを知り、本当に驚くとともに、大阪府北部地震でも同様のことが起きたことを感じていた。また、ＳＮＳやＡＩが活用できるのではないかという視点も持ちながら、こうした若い世代が番組を制作したことは非常に大きく、まさに先ほど指摘のあった「世代をつなぐ」という役割を果たせればと思っている。来年以降も、そうした番組を作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月１５日(金)の「ニュースほっと関西」ではしかに対する情報を発信していたが、今も予断を許さない状況で、これが夏まで続いたら大流行になりかねないと感じている。それを少しでも食い止めるために情報発信してほしい。

○　２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第５回「“ノーベル賞会社員”～科学技術立国の苦闘～」を見た。かつて科学技術に携わっていた立場から見て、非常に考えさせられるよい番組だった。

○　２月１９日(火)の「ニュースウオッチ９」を見て、エンターテインメント化しすぎているのではないかと感じた。プロレスラーの引退のニュースが伝えられていたが、フォークで人を刺したり、血だらけになったりしているような過去の映像が、ＮＨＫで放送されることに疑問を感じた。

○　２月３日(日)のＢＳ１スペシャル「独裁者ヒトラー　演説の魔力」では、世界でポピュリズムが広がりつつある中で、改めて考えさせられる非常によい番組だった。

○　事件報道で、警察発表に基づき、容疑者がマスメディアやネットで報道された後、裁判の結果によってえん罪が判明することがあるが、こうした場合、報道した側は謝罪することはあるのだろうか。また、容疑者の名誉回復にはテレビ局としてどのような方法があるのか気になっている。

（ＮＨＫ側）

実名で報じた場合は、実名で名誉回復を図るのが原則だが、当事者が実名での報道を望まないケースもあるので、できるかぎり本人や関係者に連絡を取って、どういう形で伝えるか、意向を確認し、検討することが大事だと思う。一方、報道機関が、警察や検察の発表、あるいは起訴状の内容を伝えた場合には、基本的にそのことで名誉毀損に問われるということはないと考えており、裁判の判例もある。我々としては事実をしっかり伝えていくという基本的な姿勢で、今後も報道していきたいと思っている。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１９年１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、バリバラ「“きょうだい”の悩み」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	矢崎　和彦	((株)フェリシモ　代表取締役社長)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜バリバラ「“きょうだい”の悩み」（１２月１６日(日)）について＞

○　日常的に考えるテーマではないので、とっつきにくいと感じたが、番組を見ているうちにどんどん引き込まれた。知的障害の姉のいる、ＮＨＫディレクターの実体験に基づいて構成されていたので、説得力があり、心にとても響いた。“きょうだい”という視点から見た障害との向き合い方という制作意図は興味深かったし、ディレクターの人柄にも感銘を受けた。また、福祉施設にいるときのお姉さんの輝きには拍手を送りたくなった。人はどんな状況であれ、周りの人達から役割を与えられた時にこそ、人間性を回復するのだと改めて感じた。「バリバラ」という番組の存在を初めて知ったが、こういう番組こそ、総合テレビや、より多くの人達に見てもらえるような時間帯に放送してほしいと思うし、ＮＨＫスペシャルなどでも取り上げてもらいたいテーマだと思った。

○　お姉さんの変わる様子を見て、障害のある人の意思を尊重することの大切さを改めて感じた。最近、障害者の方も一緒に走るマラソン大会もかなり増えているが、走ることが好きでも、家族の理解がないことも多く、大会に来ている人たちは本当にわずかだと聞いたことがある。この番組は、視聴者だけでなく、障害のある方の家族の意識づけにもなると思った。弟さんの「姉は人とは違う」ということばやディレクターの「姉は３０歳になっても赤ちゃん」ということばは衝撃的だったが、まさに家族である当事者にしかわからないことで、「バリバラ」でなければなかなか踏み込めない、興味深い内容だと感じた。本人が行きたいと言っていたが、お姉さんが大阪に行ったところも見てみたいと思った。ただ、民放の番組のテーマ音楽が流れるパートがあったが、音楽とのギャップがかなりあり、その演出が気になった。司会の山本シュウさん含めて出演者のバランスもよく、あっという間に見ることができた。

○　最近の「バリバラ」は、タイトルがわかりやすくて、興味を引かれることも多い。今回焦点をあてた当事者が、番組スタッフだということに驚いた。お姉さんが家族の中にいるときと、施設にいるときのギャップを浮き彫りにしていたが、お姉さんは家では一定の役割を演じなければいけないと思っているからだと思う。選択の自由が障害者にはないとよくいわれるが、お姉さんも服も選んだことがなく、好きな色の服も着たことがないということだった。ディレクターは、自分の家族のありのままを伝えていたが、かなりの覚悟が必要だったと思う。同じく福祉番組の「ハートネットＴＶ」は、どちらかというと問題提起をするドキュメンタリーのような番組で、見た後に悲しくなったり切なくなったりすることがよくあるが、「バリバラ」は明るくて見ていて楽しい。司会の山本さんのすばらしいファシリテーションと、コメンテーターの玉木幸則さんの皆の意見を受け止めてくれる包容力が大きな魅力だと感じている。また、「障害＝かわいそう」ではなく、マイノリティーを隣人として取り上げており、潔さや爽やかさを感じる。「バリバラ」はＥテレの中でも“ぶっ飛んでいる”感じが好きだが、私自身、最近、ＮＨＫの話題をするときに「真面目に“ぶっ飛んでいる”」という表現をしている。「紅白歌合戦」をはじめ、年々その度合いが大きくなっていると感じるが、「バリバラ」はその先駆的番組のように思う。

○　「バリバラ」を初めて見た時は、正直かなり驚いたが、本当にいい番組だと思う。ただ、障害者本人や、障害者の家族、周囲の人など、その立場によっていろいろな見方をされる番組だと思う。その関係性の一つが今回の“きょうだい”だが、いろいろな人がいろいろな見方をすることをわかったうえで、臆せず取り組んでいるところがすばらしいと思った。今回の「“きょうだい”の悩み」は、現実はもっと厳しいような気もするが、希望が見えたようにも思う。大人になればなるほどいろいろなこと

を考えてしまうが、２５歳のディレクターの気持ちが素直に出ていたと思う。お姉さんが家と福祉施設では全然違うことを発見したディレクターが「今まで自分が言ってきたことを全部お姉ちゃんが理解していたとしたら大変なことだ」と話していて、それは本音だと思う。そこまで話ができたのは、お姉さんとの距離がかなり近づいたのではないかと思う。見ている人にも“きょうだい”のことをもっと知らないといけないと思わせたのではないか。また、取材中、お姉さんはカメラの存在に気づいて、意識的に振る舞っていたのではないかと感じた。姉妹でテーマパークに出かける続編を見たいと思うが、お姉さんだけではなく、ディレクターの心の動きや大変さがわかる番組になることを期待している。

○　障害者の“きょうだい”の視点からの番組づくりには驚き、新鮮に感じた。「物心ついた時から、姉は家族みんなで守っていかないといけない存在で、姉の存在を隠したかった。」というのは非常に正直な感想で、しっかりと自分に向き合わないと言えないと思った。家庭では、お姉さんは食事も歯磨きも母親に介助されていて、おとなしく生活している一方で、通所している施設では、積極的に意思表示をしておしゃべりして笑い、料理の手伝いもしている姿を見たときには少し胸が痛くなった。外ではあれだけ能力があるのに、「きょうだいの集い」代表の持田恭子さんが言っていたように、関係性が近すぎて、親きょうだいの「守らないといけない」という気持ちを反映して、家庭の中では「姉はいつまでも赤ちゃんのまま」なのかと思った。２人での初めての外出の様子は、２人の優しさが感じられて、ほのぼのとした気持ちになった。花があれば歌って教えてくれたり、自分の好きな服をしっかりと選んだりと、お姉さんは、積極的に意思表示ができていた。また、今、妹であるディレクターが生活している大阪のテーマパークによほど行きたいのだとしみじみ思った。少し気になった点を言うと、弟さんは前から施設でのお姉さんの様子を知っていたので、ご両親もかなり前から知っていたと思う。それなのに、なぜお母さんは、お姉さんの食事の介助をしているのだろうか。お母さんは何があっても娘を守っていかないといけないと今でも固く思っているのかと感じた。

○　「バリバラ」を初めて見たが、すばらしい番組だと感じた。最近になって障害者を取り上げたものもかなり出てきており、よい時代になったと思うが、「障害者でもこんなに頑張れる」など差し障りのないメッセージが多いように思う。それに対して今回の「バリバラ」では“きょうだい”からの視点でテーマを取り上げていて、ディレクターの家族にも当然苦悩も絶望もあると思うが、お姉さんをいとおしく思う家族の愛や戸惑いが素直に取り上げられていたところがよかった。さらに、もうひとつのテーマだと思ったのは、意思表示をどれぐらい引き出せるかというところだと思う。大

阪に行きたいということは、好奇心があり、学習の可能性があるということだ。知的障害者も一般的な障害者と同じ教育の機会が与えられるべきだと常々考えているので、こうした課題もしっかりと取り上げてほしい。また、これからパラリンピックのニュースが随分出てくると思うが、パラリンピックは身体障害者中心なので、知的障害者のスペシャルオリンピックスも、明るい視点から取り上げてほしい。ただ、スタジオに障害者の方が出演しているのはすばらしいと思うが、ナレーションにエンターテインメント性は必要だろうか。障害のある家族がいて苦しい思いをしている人も多いので、そのバランスを配慮してほしい。

○　「バリバラ」は、粘り強く取り組んでいるということに改めて敬意を表したい。“きょうだい”の悩みについて大変説得力のある番組だったと思う。番組では、「あなたならできる」というアプローチや、意思を引き出せるコミュニケーション方法の重要性が語られていたが、社会全体でも取り組むべき課題として意識をしていかなければいけないことだと思う。大変いい番組だったと思うので、これからも頑張ってもらいたい。

○　一つの家族で同じ時間を過ごしても、受け取るものはさまざまで、ディレクターが番組を作ることによって、姉が受け取ったものと自分が受け取ったものをつなぎ合わせようとしていたのでないかと思う。継続的に、お姉さんが社会参加しているときの笑顔などを見たいので、続編を企画してほしい。

○　重度の知的障害のある姉を家族に持つディレクターが作っただけあって、説得力のある番組だった。番組に協力した家族の決断にも敬意を表したい。非常に重いテーマだが、明るさを失わず、なぜかいつもの「バリバラ」よりもフラットな気持ちで見られた。番組は、子どもの頃を振り返り、母親がお姉さんにかかりきりで、嫉妬の感情からお姉さんを嫌っていた時期のことや、やってはいけない意地悪などのディレクターの告白から始まり、生まれて初めて弟さんとお姉さんのことについて話し合い、「街の人の視線が気になる。」「お姉ちゃんが人と違うことを知られたくなかった。」など、ストレートな思いが心に突き刺さった。ディレクター以外の別の“きょうだい”たちも、町の人たちから受ける視線に悩み、その思いを友人などにも伝えにくいということだった。玉木さんの「２１世紀の今、“きょうだい”がいつまでも障害のある人の世話をしなければならないというのは過去の話。しんどい時はしんどいと言えばよい。」というコメントに感動し、そこから引き込まれた。後半、ディレクターが施設を訪れ、お姉さんのはつらつとした姿を知り、そこには、自立を意識したプロの職員の手助けがあって、お姉さんたち、障害のある人たちは元気よく「自分のことは自分

でできる」と言っていた。実にはつらつとして、うそ偽りのない喜びに満ちあふれた顔があった。そして、ディレクターはお姉さんに初めて一緒に出かける提案をしたが、「行く」、「行けない」の自問自答の中にお姉さんの精一杯の思いが詰まっていた。テーマパークの名前を繰り返し言うのはまさに意思表示だと思った。今回は下北沢までの散歩だったが、大阪のテーマパークまで行く企画を是非見たい。これまで「バリバラ」を見た中で最高の番組だった。

○　今回の「バリバラ」は、障害のある兄弟姉妹を持つ方の悩みがテーマだったが、視聴した人それぞれの立場で、自分のことに置き換えて考えることができた番組だったのではないか。若手のやる気を奪ってはいないか。決まったことを渡すだけになっていないか。自分としては常に悩むところだ。障害のある方が家族にいる家庭の悩みは、どれだけテレビで見ても、当事者でないと理解しきれないと思う。また当事者も、きっと表面的なことばでは言い表せない部分もあると思うし、今回は悩みを述べるだけにとどまったが、将来のこと、経済的なことまで考えたら、まだまだ重い問題だとは思う。しかし今回、少なくとも、ある面で共感を持てたことによって、親近感を抱くことができた。お互いの個性を認め、優しくも厳しくも、人格を持つ個人として尊重し接することが大事なことだと思った。最後に、今回の番組に流れるすがすがしさは、ディレクターの若い感性があったからこそだと思う。気負うことなく、最後まで気持ちよく“気楽に”見ることができた。またいつもながら、玉木さんのあたたかさ、健常者と障害者の懸け橋としての存在感にホッとした。

○　障害のある人の“きょうだい”の気持ちや悩みについて考える回で、ＮＨＫ入局２年目のディレクターが、知的障害がある姉をもつ“きょうだい”当事者として企画・取材していたが、番組制作に協力したディレクターの家族の勇気とディレクターの制作者魂に感服した。

（ＮＨＫ側）

「バリバラ」は、この１年、身近にいるはずなのに、社会の表に出てこない障害や問題に取り組み、そのことばを知ってもらうという試みを続けている。例えば、場面かん黙やトゥレット症候群という症状は、街で目にすることがあるが、その病気の実態がわからないまま差別的な目で見られていることもあるので、まず知っていただくことが問題の解決の一歩につながるということで、番組で取り上げてきた。今回の“きょうだい”についても、恐らくここにいる方々の親族や友人に“きょうだい”はいると思うが、その人

たちがどのような苦悩を抱えているかはなかなか表に出てこないので、引き続き考えていく。今回、インターネット上で“きょうだい”ということばが話題になった。そうしたことも含めて、今後も取り組んでいきたい。それを社会に定着させるとともに、一緒に考えていくことで社会の改革につなげていくことが最終目的だと考えている。

（ＮＨＫ側）

これまでの福祉番組と違うところは、あくまでも当事者の目線に徹底的に立ち、バラエティーという演出スタイルをとっていることだ。時事的な内容もあるが、当事者の人たちが悩んでいることや気になっていることをテーマとして取り上げてきた。スタジオでは、障害者やセクシャルマイノリティーなどの当事者がマジョリティーになる場所を作り、ナレーションでは、言語障害のある俳優・神戸浩さんが、暗くなりそうな話題でも明るくして、番組の色を作っているところもある。ただ、テーマによってはアナウンサーに読んでもらうこともある。今回は、番組の冒頭から“きょうだい”からの厳しい意見を紹介したが、当事者の人たちがたくさん見ているので、そこに対してしっかり答えられるものにならないと、放送には出せないと思っていた。今、地域の中で、障害のある人たちも暮らしていけるようにしようという流れがある中でも、現実には家族にかなり負担が大きいし、ディレクターに限らず、それに対し“きょうだい”が直接コミットしないままでいるところがあるので、お姉さんときちんと話をするところから制作がスタートした。テーマパークの話は撮影の時に初めて出てきた話だ。今回、ディレクターもお姉さんと関係が作れていないということに気づいた部分もあるし、番組を見た人の中に「うちはそんなに簡単ではない」という思いを持った人もいると思う。それに対しても考えていくヒントを出していく必要があると思うので、今後もしっかり取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

今回の「バリバラ」は、障害者の家族を取材対象にして、家族の問題や、親子の問題、社会の問題など、普遍的な問題に取り組んでいるところに、一つの意義があると思う。これからも継続していき

たいと思っている。「真面目に“ぶっ飛んでいる”」のがＮＨＫらしいという意見をいただいたが、チャレンジをしていくことが大事なことだと思うので、今日皆さんから頂いた意見を参考に、さらに番組、いいニュースづくりに役立てていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月４日(火)の「ニュースＫＯＢＥ発」を見た。神戸アイセンターの患者の生活を支援する施設を紹介した企画は興味深かった。引き込まれたのは「匠（たくみ)」のコーナーで、今回はクレーンのオペレーターの仕事が紹介されていたが、もし過去放送分のストックがたくさんあるようならば、小中学生が将来の職業の選択肢を考えるうえで最適な教材になると感じた。夜、食事をしながらＮＨＫを見ることが多いが、全国放送の番組からローカル放送に切り替わる際のマイナー感を残念に感じる。神戸は洗練された生活文化を誇る街であり、ファッション都市、デザイン都市でもあるので、アナウンサーにもきちんとしたプロのスタイリストをつけて、スタジオのセットなどもより洗練された神戸らしいものにしたらよいのではないか。ＮＨＫのセンスは神戸局から生まれるといった感じで、全国放送をむしろ牽引する存在になれば、神戸の視聴者はより誇らしい気持ちになると思う。

○　「ニュースＫＯＢＥ発」の神戸アイセンターのニュースは、貴重な情報だと感じた。この特集は、ほかの特集と同様、１０分程度だったと思うが、１人の患者を追いかけていたので、途中で注意がそれてしまった。一方、１２月１２日(水)の「おうみ発６３０」の１０円たこ焼きの特集は、興味を引くポイントが随所にあったように思う。「ニュースＫＯＢＥ発」の「匠」のコーナーは、映像と文字だけで構成されていてとても美しく、メッセージ性が高いと感じた。１２月７日(金)の「あすのＷＡ！」の「きらり紀州人」で、インタビュアーが緊張しすぎていたので、もう少しリラックスしたほうがメッセージは伝わると感じた。１２月１２日(水)の「ならナビ」の農業女子の企画は、映像がきれいだったが、スリランカ出身の女性が日本の農業に従事するというだけでニュースになるのかと思った。１２月３日(月)の「ニュースほっと関西」は、可もなく不可もないと感じながら見ていた。ただ、男性はスーツなのに、女性のアナウンサーの服装はいつもふだん着のようで気になる。もう少し大人の女性のイメージを演出してもよいのでは思う。

○　大津局の「おうみ発６３０」と「ならナビ」を続けて見ると、奈良らしい、ほのぼのとしたニュース番組だと感じた。「ならコレ！」で、既婚のスリランカ女性を紹介

するのに使われた「農業女子」という表現だが、はやりの「～女子」「～男子」のいい方は、安易に使うべきことばではないように思う。また印象として、恋愛対象を想起させるニュアンスも含むので、腰を落ち着けてじっくり農業に励まれようとしている女性を紹介することばとしてはふさわしくないと思う。また、「農業女子とは農業の分野で活躍する女子のことで、いま注目されています」との説明もあったが、定義であるかのように言い切ってしまっていいのだろうか。そのほか、ニュースの映像で気になる点が２点ほどあった。近大医学部奈良病院の会見映像では、会見場の様子は入れずに、ストレートに院長の話に入ったほうがわかりやすかったと思う。また、ポインセチアの展示映像で「色とりどりの」という字幕スーパーの背景の映像はほぼ赤と白のポインセチアしかなかった。また、最後のカットは動きの少ない落ち着いた映像で終わったほうが余韻を楽しめたと思う。時折流される「なつかしの映像」は、２０～３０秒ぐらいの大好きなコーナーだ。ふるさとの歴史や風土を再認識するという意味で、どんどん流してほしい。天気予報では、櫻井幸彦さんの視線はカメラ目線で、手は背景の天気映像のほうなので、櫻井さんの顔を見たらいいのか、手の示すほうを見たらいいのか落ち着かない。天気図を示して説明するときには、櫻井さんも天気図に視線を向けたほうが、わかりやすい解説になると思う。

（ＮＨＫ側）

「農業女子」がニュースになるのかという指摘については、明日香村が、他地域からの定住に力を入れているので、そういった意味合いも含めて、もう少し丁寧にプレゼンテーションしていけばよかったかもしれない。奈良県北部の話題や、神社仏閣や遺跡のニュースが多くなりがちだが、南部との差が大きいので、中南部の話題や神社仏閣以外の話題もできるだけ取り上げている。

○　「ニュースほっと関西」はテンポがよく、安心して見られた。さまざまなジャンルの話題があり、もともと興味がなくても興味が持てるようなニュースもあり、あっという間に見終わった。１２月４日(火)の「ニュースＫＯＢＥ発」は、拳銃の偽造のほか、指定暴力団関連が２つなど、暗いニュースが多く、見ていて少し長く感じた。いずれも大事なニュースではあるが、県内の季節感のあるニュースなど、ほっこりするニュースがあればよかった。例えば、１２月４日の気温は２０度を超えたので、真夏のような１日だったことをインタビューなどで伝えたらよかったと思う。コメンテーターなしで、３０分の番組をうまく構成することは難しいので、ホームページで動画も紹介されている「匠」のコーナーを設けることで、見やすくはなると思うが、７つのニュースはかなり多いと感じた。

（ＮＨＫ側）

事件事故などが多い日もあるが、番組では温かいニュースもできるだけ取り入れながら、幅広い内容にしていきたい。神戸局では全国の地域放送局に先がけて８Ｋコンテンツの制作に取り組んでおり、今年度は「匠」シリーズ。伝統工芸の分野だけでなく、パントマイムのいいむろなおきさんや、老舗の帽子専門店のデザイナーの方など、さまざまな技術を持った方を取り上げて月１回制作し、「ニュースＫＯＢＥ発」でも紹介している。指摘のあったキャスターの服装やスタジオのセットについては、来年度に向けて検討していきたい。

○　「ニュースほっと関西」を見ていて、ローカルニュースとして違和感はなかったが、事件事故、文化、スポーツ、季節の話題などに加え、2019 年度後期の連続テレビ小説「スカーレット」についてなど少し盛りだくさんにも感じた。また、曜日ごとにテーマを設定して、例えば、文化のテーマの日には美術館特集を少し深掘りするなど、視聴者にとって身近で役立つ情報も入れてほしいと感じる。その後に続く「ニュース７」で大相撲の話題がトップニュースとなっているのを見た。たびたびトップニュースになるようだと、オーダーについて少し検討したほうがいいのではないかと思った。

○　「ニュースほっと関西」を見た。後半の大阪府向けの放送の「関西空港国際線の出発エリアでの農産物販売」のニュースは、帰国時に検疫に引っかかるかもしれないなま物を日本出国の直前に観光客に売るというかなり思い切ったことをしており、これからうまくいくのだろうかと感じた。有田市認定みかんのニュースは市を挙げてみかん農家の保護と育成に携わっていてすばらしいと思ったが、こうした大阪以外の話題などを大阪府向けの時間帯に放送するのはなぜだろうか。ＮＨＫ大阪放送局は近畿地方の中心的存在なので、これからもしっかりとした取材に基づいた番組の制作と放送をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

特集は記者やディレクターが取材した映像をもとに、視聴者がわかりやすく、興味を失わないように適正な長さを見極めながら編集している。また、「ニュースほっと関西」で和歌山など他府県の話題を大阪府域向けに放送することについては、大阪局としては、後半も含めて近畿全体のニュース番組として制作している。女

性アナウンサーの服装について、意見を参考にしたい。また、スタジオは、新年度に向けてリニューアルを検討している。

○　出張に行くと、必ず午後６時半にはホテルに戻って各地のニュースを見て楽しんでいる。「おうみ発６３０」は録画して、寝る前に毎晩きょうのできごとを確認している。１０円たこ焼きの男性は地元では有名だが、知らない人もいるので紹介してもらったことに感謝している。最近の名物コーナーは天気コーナーだ。滋賀県民にとって天気は本当に重要で、東西に長く河川が多いので、滋賀県は天気にまつわることばもたくさんある。川ごとに気候が変わることや、階段のように雪がふえるところだが、そういったことを検証していておもしろい。担当している気象予報士の石井元樹さんは本当に好感度が高く、語り口もおもしろい。今回「ニュースＫＯＢＥ発」も見てＢＧＭがおしゃれだと感じたが、「おうみ発６３０」はシュールなだじゃれが飛び交っていて、掛け合いがおもしろいと思う。ビデオ投稿のコーナーで一般の方が映像に映り込んでいることがあるが、本人も知らないうちに放送されていることもあるかもしれないので、注意してほしい。

○　「おうみ発６３０」と「ならナビ」を見たが、社会ニュースが並んでいて、全体の流れとしては可もなく不可もないと感じた。「おうみ発６３０」では、例えば滋賀県の甲良町の町長と議会との対立はかなり根が深いと思うが、町長の報酬カットを淡々と伝えていた。その後のフォローはされてるのか気になった。１０円たこ焼きの話題は心温まる話で、店主の水野晃男さんを含めて地域の方々が支えているというニュースだった。このような地域の人たちのさまざまな志、ネットワークがどのように広がっているのかを掘り下げて取材してほしい。

（ＮＨＫ側）

「おうみ発６３０」では、毎週火曜日「しがリサーチ」というコーナーを設けていて、ニュースをさらに掘り下げその後の展開も伝えている。１０円たこ焼きの話題は評判になって、放送後に応援したいと申し出もあった。その日の「ニュースウオッチ９」でも全国放送されて、かなりの反響があったと聞いた。また、気象予報士の石井さんは、「おうみ発６３０」だけでなく、正午前にも県域向けに天気予報を出している。2018 年の台風の際も、滋賀県向けに大規模に情報を発信した。

○　１２月４日(火)の「ニュース６３０　京いちにち」で、世界最大のホテルチェーン

が京都府内の３か所に開業するというニュースが取り上げられていたが、冒頭で紹介されたイラストがどこのエリアのホテルなのかわかりにくかった。南山城村の村長や住民のコメント、お茶の生産体験ができるプランが紹介されていたが、それ以外の京丹波町、宮津市の人たちの声やプランについても知りたかった。地元の人間はホテルを利用しないが、ほかのエリアの知人に質問されることが多いので、今後の動向を特集してほしい。「京都カルチャー」のコーナーで、脳梗塞の後遺症を乗り越えて作品作りをする画家・河村武明さんのことを丁寧にリポートしていて、作家自身の人柄や思いがよくわかってよかった。実際、河村さんの個展に行ってみたらいろいろな作風の絵があったので、作品のこともう少し紹介してもらえたらよかったと感じた。番組の最後に必ずきょうのおさらいがあるが、３０分の番組に必要なのだろうかと思う。

○　「ニュース６３０　京いちにち」を見た。番組で触れられていた北海道大学の遺骨返還のニュースは先に知っていたので、京都大学でも琉球王家の遺骨の返還をめぐって同様のことがあったのかと思った。大学側が謝罪しない理由について取材を重ねてほしいと感じた。世界最大のホテルチェーンの進出の話題については、京都府の地域振興政策と、京都市の思惑と、地元の期待のそれぞれが少しずつ違うと思うので、その点をもう少し報道してもよかったと思う。インタビューで名前のテロップを出すタイミングが少しずれていたのが気になった。竜巻注意情報を伝えていたが、台風情報や地震情報などと違って理解しにくいので、イラストや実際の雲の様子などを見せてもらいながら、どういう雲行きになったらさらに危険なのか、どういう避難をすればよいのかを知りたい。実際、竜巻による被害を目にしたことがあるので本当に怖いことは知っているが、竜巻注意情報が出ても、イソップ童話の「おおかみが来るぞ！」のようになってしまいかねない。また番組の冒頭などで使われるお天気カメラの映像が四条大橋の映像ばかりなのは残念に思う。

○　１２月２７日(木)の「京いちにち　年末スペシャル」(総合 後 6:10～7:00 京都府域)では、京都のいろいろなことが紹介されていたが、 この１年の振り返りにとどまらず、災害や今年積み残した問題も紹介しながら、行政でお金をかけて行うことを伝えるなど、来年の展望や課題もよくわかった。

（ＮＨＫ側）

世界最大のホテルチェーンの開業のニュースは、取材にあたったのが京都府南部の担当の記者だったので、南山城村のケースが中心になった。大きなニュースなので、今後も３か所の計画を引き続き追っていきたい。きょうのおさらいについては、番組の途中に

帰宅する視聴者から「きょうはどんなニュースが放送されたかを知りたい」という声もあり、そのあんばいは検討している。竜巻注意情報については、大津局や和歌山局のように、来年度から専属の気象予報士によるよりきめ細かな気象情報を届けていく予定だ。

（ＮＨＫ側）

和歌山としては地元の魅力を地元の人にまず知ってもらうという大きな目的がある。かなり以前から「防災豆知識」は毎日放送していて、新年度もリニューアルしてさらにいいものにしていこうとしている。防災に関するニュースは、一日一本必ず入れることを目標としていて、今後も県民の防災意識を醸成していきたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは、現在３つの大きな経営方針を立てていて、そのうちの大きな課題の一つに地域改革がある。地域改革とは、県域向けのローカルサービスを中心に、視聴者のニーズにあった情報をきめ細かく届けて、サービスを充実させていこうという考えだ。全国５４局の放送局のネットワークを生かしていくことが、ＮＨＫの最もいいところで、これだけの規模のローカルネットワークを持っている放送局は世界でもあまり例はない。視聴者のニーズに合わせて、きちんと充実させていきたいと思っている。指摘のあった、県域ローカルに変わるときの「マイナー感」は出ないようにすることは課題の一つでもあるので、服装やスタジオの印象などについても考えていきたい。また、ニュースのオーダーに関する指摘については、ニュースの価値も含めて、一般の人たちの興味はどの辺にあるのかというところなど、工夫をしているところで、いろいろな意見を頂きながら改善していきたい。また、ＮＨＫは報道機関として放送の自主・自律は生命線だと思っていて、信頼される公共放送を維持するために不可欠なものだ。公平・公正であること、不偏不党であること、そして、放送の自主・自律を貫いていくことが、基本中の基本だと全職員が肝に銘じているので、さまざまな意見や批判も頂きながら、そうしたことをきちんと実現し、守っていけるようにしていきたい。

○　１２月２３日(日)の「女子第３０回全国高校駅伝」（総合 前 10:05～11:54、ラジオ

第１　前 10:05～11:55)、１月１３日(日)の「第３７回全国都道府県対抗女子駅伝」(総合 ラジオ第１　後 0:15～3:10)では、ＮＨＫがありのままのレース展開を伝えていたのはよかった。民放では作り込んで、あおるような実況をすることもあるが、見ている人にとってはもちろんのこと、特にアスリートの今後のことを考えると、しっかりとした結果を淡々と伝えることが大事だと思う。

○　１２月３１日(月)の「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」はとてもよかった。ＮＨＫの枠にはめず、アーティスト本来のステージに近づけていくような感じの設定ができていたように感じた。また、知らない世代にもわかるような構成や内容になっていた。単なる歌合戦ではなく、平成の締めくくりに、今の日本の文化をいろいろと紹介できていたと思う。

○　最近のＮＨＫの番組はおもしろいと感じており、ＮＨＫスペシャルや特集番組に感心している。その一方で、民放のようにタレントが場を盛り上げるような番組もある。視聴率も重要な評価指標だが、ビジネスモデルが民放とは根本的に異なるＮＨＫだからこそ、感性と信念と哲学でよりよい番組作りをしてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

タレントに出演してもらうことについての指摘だが、ＮＨＫの番組は、若い人たちがあまり見なくなっているという現状もあり、どうしたらもっと見てもらえるようにするかという工夫をしている。その取り組みの中で、試行錯誤しながら、チャレンジをしていきたいと思っている。

○　１２月３１日(月)の「ゆく年くる年」(総合 後 11:45～1 月 1 日(火) 前 0:15)で、興福寺の中金堂が紹介され、うれしく思った。各地をつなぐため、短時間になるのはしかたないが、大きな番組でも紹介してほしいと思う。なお、「中金堂」「法相柱」などのテロップの背景が、青海波と市松模様にキラキラ星が輝くようなデザインで、正月のおめでたい気持ちはわかるが、「ゆく年くる年」の落ち着いた番組作りとは少し合わないと感じた。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１８年１２月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。会議では、「ＮＨＫ経営計画（2018-2020 年度)」の修正について説明した後、事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「どうなる！？２０２５大阪万博」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	添田　隆昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	田辺　眞人	(園田学園女子大学　名誉教授)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜かんさい熱視線「どうなる！？２０２５大阪万博」（１１月３０日(金)）について＞

○　行政や経済界では万博誘致が成功するという空気はなかったし、開催に向けても資金をどうするのかなど課題がある中、この番組の制作は難しかっただろうと思う。テレビは、大阪万博への機運を高めるうえでインパクトがあると思うので、今後もこうした番組を作るのだろうが、長期的には、万博を今後どうしていくかを考える番組や、大阪万博をどう未来に発展させていけるかという番組も作ってほしいと思う。

○　万博開催が決まり、急いで作った番組のように感じた。番組を見て、1970 年以降、日本ではさまざまな万博が開催されたが、登録博は前回の大阪万博と愛知万博だけだと知った。今回の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」で、番組でも懸命にどのような博覧会になるか説明していたが、抽象的でありきたりな感じで頭に入ってこなかった。吉村洋文大阪市長のインタビューを聞いても、大阪への誘致に全力を傾けていて、中身はまだこれからという印象で、番組を作るうえで具体的な説明をするには限界を感じた。大阪万博の跡地がＩＲ（統合型リゾート）に活用されることは賛否が分かれると思うが、首都圏に比べて沈んでしまった近畿の経済が少しでも活性化されたらと思う一方で、大阪万博の工期が遅れたり、ばく大な赤字を抱えたりすることを心配している。1970 年の大阪万博のあと 1973 年にオイルショック、1990 年の花博のあと 1991 年にバブル経済がはじけた。どちらも開催中は好景気で、終わったあとは時代の転換期となるような経済危機に直面していたので、万博が開催される 2025 年は関西や日本にとってどんな年となり、終わったあとはどうなっていくのかと思いながらエンディングを見ていた。

○　万博の建設費用は、国、府・市、経済界で３分の１ずつ負担するということだった。公共残土で埋め立てをする予定だったが、工期を短縮するため、埋め立て用の土の費用が追加でかかるというのも気になった。さらにインフラなど関連事業費では足りない費用をＩＲに依存しようとしている。２兆円の経済効果、予想される来場者数が 2,800 万人というのはすごいとは思うものの、被災地などの復興が進まない状況の中で、多額のお金が動くことに困惑している。一方で、番組の映像については、アーカイブスを利用して、1970 年の明るい万博を振り返ってほしかった。「調和」ということばがたびたび出てきていたが、その意味がはっきりとしなかった。

○　番組を見て、万博のことが何となくわかった。期待と不安の両方の要素がいろいろと入っていて、タイトル通りの番組だと思った。世界中のものと未来を同時に見せるのが万博の原点ということだが、パリ万博では動く歩道、ニューヨークの万博では二足歩行ロボットが出ており、これについては人類の技術はそれほど進歩していないと感じた。今度の万博では、学生が中心の団体・ＷＡＫＡＺＯに期待したい。国や大企業だけでなく、ベンチャー企業や若者が個人で参加できるかもしれないということは知らなかったので、これからも最新情報を伝えていってほしいと思う。若い世代におもしろい人はたくさんいるので、そういう情報を得て表舞台に出て行きたいと考える人が増えるきっかけになるといいなと感じた。一方で会場建設の工期や、多額の資金を投入することに不安を感じた。また、かなり昔のパリやニューヨークの映像だけでなく、最近開催されたミラノや上海など最近の万博の映像があればもっとワクワクで

きたと思う。最後に、ゲストの嘉門タツオさんが「音楽や笑いも交えて大阪らしい万博ができたら」と話していたが、「大阪らしい」万博になることを楽しみにしている。

○　大阪万博にあまり関心を持っていなかったので、淡々と受け止めた。１つめは大阪万博の概略、２つめは万博の歴史、３つめは課題と、３つのパートに分けて説明されていて、内容がよく分かった。産業革命後にロンドンで万国博覧会が始まったときの目的を考えると、情報化や国際交流が進んだ中で、わざわざ万博を開催する必要があるのだろうか。前回の大阪万博が開催されたときは、為替が１ドル 360 円の時代で海外旅行にはめったに行けない時代だったので、世界中からさまざまなものを集めたパビリオンは本当に感動的だった。その後、阪神・淡路大震災、東日本大震災、大阪府の北部地震などから復興しきれていない日本が、これほどお金をかける必要があるのだろうか。これからの課題では、万博会場の予定地の夢洲がどうなるのか。また、地下鉄の延伸の話も出ていたが、万博が終わった後に会場や公共交通機関がどうなるのか。さらに、ＩＲができたら、経済的にはプラスになるかもしれないが、沿線の雰囲気が悪くなるのではといったことなどが気になる。今後は、大阪万博の開催に納得し、応援しようと思わせるような番組を制作してほしい。

○　万博決定から６日後に放送された番組だったので、内容的にもニュースのようだった。私自身、万博のことはまったく知らなかったので、番組を見て、おおまかに分かった。近所のお年寄りで万博が決定したことに感激している方々が結構いたので、とても興味を持って見た。ゲストが３人出演していたが、嘉門さんが万博通だということは知らなかった。また、あまり万博を知らない立場としてアイドルグループのタレントが出演しており、発信力がある方なので番組を見る人が増えることを期待したのかもしれないが、コメントにもう少し工夫があるとよかったと思う。番組を見てわかったことは、ばく大な資金がかかるということだが、それは番組を見なくても想像できることだ。周りに話してみたいと思ったことは、エッフェル塔がパリ万博のときにできたことぐらいで、万博のすごさはあまり感じられなかった。ゲストの大阪府立大学の橋爪紳也特別教授が「万博のような世界があることを若い人に感じてほしい」と話していたが、ＷＡＫＡＺＯの若者たちが、私たちの世代より何十歩も先に歩いている姿を見て、かなり刺激をもらった。７年後の万博に興味を持てるような番組がまた見たいと思う。

○　これまで万博に行ったことはないが、2016 年度後期の連続テレビ小説「べっぴんさん」を見たときに、1970 年の大阪万博は楽しかったんだと感じた。今回の番組はとてもわかりやすく、しっかり知ることができた。テロップが多いのでキャプチャー

を取りながら番組を見て、得た情報を周りの人に話している。県内の観光関係の人たちは、大阪万博はホットな話題だと感じているようだ。番組でいちばん楽しかったのはゲストの嘉門さんで、世界中の人とバッジ交換をしているということだったが、2025 年の万博のときには自分もしたいと思った。また、大阪万博の最初の構想段階から関わっている橋爪さんの話に興味を持ったのでもっと話を聞いてみたいと思ったし、万博のプロジェクトの資料を探して調べたいと思った。

○　私自身は、多くの方が万博の大阪開催の決定に喜ぶ様子を一歩引いて見ている。ただ、番組自体は、開催が決まってすぐに作られた番組で、意識を促すという意味でよくまとめられていて、非常にわかりやすかった。３０分の中にいろいろな要素がよく整理されており、３人のゲストも役割を果たしていた。1970 年の大阪万博や、それ以降の日本開催の万博の映像をもっと見たかった。番組ではエジソンが撮影した動く歩道の映像が紹介されていたが、エジソンが撮影している様子の映像もあれば見たかった。番組で紹介できなかった課題もたくさんあると思うので、前回の大阪万博以降で当時突き当たった問題をしっかりみつめた番組も制作されることを期待している。インターネットでかなりの情報がわかる世の中になっているが、万博会場で世界のものや生の人間に出会うアナログのよさがあると思う。今の若い人は海外に行かない人も多いが、実際出かけて生のものに触れるよさを番組でも強調すると、万博の意義がより出てくるのではないかと思う。

○　1970 年の大阪万博は、「７０年安保」のあとのお祭りのような感じで、当時は日本人全体がきたるべき未来に対する希望に満ちあふれていた。それから５０年が経過した今、人口減少や、地震や水害のリスク、国際情勢など、不安が先行する時代で、ばら色の未来が想像できない状況だ。前回の万博を経験した人間としては、未来を示すのが万博だと考えると、7 年後の開催に対する違和感はある。台風２１号で関西国際空港が水没した例もあるため、津波が起きたときに、埋め立て地を会場とした万博は果たして耐えうるのだろうかということもある。開催が決まったからには成功してほしいが、万博に対してたくさんの外国人入場者を見込めるという肯定的な意見がある一方で、震災からの復興が進まない状況で膨大な資金を使っていいのかという意見もあるはずだ。大阪での万博開催が決定した直後としては、この番組は十分だと思うが、これからＮＨＫがどう取材していくのか問われると思う。

○　大阪万博決定直後の番組として、うまくコンパクトにまとめられていたのではないかと思う。番組でも紹介されていたが、若い人が関わっていくことが大事だと感じた。たくさんのお金がかかることなので、万博開催後、「夏草や　つわものどもが　夢の

あと」だと言わなくてすむように考えていかなければならないし、ＳＤＧｓという視点で、大阪の発展に資するものにしていく必要があると思う。これからの準備過程で山あり谷ありになるだろうと思うので、ＮＨＫにはいろいろな観点から掘り下げた番組を制作してほしい。番組にはＩＲのことが出てきたが、「ＩＲ」ではなく、「ＩＲ（含むカジノ）」と表記するべきだと思う。地下鉄の整備にＩＲ事業者がお金を出すような話を聞くが、万博は半年間しかないので、結局、カジノに行く人のために整備をするように感じてしまう。

○　1970 年の万博には行かず、今もあまり関心はない。歴史的にみると、万博の功罪やその役割には疑問も感じている。ＩＲに対するＮＨＫのコメントは、やや歯切れが悪かったように感じる。ＩＲはカジノを含む統合リゾート施設だが、大阪市内でもカジノへの反対意見もあるので、万博の功罪についてはしっかり示すべきではないか。速報性が高かったとはいえるが、時代も変わり、バーチャルの情報とリアルの情報を同じ価値と考える傾向の若い人が増える中で、一つの会場にモノや人を集めて、それがどういう意味があるのだろうか、夢洲に一日３０万人来る中で、もし台風など災害が発生したら行政はどう対応するのだろうか、とも考える。

（ＮＨＫ側）

万博の大阪開催が決定したのが日本時間１１月２４日(土)の午前１時過ぎで、ＮＨＫは１時台に近畿地方向け、全国、再び近畿地方向けに、会見も含めて特設ニュースを４０分編成した。それ以降、多彩な内容で関連のニュースを伝えているが、１１月３０日(金)の「かんさい熱視線」は、これまでのニュースを羅列した番組ではなく、独自に企画した番組だ。このように、万博についての報道は総合的にお伝えしている。今後も多角的にお伝えしていく。

（ＮＨＫ側）

万博の開催地が決まって急きょ立ち上げた部分もあるが、第一弾としてまず決定して何があるのかというところから始めた。これから土や費用の問題などいろいろな課題は出てくるであろうし、負の遺産にならないようにとは思う。そこについては、住民の皆さんの疑問にも答える形で指摘すべきことは指摘していきたいと思う。一方で、喜んでいる人が多いことも事実なので、今回はこのような内容で放送した。ＩＲについてはいろいろと指摘をいただいた。実際、ＩＲの事業者から資金を出してもらって地下鉄を延伸す

るという話も出ているので、どうしても万博とセットで語られる部分もある。万博とＩＲとをセットで見るべき問題とそれぞれ個別で見るべき問題について冷静に見極めながら、バランスをとりながら伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

とにかく万博の大阪開催が決まったという事実を理解してもらうために、大阪万博が何をしようとしているのか、そもそも万博とはどのようなものなのかをまず理解してほしいと思って番組を立ち上げた。また、課題として、最近失敗した事例もあるということで、その点も含め紹介した。ただ、具体的な内容が決まっていないということもあり、視聴者にとってはもの足りない部分も多かったと思う。今後は、具体的な話や課題が見えてきたところで、ひとつひとつ丁寧に伝えていきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２日(日)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第２回「バブル　終わらない清算～山一証券破綻の深層～」を見た。番組の最後に、元日本銀行副総裁の「迫り来る危機をわかっているにもかかわらず、それを見ないふりをして、結果的に倒産してしまった」というコメントの後、「座して死を待つのか、それとも結果にかかわらず、思い切った施策を展開して局面の打開にチャレンジするのか」というテロップがあった。番組の展開からすると、結局、座して死を待ってしまった山一証券は失敗で、結果にかかわらず思い切った施策を展開して局面を打開すべきだったというようなことをＮＨＫは発信しようとしていると受け取ったが、このコメントを一般化すると問題だと思った。なぜなら「僥倖(ぎょうこう)　偶然に得る幸運のみを当てにして運営していくことは許されない」というテロップで締めていたが、このテロップは、1930 年代後半にＡＢＣＤ包囲網によって石油が絶たれてしまった状態で日本が座して死ぬより、結果にかかわらず、思い切った施策を展開して戦争を始めてしまったことを容認することになると思う。

○　重くて厳しい内容だったが、興味深い番組だった。全体のトーンがとても洗練されていて、ダークなエンターテインメント作品のように感じた。ナレーションの広瀬修子さんの声が非常によかった。今後もとても楽しみだ。オープニングで、時計の針が逆回転してらせん階段を落ちていく映像が非常に印象的で、分かっていながら止めら

れない企業悪や、関わってしまったらもう落ちていくしかない関係者の末路を象徴しているようで、「失われた２０年」というコピーが白い雲の上に出て少しずれると、雲に黒い文字でそれが映るといった細部の作り込みに意気込みを感じた。ふだんは、経済番組への関心は薄いが、最初から一気に引き込まれた。番組の中身では、冒頭で、花形の元営業マンがものすごくかっこよく登場していたが、本編では「いつ、くも膜下出血で倒れてもいいと思っていた」「毎朝、会社のトイレが満室だった」と話していて、企業戦士と言われていた人たちの本当の姿を見たような気がして切なくなった。また、社長の号泣会見は記憶にあったが、これも歴史なんだと思った。平成は軽いと感じていたが、起こった出来事は本当に重いことばかりだったとじわじわと思い起こした。平成史と銘打つには、非常によい番組だったと思う。

○　番組は全編通してすごく暗いトーンで、重さを感じながら見ていた。山一証券というと号泣会見しか印象がなく、番組を見ていても、出てくる数字やペーパーカンパニーといったものだけでなく、そもそもバブルとは何だったのかよく理解できていない。社会人としては「失われた２０年」を生きてきた世代なので、バブルには華やかな人が踊っているというイメージしかなく、番組でバブルのことをもう少し説明してもらいたかった。番組で証言した人々がまるで戦争犯罪人や容疑者のように見えて先入観を持ってしまったが、結局は企業戦士で本当のことを言えなかっただけではないかと少し冷めた目で番組を見た。

○　バブルを知らない世代からすると、バブルのころの映像を見てもまるでドラマのようで、空想の世界としか思えなかった。バブルの時代にみんなが高揚していたというのがどのようなものなのかと思いながら番組を見た。山一証券という名前も初めて聞いて、号泣会見のことも知らなかった。同世代に聞いても誰ひとり知らないほどで、語り継がれてもいいぐらいではないかと思った。一方で、それほど驚かなかったのは、最近では大企業による検査データ改ざんの問題や、スポーツ界でもさまざまな問題が起こっており、昔だけの問題ではなくて、平成３０年間の中で教訓としなければいけない出来事だと感じた。「ヒラメ社員」や「損失補填(ほてん)」など初めて知ることばがたくさんあって、とても勉強になった。一つだけ気になったのは一流企業に勤めた高学歴の社員たちはその後、どうなったのかということだ。「朝出勤するとトイレが埋まっている」などいろいろと衝撃的な証言で、とても重い気持ちにはなったが、あっという間の５０分で、とても引き込まれた。潔く現実を見ることが大事で、問題の先送りや根拠のない期待は、いかに大きな損失につながるかというのもとても勉強になった。

○　海外にしばらく住んでいて、帰国したときにはバブルがはじけた段階で、山一証券の会見はテレビで見た。わかっていない部分もあったが、この番組は相当出しにくいような情報も引き出して作られていたので、とにかくわかりやすかった。最後の「座して死を待つか。それとも結果に拘(かかわ)らず思い切った施策を展開して局面の打開にチャレンジするか。僥倖(ぎょうこう)　偶然に得る幸運のみを当てにして運営していくことは許されない。」というテロップは、８月ごろに放送された戦争を扱った特集番組と重なるような感覚があった。ただ、結論はあれだけではないと思うので、そこだけ少し残念に感じた。

○　世代によってずいぶん見方も違うと思うので、番組の導入部で当時の時代背景を簡潔にまとめたうえで核心に迫っていったほうが、もう少しわかりやすかったのではないか。番組ですごいと思ったのは、当時まさにその隠蔽を画策していた人や、上層部の人、大蔵省の担当者などが当時の話をしていることだ。当時の大蔵大臣の映像や、元大蔵官僚の「当時の姿勢に反省すべき点はある」という発言などから、国全体としても重大事だったことが、知らない世代にも伝えられたのではないか。また、東京大学に膨大な関係資料があることを知ったが、折に触れてひもといていくことも大事だと思った。番組後半で、発覚した時の会議で幹部が責任転嫁ばかりしていたという話や、追い込まれている社員たちの朝のトイレの話や、なぜ木下公明さんが極秘チームに抜てきされてそれを受けたのかというような話などは、組織人としてのサラリーマンの弱さがかなり浮き彫りにされていた。昨今のニュースを見ても変わっていないと思うので、今こそ経営者や企業の経営陣などが見るべき番組ではないか。最後に「常に最悪の事態を想定していかないといけない」というメッセージがあったが、時代が変わっても持ち続けていかないといけないと感じた。

○　株など金融経済に詳しくはないが、それでもこの番組を見てある程度分かるようになったので、よくまとまっていたからだろうと感心した。また、並々ならぬ苦労があったと思うが、特に木下さんを始め、企業戦士と言われる方々にどれぐらいの期間交渉して、こういう証言を撮ることができたのだろうかと興味を持った。外圧にさらされた、日本の護送船団方式というものが一体何なのか、さらにそれが破綻に直接つながったのかということも、分かりやすく説明してもらいたかった。また、山一証券の関係者の罪はわかりやすい一方で、大和銀行ニューヨーク支店巨額損失事件で日本政府が１か月半ほどアメリカに情報を開示しなかったのは隠匿にあたり、同じような罪を犯しているのではないかと思ったが、番組として指摘することは難しいのかと思った。

○　平成の時代が終わりを迎えるに当たって、バブル崩壊を象徴する証券破綻の真相に迫る番組で、非常に深く追及されていた。番組では、四大証券の一つであった山一証券がなぜ経営破綻したのかや、1980 年代に法人の顧客から巨額の資金を集めて運用していた証券取引が、1990 年代になって株価が下がり始めて発生した損失の補てん、その損失をとばしによって隠蔽し続けていたことなどが、株の素人にも理解できるように説明されていた。当時、日本の経済成長が止まり、株価は長い目で見れば右肩上がりで上がり続けるといった楽観的な神話が崩壊し、絶対につぶれないとされていた銀行ですら経営破綻して消えてなくなってしまう時代に入り、それ以前の概念が通用しない世の中になったことを思い出した。また、会社や組織のために忠節を尽くして働き続けることが正しいとされていた、それまでの時代の概念がこのバブルの崩壊とグローバリズムの到来によって、根本的に変化し、今も変化し続けているのではないかと感じた。平成は、後にバブルと言われる空前の好景気とその完全な崩壊によって始まったことを強く思い出した。

○　久しぶりに見たしっかりした番組で、制作者の真剣さが伝わってきた。さすがＮＨＫだと思えるインタビューで、その分非常に重い番組だった。ただ、金融庁や日本銀行の当局者たちの証言で「手段はほかになかった」「金融システム全体を崩壊させるわけにいかなかった」などの意見や、最後の元日本銀行副総裁の「常に最悪を想定して、現実になった場合実行する。最悪にならないことを祈るだけは最悪である」という証言はまさにそのとおりで、山一証券のことはニュースで見る以外のことは知らないが、この問題で大蔵省が本当に第三者だったのかは非常に疑問に感じた。ＮＨＫでも、日本銀行や大蔵省にインタビューで切り込むのは難しかったのだろうか。山一証券の元幹部の話であらわれていた危機感のなさはいまだに日本の企業に体質的に引き継がれている。それが切り口だったと思うが、番組では、問いかけはあっても答えはなかった。最後も「あえて座して死を待つか、果敢に行動するか」といった主旨のテロップも答えではなく、その答えをどこに見出していくかというヒントだ。なぜ日本の企業は変われないのか、日本企業の特有な点など少し掘り下げてもらいたかった。全体的には、今後もこうしたしっかりした番組を作ってほしい。

○　若い世代にとってはバブルがわからないということだが、当時バブルの真っ只中にいたので、今から考えればとてつもないことがいろいろあったことを思い出す。山一証券の破綻の真相は大変興味深かったと思うが、結論として、組織ファーストの考え方や会社経営幹部の自己保身などいくつかあげられているが、基本的に会社をつぶしていくいわゆる王道で、結論自体にはあまり目新しさはなかった。むしろ、どうすればよかったのかという議論が、続きにあればさらによかったではないのかと思った。

やはりバブルを作ってきた、日本の経済政策なり、金融政策というものの歴史的な見方を一度整理しておいたほうがいいのではないのか。番組では、官僚があまりにもひと事のような証言をしているが、彼らも同罪ではないかと見えてしまう。そういうところに踏み込んでいくと、ＮＨＫを評価する人が増えるのではないかと思う。この平成の時代は、自分自身が現役としていろいろ仕事してきた時代ともまさに重なるということから、非常におもしろい番組だった。このシリーズの企画を今後も期待している。

○　組織のあり方についてはまったく変わらないだろうという考えのもと、コンプライアンスや内部告発などの制度が出てくるが、上司に逆らえないといったことなど、それを上回る隠蔽体質が今でもある。こういったことは、おそらく日本型システムだけの問題ではないと思った。

（ＮＨＫ側）

番組の最後のテロップの表現のことは、重く受けとめた。バブルの背景あるいは時代背景についてもう少し説明をということだが、編集段階でどの程度伝えていくのが適正か、何度も検討した結果、現在の形になった。また、社員たちのその後は千差万別で、外資系の証券会社にかなりの社員が入ったが、その会社もまた買収されるなど、その後苦労した方が多かったと聞いた。また、出演者とどれくらい交渉したかということだが、ケースによる。交渉にあたって、番組の趣旨などをご理解いただくよう努力した。また、問いかけがあるが答えがないということについては、掘り起こしたきっちりとした事実をもって伝えるということを第一の命題にしており、視聴者に知られていない情報やいろいろな弱い立場の方々の情報などを事実として伝えるということを心がけている。

○　「ニュースウオッチ９」でも、キャスターがニュースを伝える際、最後に視聴者へ問いかける形で終わることがあるが、ＮＨＫとしてどのようなスタンスをとっているのかと気になっている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのニュースは公正中立に事実をわかりやすく伝えて、視聴者が考えるための材料を提供している。特定のスタンスに立つことはない。

○　１２月１６日(日)に「西郷どん」が終わったが、初回から通してすべて見た。必ずしも歴史の流れを追える作りではなかったかもしれないが、人間ドラマとして非常におもしろかった。オープニングの音楽の明るさがとても骨太な感じで、いかにも大河ドラマらしい曲でよかった。来年の大河ドラマも期待している。

○　「西郷どん」をとても楽しく見た。２人目の妻・愛加那が出てくる奄美大島での物語が長く描かれていたが、これまであまり語られてきてこなかった部分だったので、とてもおもしろかった。ただ、９月３０日(日)の台風２４号の関連ニュースのため、総合テレビでは放送が無くなり次の週に放送されたが、その際、番組の冒頭では、何の断りも無かったことが気になった。テロップで「台風で休止になった回を放送します」と出してもらえるとよかった。また、４月１日(日)と７月８日(日)の「西郷どんスペシャル」だが、「西郷どん」のドラマを見るつもりでいたら、突然出演者の対談が始まったので、少し驚いてしまった。

○　先日、連続テレビ小説「まんぷく」の第１０週「私は武士の娘の娘！」をたくさんの人たちと一緒に見る機会があった。牧善之助が久しぶりに出てきたらどよめきが起き、かつて萬平の共同経営者だった加地谷圭介のチンドン屋が出てきたときは大爆笑で、それぞれの家で「まんぷく」を見ていることがうかがえた。少し年上の女性たちと話をしていたら「ドキドキしながら見ている」といったリアルな声を聞けて、連続テレビ小説に対する思いがすごくあることが感じられた。

○　１０月３日(水)のガッテン！「血糖値がみるみる下がる！謎のポーズで体質改善ＳＰ」を見た。個人的なことだが、放送の３日前にかかりつけの医師から血糖値が高いと指摘されたので、食生活を変えるのと同時に、番組で見た体操も毎晩行ったところ、２か月後には正常値まで下がった。少し驚いているのだが、こうした番組を今後も放送してほしい。

○　１２月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「アウラ　未知のイゾラド　最後のひとり」(総合 後 9:10～9:59)を見た。未知の部族最後の１人というアウラ、これは本当になんとも沈痛なドキュメンタリーだ。１９世紀にタスマニアのアボリジニ、チャタム島のモリオリなどの先住民たちに起きたことが、２１世紀になっても現実にあるということで、ＮＨＫでなければあのような取材ができなかったと思う。とても印象的で感動的な番組だった。

○　「ニュース６３０　京いちにち」では、たびたび食品ロスのことを取り上げているが、１２月６日(木)の「京都クローズアップ」のコーナーで、食品ロスを減らそうと学生たちが「もったいないスーパー」を開いていることが紹介されていた。賞味期限前の食品を捨てられる前に、いろいろなところでもらって、それを無償で提供するスーパーを開いているという話だった。単なるリポートにとどまらず、実際に学生と一緒にリサイクル工場に行って、賞味期限前の物がいかにたくさん捨てられているかという映像も紹介されていた。とても訴えるものがあっていいと思った。

○　インフルエンザ、風疹、伝染性紅斑が流行していて、伝染性紅斑は、妊婦がかかると死産、流産の原因となる非常に怖い感染症だ。こうしたこともしっかりと調べて、報道してほしい。

○　子どもたちが早い時期からバーチャルな世界に慣れすぎているが、やはり体を動かし、知恵を絞っていろいろなことをつくり出すことが貴重だと再認識してもらえるような番組を作ってほしい。オリンピックが近いので、スポーツのほうに人材が流れていくのはわかるが、工芸などのものづくり、伝統・芸能など日本文化のすばらしさを紹介するのはもちろんのこと、その文化を継承していく必要性や価値について、継続的に伝えていってほしい。継承されないとあっという間に途絶えてしまう。

○　ある民放で、殺人事件の被害者のＳＮＳが番組で利用されていたのを見た。ＳＮＳという拡散されることを前提としたコメントであっても、被害者本人が亡くなってからもメディアに出続けていたら、被害者の家族はつらいと思う。法的に問題がなくても、倫理上自粛する必要があるのではないか。

（ＮＨＫ側）

当事者がどういう方だったかを示すうえで写真やＳＮＳなどを使うことがあるが、どういう形で使っていくかは非常に難しい。映像や写真によっては、非常にネガティブなイメージを喚起させることはあるので、ＳＮＳを放送で取り上げる際には慎重に扱っている。

ＮＨＫ大阪放送局
番組審議会事務局

２０１８年１１月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、えぇトコ「いにしえ街道　篠山へ～ベッキーのひとり旅～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
副委員長	山崎　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	帯野久美子	(関西経済同友会　常任幹事)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	添田　隆昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	田辺　眞人	(園田学園女子大学　名誉教授)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜えぇトコ「いにしえ街道　篠山へ～ベッキーのひとり旅～」
（１０月１９日(金)）について＞

○　ひとり旅をいざなう番組で非常によい番組だった。旅人のベッキーさんが「ひとり旅は独りぼっちだと思っていたが、感動を独り占めできることに気づいた」と語るイントロダクションは非常によかったし、自然、文化、人との出会いなどがあらゆるところに散りばめられていて、非常に癒やされる番組だった。京丹波から篠山までの人との出会いが全体のストーリーを作っていたが、ベッキーさんの表現力やコメント、

ナレーション、音楽、カメラワークが絶妙なバランスで、自然な流れを作っていた。グローバル化というと東京に集中しがちだが、訪日外国人観光客数は今年度まもなく3,000 万人とのことで、ようやく地方のグローバル化に結びついてきたように思う。現在、観光客は韓国、中国、台湾からが多いと思うが、日本を学習した旅行者が求めるのは、その土地に根づく文化や伝統、人々の暮らしで、こうした地方にしかない文化がこれから大切になってくると思う。地方の文化とは、その地域に生まれて育って働いている人にはなかなか見えにくいものだと思うので、第三者の目でこうした番組をもっと作ってほしい。非常によい番組で感動したので、機会があれば海外向けのＮＨＫワールドＪＡＰＡＮでも見たいと思う。

○　外国人が興味をひかれるような日本の伝統的な風物を紹介していて、気持ちを込めて作っているように感じた。旅は山陰街道に沿ったもので、京都市内の丹波口より始まり老ノ坂峠を越えて丹波の国に入るが、亀岡や篠山には行ったことがないので、興味深かった。亀岡市では 1,200 年前からある薭田野神社と、奉納する人形浄瑠璃が紹介されていて、外国人観光客が見たら喜びそうだと感じた。日本の刀剣生産の中心地だった京都において、今では刀剣鍛冶が亀岡市内にただ１人だということに驚いた。一般の人向けの小刀を作る鍛冶体験は外国人に受けると思うが、神事でもある刀剣の製作を一般向けに間口を広げてでも、この伝統を守っていきたいという願いを感じた。昨今の刀剣ブームによる“刀剣女子”の増加が少しでも後押しになればと思った。城下町の篠山市河原町には、伝統的な町並みが残っていてよかった。福住で紹介されたデカンショ節が、篠山が起源だと初めて知った。また、撮影で使われていた亀岡の英国風の街並みを調べてみたら、国道沿いにあって行きやすそうなので、機会があればぜひ行ってみたい。明治の廃藩置県を契機に、丹波国は京都府と兵庫県に分断されたということだが、かつて同じ国だった亀岡と篠山が今はわかれてしまっているのは少し残念な気がした。

○　大変美しい構成で楽しめた。映像には、いつもは整理されている道に木々がだいぶ転がっているのが映っていて、台風の跡が生々しく残っていた。台風通過後だということをきちんと説明してもよかったと思う。空中写真家が紹介されていたが、上空からの風景をもっと楽しみたかった。首塚大明神や、丹波といえば焼き物の町なので丹波立杭焼の紹介もあればよかったと思う。また、突然イギリス風の風景が出てきたことに戸惑い、番組の最後まで引っかかっていた。最後で「実際にある場所なので探してみてください」ということだったが、もう少し説明があったほうがよかったと思う。全体的には京都市から老ノ坂峠を通るルートでいろいろなものが紹介されていて、興味深かった。丹波の篠山市内にある春日神社の境内には、篠山藩第１３代藩主・青山

忠良が寄進した能舞台が今も残っているので、紹介してほしかった。

○　海外向けも意識して作られたということで、これまでの「えぇトコ」とはずいぶん違う雰囲気に感じた。映像の色や雰囲気がノスタルジックで、京都の街が少し違って見えた。老ノ坂峠に入ると、タイムスリップしたように感じられてどんどんのめり込んだ。人形の背丈が３０センチの人形浄瑠璃や刀鍛冶の工房や、天引(あまびき)の 450 年の大木、古道の千体地蔵、子どもたちが手にしたカニなどすべてが印象的で、日本の魅力を海外に伝えられたのではないかと思う。デカンショ節を歌う女性の澄んだ声も心にしみて気持ちよかった。最後は雲が動いて日が暮れる風景が映し出され、見終わったあとは旅番組というより物語を見た感じがした。これまで街道を歩くという発想はなかったので、一日で行けるならベッキーさんの歩いた道を行ってみたいと感じた。途中のイギリスの村を再現した民間の施設だが、知らない人には番組の最後に種明かしをするまで疑問が残ったままになったのではないか。それほど新しくもなく、買い物をしたりお茶をしたりする店がイギリス風に作られている場所なので、あえて紹介しなくてもよかったと思う。また、ベッキーさんはとてもよかったが、「すごーい」「いいんですか」ということばが多すぎると感じた。すてきな番組だったので、タイトルももう少し工夫すればよかったと思う。

○　東京、大阪、京都などの都会だけでなく、日本はこうした人たちにも支えられているということを、外国向けに発信した番組だと思う。同じような環境にいるので、それほど珍しい感じはなかった。紹介されている山間地には限界集落もあると思うので、数十年後にはアーカイブスになるかもしれないと感じた。「ネーミングバラエティー日本人のおなまえっ！」を興味を持って見ているので、番組に出てきた薙田野神社と稗田阿礼は何か関係があるのか、神社の名前の由来を知りたいと感じた。また、どうして摂津が兵庫という県名になったのか、紀州が和歌山という県名になったのかなども知りたいと感じた。

○　非常に落ち着いた大人の女性の旅という印象の番組だった。ただ、最初のうちは、老ノ坂峠でベッキーさんが空を見上げると上空からの竹林の風景に切り替わるという演出や、いいタイミングでいろいろな人に出会うという演出が気になった。しかし、ベッキーさんが風化した石仏の横に座って思いを語る場面を見て、ひとり旅とはこういうものだと思い、それ以降は納得して見ることができた。ひとり旅とは、自分と向き合う旅であると思うので、このシーンは気持ちが非常によく捉えられており好感が持て、バストアップのカット以外は石仏が一緒に入り込んでいるのもよかった。自分自身、１人で歩く旅をしていたが、旅を終えたあと、風の音や木や石の表情などが記

憶に残っていたり、旅先で出会う人はいつも以上に印象が残っていたりするので、あらためてベッキーさんの気持ちに素直に寄り添った番組だと感じた。ただ、番組では地図やナレーションでも歩く距離に触れていなかったが、寄り道をしながら一日であのペースで楽に行けるのだろうか。この地域を知らない人に誤解を与えかねないと感じた。全体としては抑制された色彩の映像が、ベッキーさんのイギリス人の父親の話や、ロンドンの暗い空を思い起こさせるような、いい雰囲気の番組だった。

○　ベッキーさんは、非常に上手で華のあるタレントだと感じた。番組が京都の街から始まり、街道の起点について説明がなかったので、外国人に向けて作ったのかとやや冷めた見方をしてしまった。「えぇトコ」は、いつもはほんわかとした雰囲気で人間味あふれる番組だが、今回はクールな印象を受けた。ＢＧＭに流れていたイギリス出身の人気バンドの曲が心地よく、すんなりと見ることができた。また、難しい地名が多く出てきたので、インターネットで調べながら番組を見た。稗田野神社の場面で宮司が「3,000 年前からお祈りしている」と話していたが、その 3,000 年前の根拠が調べてもよくわからなかったので、興味を持った。ただ、海外にも発信することも考えれば、イギリス風の村の場面は違和感があるかもしれないので、なくてもよかったと思う。最後の福住では、子どもたちがカニをとったり、女性が食事をしながら話をする様子を見て、こういう地域の暮らしに興味を持った。

○　丹波市はことし４回行ったが、篠山街道を訪れたことは一度もないので、興味を持った。京都市や京丹後、与謝野町などの観光名所にはイメージがあるが、これまで南丹市や亀岡市はまったく知らなかったので、この番組を通じて知らない世界を知ることができた。ベッキーさんが自然体であまり多くを語らず、丹波口から篠山までの映像をのんびりと楽しめて、一つの物語を見ているように感じた。水路で芋を洗いながら多世代と交流をしている様子など、田舎に行けば見られる姿にほっこりさせられるありがたい番組だった。番組に出てきたイギリス風の村が本当にあることには驚いたが、ほかの場面とは温度差を感じた。長い距離の旅を４０分の番組でまとめるのは苦労があったと思うが、観光地ではない知らない場所に案内してもらったように感じられて、自分もひとり旅をしたような気持ちになれる番組だった。

○　番組は、篠山街道を紹介するのが目的でベッキーさんのひとり旅が手段なのか、ベッキーさんのひとり旅を見せることが目的でたまたま篠山街道を訪れたのかよくわからなかった。篠山街道の紹介が目的であれば、丹波猿楽や丹波焼などもっと取り上げるべきものがあったように思う。番組の中で「丹波の中心地、篠山」というコメントが気になった。丹波は兵庫と京都にまたがっており、京都府民は京都側を「丹波」、

兵庫側を「奥丹波」と呼ぶのに対し、兵庫県民は兵庫側を「丹波」、京都側を「京丹波」と呼んでいる。このコメントに篠山の人は喜ぶかもしれないが、篠山以外の丹波の住民は不愉快に思うかもしれないので、注意してほしい。番組に葩田野神社が登場したが、それ以外にもよい神社はあったように思う。「3,000 年前から祈っていた」とは神社ができる以前から信仰の場の遺構が残っているからだと思う。海外にも向けた番組だったから細かい地名を出さなかったのかもしれないが、もう少し出したほうがよかったと思う。篠山街道はもともと山陰道で、丹波口から始まるこの街道も世界で最も古い幹線道路の一つなので、京都の街のすぐ近くに現存しているというような説明をする必要があっただろうと思う。

○　篠山には何度も行っているが、まだまだ知らないところがあると感じた。海外発信するからかもしれないが、番組の冒頭からいつも放送されている「えぇトコ」だろうかと感じるぐらい作り方が違った。基本的には大変おもしろい番組で、行ってみたいところがたくさんあったと思う。一方で、ベッキーさんが楽しそうに刀鍛冶体験をしていた場面でも、打つ手がおぼつかなかったことや、真剣を持った状態で長々と話をしている点が気になった。「ベッキーのひとり旅」という番組だが、ベッキーさんの心を癒やす旅のように感じた。

○　ベッキーさんが心を癒やす旅という意味でも興味深く見ていた。番組ではイギリス出身の人気バンドの曲がＢＧＭで流れていたが、ベッキーさんがイギリス人と日本人とのハーフという意味合いがあるのかと思った。また、これが選曲されたのは、歌詞に「今夜こそ、僕らが走り出すとき大阪の太陽を夢みて」というフレーズがあるからだろうかとも思った。番組で「ここより東、山城国」という説明があったが、山城は昔の京都の呼び名であることも説明するとよかったと思う。また、丹波口、大原口といろいろあるが、街道の起点がどこから始まるのかについてもテロップで入れるとわかりやすかったかもしれない。老ノ坂を越えるときにベッキーさんが「昔の人は草履を履いて大きな荷物を持って」と話していたが、旅はわらじを履いてするもので、草履では旅はできないのではないかと思う。イギリス風の村については、紹介の仕方に若干難しさを感じた。ベッキーさんの刀鍛冶体験では、大槌を振るう手も最初はリズミカルではなかったが、少しずつ上手になったように思う。ただ、できあがった小刀の箱を開ける時、開け方にも作法があるので、ゆっくりと開けたほうが情緒はあったように思う。

（ＮＨＫ側）

地域からの国際発信を強化するトライアルの一環で制作した番

組で、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮでは英語版が発信された。ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮのサイトでも番組を見られるようになっていて、アメリカや日本から多くの方にＶＯＤで見ていただいた。

（ＮＨＫ側）

番組で紹介した篠山街道の距離は５５㎞。一日だと半分程度歩ける距離だ。世界中から番組を見ることを意識して、起点は篠山街道の京都側の丹波口とし、篠山城までおよそ５０㎞の旅を設定した。現在、街道を歩くのがブームとなっていて、外国人観光客も京都だけでは飽き足らず、一足延ばしてどこを歩くかということに興味を持っているということで、この番組を企画した。ベッキーさんの旅と篠山街道の紹介のどちらに目的を置いているかということについては、両方だと考えている。街道を歩く旅は世界中の文化にあり、日本にもお伊勢参りなど、歩きながらいろいろなことを考えたり、人生を振り返ったりする文化があった。それを意識して峠を越しながら、人生を振り返るというようなシーンも、番組の中には取り入れていった。実際、番組を見る人も旅をしている気分を味わってもらえるよう、ベッキーさんから自然に出てくることばを番組中に織り交ぜようと意識的に取り組んだ。イギリスの村を模した場所の場面が必要かという指摘については、ベッキーさんの父親がイギリス人で、イギリスに縁がある方だということも意外に知らない人もいると思い、ベッキーさんが人生を振り返る時間の演出としてあの場面を入れた。実在の場所として行こうと思えば行ける場所にあることも提示した。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１９日(金)の紀の国スペシャル「謎の○○王国　和歌山」(総合 後7:30～8:00 和歌山県域)を見た。和歌山県民が見たら、和歌山はこんなものしかないのかと感じさせるような自虐的な番組だと感じた。カラオケとバイクには縁がないので、あまり興味が持てなかった。関西以外では、高野山が和歌山にあることを知らない人もたくさんいるので、今回は和歌山県向けだが、県外向けの放送をする場合には、和歌山には日本一の霊場の高野山と熊野があると紹介してほしい。

○　総務省統計局統計データ利活用センターのデータをもとに番組を制作していて、和

歌山県の一番がいろいろと出てきておもしろかったが、最後まで「謎の○○王国」というタイトルはどうなのかと思った。民泊のパートを少し短くして、ほかのデータもたくさん紹介したら楽しかったと思う。統計データ利活用センターが和歌山に置かれたのはなぜかと感じたので、それを番組で紹介したら和歌山の視聴者も納得感を得られたと思う。統計やデータというとシャープなイメージがあるが、番組自体は昭和的なアナログな感じを受けたので親しみやすさの点ではとても楽しかった。一方で、センターの外観などが少しでも出てくれば、数字やデータの説得力が出たのではないかと感じた。

○　自虐的な演出はしないほうがよいのではないかと思うので、和歌山県向けの番組の冒頭で「イメージがない」「そんなの和歌山県の人に悪いわ」という声を放送したら、和歌山県民の誇りがどうなるのかと感じたが、それ以降はとても楽しかった。番組の出演者は県内では有名だと思うが、自分は知らない人だったので気になった。最後の民泊王国のパートはとてもよかった。民泊の運営者の若者に、子どもたちも協力していることを紹介していたが、運営者どうしがネットワークでつながっているとのことだった。こうした田舎ならではディープな人間関係はよいところだと感じるので、もっと取り上げてほしい。

○　なぜバイク、カラオケ、民泊といったマイナーな点で和歌山を発信しようとしたのか。熊野や高野山、近畿地方を代表する温泉県といったメジャーな点を最後の５分だけでも紹介すればよかったように思う。バイクの普及率、カラオケ店の人口に対する割合が最も多い県だと取り上げていた一方で、最後の民泊のおもてなしランキング１位で新宮市のことを紹介していたが、市区町村別の統計ではなく、すべて県を対象にした統計で統一したほうがよかったのではないか。また、スタジオトークが雑談をしているようで、会話に締まりが無いと感じた。民泊のパートで、民泊をしている女性が自然崇拝をアニミズムと言っていたが、ナチュリズムのほうがより適切ではないかと感じた。一方で、統計を通じて和歌山の知らなかったところを知ることができたのはよかったと思う。

○　和歌山県民が和歌山県の魅力を再認識するための番組だとすると、人口に占めるカラオケ店の数が多いことは、和歌山県民の誇りにはつながりにくいと感じた。また、自営業者が多くて独立心が強いから、自営のカラオケ店が多いというのは少し無理があると感じた。また、バイクの保有率が高いことが和歌山県民にとってどんな意味があるのだろうか。バイクであれば狭い道を走ることができるなどの答えが出ていたが、その答えを統計データから導き出すのは非常に難しいと感じた。和歌山県の人口の半

分ぐらいは和歌山の都市部で、狭い丘陵地帯が多いことや、和歌山の公共交通の料金が高いことを考えると、このことは納得できる。最後の民泊については、和歌山県の人たちはホスピタリティーが高いので、新宮市がおもてなしナンバー１というデータは市町村別のものだがとてもよい情報だと思う。和歌山には大きな施設があまりない地域もあると思うが、熊野の自然や地元の文化を取り入れながら民泊をしていることは、県内でも多くの人が知らないと思う。和歌山の知名度は低いが、文化度は非常に高いので、そういうところをたくさん掘り起こし、県民に自信と誇りを持ってもらえたらいいと思う。

○　番組の冒頭での街頭インタビューは、京阪沿線の千林商店街ではなく、もう少し南側の難波や天王寺などでインタビューしていれば「地味だ」「イメージがない」とは言われなかったと思う。しかし、番組の構成上、番組のはじめは今回のように言われたほうがよかったと思う。バイクの普及率が日本一だということは知らなかったが、その理由の雨や雪の日が少ないことはともかく、住宅に隣接している道幅が日本一狭いからということはやや気になった。また、番組で紹介した電動バイクと自転車をハイブリッドした乗り物は、調べてみると、和歌山県内で開発され、クラウドファウンディングで資金調達し、国外で生産されているということなので、もう少し詳しく紹介してほしかった。カラオケについては、和歌山県で古くから根づいていることは理解できた。番組では、年齢の高い方々ばかりが紹介されていたが、カラオケをしている人は老若男女問わずなのか、それとも若い人たちに受けが悪いのか、県内に 100 店舗ある個人経営のカラオケ店の多くは今後どうなっていくのかを知りたいと思った。また、新宮市が民泊のおもてなし度ランキングで１位であることはすばらしいと感じた。紹介された宿もそれぞれ個性的で、世界遺産の熊野古道を訪れた人たちをもてなしたいという思いであふれていた。このすばらしい民泊が自慢で、いちばん紹介したかったことではないかと感じた。

○　長年、和歌山には縁があったので、こんなに知られていないのかと逆に思った。民泊のパートはよかった。京都市内に乱立している民泊とは全然違い、うらやましく感じた。バイクのパートでは、みかん畑の話かと思ったら、狭い道の話で、少し肩すかしのように感じた。和歌山の人たちはみかん作りに努力を重ねてきて、作業で慌ただしく走り回っているので、番組でもっと取り上げてもよかったのではないか。バイクと自転車のハイブリッドは和歌山の発明なのだろうか。

○　統計データ利活用センターが和歌山にできたことを初めて知った。バイクのパートはいろいろな統計が出てきておもしろかったが、和歌山で開発したというバイクと自

転車をあわせたような乗り物は、和歌山発祥ということなので、カラオケのパートを少し割いてでももう少し知りたかったと思う。一方で、カラオケのパートには、たくさん地元の人たちが出てきており、このように地元の番組に出ることはうれしいことなのでとてもよかったと思う。地域放送のありかたとしては、時間を割いてもよい部分だと感じた。民泊のパートで私設図書館を民泊にしているという話が出てきたが、京都の民泊といえば、置いてある鍵で勝手に宿泊しているイメージなので、新宮市にこうした民泊がたくさんあるのであれば、県域だけでなく県外にも発信してほしいと感じた。紹介されていた私設図書館などには行ってみたいと思った。

○　冒頭のインタビューは、別の場所で収録したほうがよかったと思う。この番組は、和歌山に統計局の統計データ利活用センターができたことで制作された番組だと理解して見ていた。センターのオフィスの壁がホワイトボードになっていて、よく見ると端のほうに難解な数式がいっぱい書いてあり、難しい仕事をしている場所だと感じた。和歌山の友人に尋ねたところ、友人もカラオケ店は８時ごろから開店していることはよく知っていたが、番組で紹介されていた内容はほとんど知らなかった。その友人は、高齢の人たちは病院に行くよりカラオケで歌って元気なほうがいいと話しており、確かにそういう一面があるのではないのかと思う。

○　統計データ利活用センターが設置されたことでできた番組だと思った。自虐的な番組という意見はあったが、ワースト１位のデータもあるはずなので、それをおもしろく演出したほうがよかったかもしれない。出演者がみかん箱をいす代わりにしていたが、食べ物を入れる箱なのでいかがなものかと思う。１０月１９日(金)の「えぇトコ」にも使われていたが、ドローンによる撮影は、非常に新しい視覚の表現だ。速く上に上がると視界が急に変わるが、私としては、もう少しゆっくりドローンを飛ばすか、編集してゆっくり見せるほうが、非常に楽しく見られたのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

和歌山に長く住んでいるが、和歌山県の人たちは和歌山県内のことをあまり知らないように感じる。和歌山市と海南市がある紀北の人は南の新宮や潮岬に行ったことがないという人が意外と多く、紀伊半島は長くて文化圏も多少違うところがあると思う。そういうところを統計をキーワードにして見てみようというのが始まりだ。例えば、バイクだと、和歌山は公共交通機関が非常に少ないので、少し出かけようとすると、車だけでなく自転車やバイクを使うことも本当に多い。このように、自分たちの住む環境を知るとい

う意味でこの番組を作った。

（ＮＨＫ側）

統計から和歌山県を見ていくという企画を、夕方１８時台の「あすのＷＡ！」で月 1 回放送している。先週はみかんの生産量日本一ということで、みかんの新しいブランドを立ち上げているという話を紹介したが、和歌山のいろいろな特徴が見えてくると感じている。番組では、バイク、カラオケ、民泊を選んだが、ねらいとしてはバイクからは和歌山の風土が、カラオケからは県民性が、民泊からは外国人の視点で見ると和歌山県の人も知らないような魅力が見えてくるのではないかということだった。番組を制作していておもしろかったのは、バイクと自転車のハイブリットの乗り物は、クラウドファウンディングで資金を集めていて、番組では紹介していないがクラウドファウンディングで集めた額としては実は日本一だった。また、新宮市の民泊は若い人たちが自主的に運営しているもので、商売っ気よりもホスピタリティーが伝わってきて新しい息吹を感じた。地方であってもいい形で資金を集められたり、あるいは、地域のつながりを生かして地域ならではの魅力を伝えようとしている。改めて委員からいただいた意見を参考に、県内や全国に向けて和歌山の魅力を発信していきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

これまでも取り組んできたことだが、今年度から地域改革の推進を全局的に行っている。金曜の夜７時半からは近畿ブロックで「かんさい熱視線」を放送するのが基本形だが、大阪以外の１府４県はそれぞれの府県を捉える番組を時々放送し、その府県のニーズにこたえるというトライアルを少し多めに行っている。その流れで、今回の番組を制作しているが、委員にはこうした経緯をふまえていただいたうえで、それぞれの県域放送について今後もうかがっていきたい。

○　連続テレビ小説「まんぷく」を朝から楽しく見ているが、主人公・福子に向かって母親・鈴が「子どもはまだなの？」と言う場面が何度もあった。番組を見ている女性の友人が「この場面を見て嫌なことしか思い出さない」と話していた。女性の中には不妊治療をしている人もいるし、本当に授からないという人もいる。朝から見ていて、

少し不快に感じた。

○　私も、福子の母親が「孫はまだ？」という場面が露骨に出てくるのはどうかと思う。また、１１月２１日(水)で、焼け跡の残る町で栄養失調で倒れている人たちを見た萬平が、「やせ細った人たちを救いたい」と言う場面があったが、道で横たわっていた母親も子どももやせ細ってはなかった。今の時代、そういう人を見つけ出すのは難しいかもしれないので、番組を制作するうえで工夫してほしい。

○　１１月１１日(日)の目撃！にっぽん「再出発の町～少年と町の人たちの半年～」を見た。日曜の朝６時１５分からの放送なので見る人も限られてくると思うが、ゴールデンタイムに放送してほしいと思うぐらい考えさせられて、涙が出た番組だった。北海道沼田町という人口 3,000 人の町に少年院から出た子どもたちの厚生保護施設が日本に唯一あるが、沼田町の皆さんの受け入れのすばらしさや理解がすごいと思った。最初は子どもたちを外見から判断してしまいがちだが、実際に内面を知ると子どもで、いろいろと虐待の過去などの事情もあり、周囲の人間が受け入れていかないといけないと思う。番組を通じて、こうした世界を知らない人たちにぜひ知ってほしいと思った。今回驚いたのが、モザイクをかけている子もいるが、顔にモザイクをかけずにしっかり出している子たちがいたことで、「実際許されないことをしたけど、もう絶対することはないから、これから社会に出て行くときに履歴書にしっかり少年院にいたことを書く」と話していた。罪を犯したことはもちろんいけないことだが、周りのサポートで前を向く姿を見たときに、こうした支援施設は大事だし、番組を通じてこういう場所があることを広く伝えることで、理解してもらうことが大事だと思った。再犯率がゼロである少年院は、「ただいま」と言える場所があるからだが、番組では「沼田町の人たちが全員お母さんだ」ということばが出てきた。半年取材したからこそ、彼らの現在の生活だけでなく、これからこういう方向に向かっていくという現実なども伝えられていたと思う。沼田町の皆さんの眼差しやことばもかなり共感できたところもあったので、ぜひこの番組を再放送してほしい。

○　１０月３１日(水)の歴史秘話ヒストリア「新発見！晶子と白蓮　情熱の女たち」、１１月１７日(土)、１８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　人生 100 年時代を生きる　の第１回「終（つい）の住処（すみか）はどこに」、第２回「命の終わりと向き合うとき」は、いずれも大変興味を引く内容だった。

○　１１月４日(日)の奈良放送局制作の日曜美術館「至宝が語る　天平の息吹～第７０回　正倉院展～」を見た。「日曜美術館」では、今年も正倉院展を取り上げていたが、

本当に今回の番組はみんなに見てもらいたいくらいよい番組だったと思う。今回は相当早くから取材を重ねていたのかと感じたが、一つの宝物を修復に至る経緯や技術的な問題や科学分析など多方面から調べられており、挿入している映像も非常に多く、宝物の背景についても非常によく分かった。至宝が語る天平の息吹と銘打たれているだけあって、作り方についても細部まで丁寧に説明されていて分かりやすく、飽きずに見ることができた。

○　１１月４日(日)の「日曜美術館」を見た。これまでも修復作業を扱う番組をいろいろと見てきたが、高精細の４Ｋ８Ｋでは、色彩の再現はどの程度できるのだろうか。現在、染色産業が厳しく技術保存が難しくなる中、染色や織りなどの技術者がいる間に、アーカイブスの技術がある程度整ってきた今こそ、日本固有の色のイメージを、ものいわぬ文化表現として残してほしいと思う。

○　１１月１５日(木)の「ニュース６３０　京いちにち」の京都クローズアップのコーナーがとてもよかった。染色家の志村ふくみさんと作家の石牟礼道子さんの２人の話で、東日本大震災で多くの命が失われたことをきっかけに、命の再生を表現したいと石牟礼さんが新作能を手がける話だった。志村さんは能の衣装を手がけていて、糸の色を選び、織りをするところから紹介されており、「蚕の命を織物に再生することを命の再生にかけた」、また、「衣装の紅花の色は命の力を表現している」とのことだった。衣装の作成から能の上演の当日までを追う、短いドキュメンタリー企画だったが、しっかりと命が描かれていてとてもよかった。石牟礼さんは能の上演を見ないまま亡くなったが、最後に「半世紀以上、命と向き合い続けてきた２人が、人類の未来へと送る祈りの姿です」という趣旨のコメントがあり、それもとてもよかった。ローカルのニュースのコーナーの中でこうしたドキュメンタリーも時々取り上げてほしいと思えるような企画だった。

○　「ザ・ディレクソン」を地元でも開催してほしい。別の県で開催されたときに友人の企画が採用されていたが、ＮＨＫのサポートを得て、番組を制作できることはうれしいことだと思う。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

２０１８年１０月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、連続テレビ小説「まんぷく」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	篠　　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
副委員長	山崎　弦一	（日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長）
委　員	市田　恭子	（デザイナー集団 Team coccori　事業代表）
	帯野久美子	（関西経済同友会　常任幹事）
	片山九郎右衛門	（公益社団法人京都観世会　会長）
	鈴木　元子	（月刊大和路ならら　編集長）
	添田　隆昭	（総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長）
	田辺　眞人	（園田学園女子大学　名誉教授）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長）
	山舗　恵子	（京都リビング新聞社　編集部長）

（主な発言）

＜連続テレビ小説「まんぷく」第１週「結婚はまだまだ先！」
（１０月１日(月)～６日(土)放送）について＞

○　「まんぷく」は録画して見ている。われわれの日常生活の場が撮影に使われているので、親近感を感じているが、関東より関西の視聴率が低いことを知り、驚いた。大阪を“大大阪”と称した時代の阪神間モダニズムを楽しみながら見ている。ただ、当時「ラーメン」ということばを使っていたのだろうか。そして、大阪で昼間から屋台でラーメンを食べられたのかも気になった。また、主人公の姉２人の大阪弁に違和感があった。「わろてんか」のことばづかいには違和感がなかったのだが、方言指導は同じ方がしているのか。第２週以降で、主人公が勤めるホテルの門が供出されていた

時期が私の地元より早かったことや、豚の蚊取り線香の形などが少し気になった。ストーリーの展開や主役の演技はこれからも楽しみだ。

○　毎朝楽しみにしている。ヒロインが新人だと見ているほうもハラハラするが、その成長過程を楽しめるのが連続テレビ小説のよいところだ。主役の安藤サクラさんがヒロインをどう演じるかと思っていたが、実績のある俳優なので安定感がある。当時からラーメンを食べていたのか、単純に疑問に思った。今回のドラマでは、安藤さんがこれまで役者として演じてきた役柄と福子の役柄が違うので、最初の３日間はなじめない部分があった。また、オープニングの映像を見て不安がよぎったが、今は歌を歌いながら見るぐらい楽しみだ。第３週の憲兵が尋問する場面は一定の配慮は感じるが、朝から見るには怖かった。登場人物の牧善之介や野呂幸吉の会話がおもしろくて、癒やされている。公式のＳＮＳをフォローしており、視聴者からの投稿も楽しく見ている。

○　ストーリーのテンポがよく、元気があり、まさに連続テレビ小説という感じで本当に楽しい。平日の朝や夜の放送は見られず、土曜放送の「今週の連続テレビ小説」でまとめて見ているので、次の１週間が待ち遠しい。初回だけはＢＳプレミアムで朝の放送を見たが、オープニングの主題歌では、ＤＲＥＡＭＳ　ＣＯＭＥ　ＴＲＵＥの吉田美和さんの声を聞いた瞬間にドラマの世界に引き込まれた。また、ヒロインの福子を演じる安藤さんの体の動きがしなやかで、表情も豊かだと感じた。ヒロインの母親がこっそりツナ缶を食べている場面など、毎回笑えるところが多い。ヒロインの夫となる、立花萬平のコテコテの大阪弁に違和感があったが、人づきあいの苦手な萬平が、なんとかしてなじもうと慣れない大阪弁を話していることがわかり、とても共感した。萬平の大阪弁のほか、要潤さん演じる香田忠彦の意味深な表情など、謎解きの要素が多いように思えて、今後の展開が楽しみだ。公式サイトの「漫画 de まんぷく」は、ドラマと同じ内容だが、絵もかわいく似て非なるものとして楽しんでいる。

○　以前、台湾に行ったときにたまたま見た映画で現地の高校が甲子園に出場したことがテーマとなっていた。台湾でも甲子園に出場したことで、高校野球に思いがあるようだ。萬平のモデルとされている実在の人物は、台湾出身なので、今後の展開で萬平が台湾出身ということが描かれることがあれば、台湾でも親近感が醸成されるのではないかと思う。

○　毎日楽しみにしている。タイトルバックの映像がかなり斬新だと感じたが、初回の１５分間を見終わったら「福ちゃんワールド」にはまり込んでしまった。主人公は自

己主張の強い人でも普通の人でもなく、珍しいタイプだと思った。２週目からシリアスな場面が多かったが、１０月１６日(火)、１７日(水)の回では、福子と萬平の強さが感じられた。これからも２人のいろいろな面が出てくることを楽しみにしている。また､芦田愛菜さんのナレーションは新鮮でよかった｡初回のラーメンの場面を見て、当時、こんな若い人がラーメンを食べていたのか、また、ラーメンをうどんの鉢で食べていたのかと感じた。ラーメン好きで、ふだんは連続テレビ小説を見ない人が今回は見ていると知人から聞いたので、食文化の面もしっかり描いてほしいと思う。白馬が出てくるなど、笑いの要素が入っていて、大阪らしさを感じる。ロケ地が知っている場所ではないかと思いながら見るのも楽しい。「王道の朝の連続ドラマだ」という声をよく聞くが、主人公やナレーションの面では新しさを感じるので、これからも楽しみにしている。

○　「まんぷく」は続けて見ることができている。大阪らしく随所に笑いがあり弾みもよいが、うるさくないので、とても見やすい。ほかの番組で昭和初期の映像を見ると大抵レトロな色調なので、最初はドラマの明るい色調に違和感があったが、今は生き生きとした印象を受けている。初回は冷静に見ていたが、第２回以降は視聴者としてのめり込んでしまい、長女の咲の結婚式の場面ではもらい泣きをしてしまった。この時代のシンプルな家族愛なども随所に見られて懐かしく感じられた。一方で、寿命が短く、今では治る病でも命を落とす時代だったと感じた。今後も期待を持って見続けたい。

○　毎朝、ＢＳプレミアムで楽しみに見ている。ヒロインの安藤さんは、大阪弁も完璧で、演技も雰囲気もさすがだ。安藤さんであれば、幅広い年齢の福子を演じきれると思う。このドラマには突っ込みどころがたくさんあって、つい突っ込みを入れたくなる。ヒロインを支えるキャストも皆個性があっておもしろい。萬平はドラマ全体がユーモラスであるのに対して、ひたすら真面目でまっすぐでおもしろい。ヒロインの母親の大阪弁には少し違和感があるが、楽しく演じているように感じる。第２週でヒロインの長姉の咲が亡くなるが、「わろてんか」と同様、ドラマの初期で家族の精神的支柱としている兄弟が亡くなるのは､家族の関係を一度破壊して再出発するための手法なのかと感じながらも、長姉役の内田有紀さんをもっと見たかった。ほかには白馬にまたがる牧の登場には笑ったし、橋本マナミさんがこれまでとは異なる役柄だが、よく合っている。このあと激動の時代を迎え、ヒロインがさまざまな苦労を明るく乗り越え、家族とともに進んでいく姿を楽しみにしている。

○　大阪を舞台にしたドラマで、昭和初期の古きよきレトロなホテルが出てきて、大変

懐かしく感じた。ただ、紙芝居のような、次の展開が楽しみになるようなワクワク感があまりなかった。この１０年では「カーネーション」「マッサン」「あさが来た」「ごちそうさん」などはとてもおもしろかったが、こうした作品とどこが違うのだろうかと感じたので、配役、テーマ設定、演技指導などの面から分析されていれば知りたい。また、このドラマのことばは、大阪弁になりきっていない印象を受ける。例えば、「カーネーション」では、五軒屋町の人たちをお笑い芸人たちが演じていて、何気ない大阪弁が町の雰囲気を盛り上げていた。ことばの面で何か工夫はできないかと感じた。

○　最初の１週間を見て、主題歌、タイトルバックや芦田さんのナレーションなど、ドラマの空気感がトータルコーディネートされ、作り込まれている印象を受けた。タイトルバックの映像は非常に大胆だが、中には真剣なまなざしで眺める姿もあり、非常に考えられている。今井家の温かい人間模様が描かれる中で、萬平との出会いもあり、主な登場人物が出てきていて、今後の展開に非常に期待を持たせる内容になっていた。福子が職場で「新人はべっぴんやないと裏方に回される」と言われるが、今ならセクシュアルハラスメントになりかねないが、総支配人が「べっぴんにもいろいろあるんや」とうまくフォローしていた。福子の「私が伝票整理をしておきました」というせりふや、結婚式で幻灯機を使うというアイデア、すばらしいスピーチをする場面から、優秀な女性だとさりげなく表現されていた。ただ、パーティーの場面のウエルカムドリンクがワインのように見えたが、当時からワインが出されていたのだろうか。また、長女の咲の早すぎる死を悼む声は非常に多いと感じる。

○　連続テレビ小説の第１作の「娘と私」は子どもの時に見ていたが、人生の局面とともに当時放送されていた連続テレビ小説が思い出される。当時はラーメンという言い方はなかったと思うが、戦後、インスタントラーメンを開発するという伏線でこのことばを使ったのではないか。ことばのイントネーションとアクセントのずれに違和感があったが、第３回あたりからだいぶよくなったように感じた。各地を転々としてきたという萬平は実在のモデルからは若干の脚色が加えられているからだと思う。大阪の文化と神戸の文化が混ざり合った「阪神間」という特異な場所を舞台にしていて、歴史的建造物がドラマに使われているので、地元の視聴者にとってはロケ地を探す楽しみもある。一つのファミリーの物語なので時代に左右されるが、義理の兄の香田忠彦が売れない絵を描いているということなので、今後の展開を楽しみにしている。戦後の混乱期を経て大成功する２人のドラマだが、それを後押しするような明るい内容だったと思う。

○　「まんぷく」は「満腹」だけでなく「萬平」と「福子」にもかかっており、タイト

ルからも楽しみにしていた。視聴者からの「まんぷくごはん」写真も含めて、心も満腹にしてもらえるドラマだと期待している。また芦田さんのナレーションに興味があったが、番組を見終わってから思い出すほど違和感がなかった。これまでの連続テレビ小説と違った点がいい意味で２つあった。１つ目は、１週目がヒロインの幼少期からではないことだ。幼少期とのギャップもないため、安藤さんが演じるヒロインを冒頭から楽しめた。２つ目は、お茶目で愛らしい福ちゃんと美男美女が勢揃いの脇役の皆さんという構図はいい意味で今までにない部分だと思った。さらに、それぞれのキャラクターにあった独特のイントネーションもおもしろかった。その時代を感じさせるアメリカからの缶詰や電話交換室など、知らない時代に触れることも連続テレビ小説の魅力だと思う。連続テレビ小説は、最初でいつも誰かが亡くなってしまうことが多いが、長女の咲が翌週に亡くなってしまい、もう少し見たいと感じた。そんな咲に馬に乗って会いに来た牧や厨房係の野呂の独特なキャラクターも楽しい。これからの福子と萬平の行方、一風変わった存在感のある要さん演じる香田忠彦も楽しみにしている。インスタントラーメンを生み出した夫婦をモデルにした作品ということもあり、これから高度経済成長にかけてどんな展開があるか目が離せないと感じている。

（ＮＨＫ側）

ことば指導には複数の先生があたっていて、「わろてんか」とは違う先生方にお願いしている。このドラマは実在の人物をモデルにしているが、フィクションと考えたうえでドラマを楽しんでいただきたい。

（ＮＨＫ側）

ラーメンということばについては議論を重ねていて、調べてみるとラーメンということば自体は、この当時あったということだった。ドラマでラーメンが初めて出てくるときに「支那そばのこと、最近ではラーメンというんやて」というせりふを入れた。年配の登場人物は「支那そば」、若い登場人物は比較的「ラーメン」と言う設定にしている。大阪弁への違和感についてだが、萬平のモデルとなった方の関係者に取材をすると、大阪弁はあまりきつくなかったと聞いた。また、舞台は池田ということもあり、「わろてんか」や「カーネーション」に比べると少し標準語に近い大阪弁に設定している事情もあるかと思う。

＜放送番組一般について＞

○　９月２１日(金)のかんさい熱視線「奈良芸妓　ここにあり」を見た。芸妓の菊乃さんがデビューしたころの番組を見たことがあって、１０年前に奈良で１人となってからも芸妓を続けていて偉いと思った。京都でも置き屋やお茶屋が減る中、人材を育てることがいちばん問題となっている。伝統芸能でも同様だが、若い世代ほど生活に関してリアルに考えている人が増えているので、サポート制度が必要だと常日頃思っている。菊乃さんが後進をつなぐために、３人になってもできるかぎりのことをしていることに感動した。落語とのジョイントとはいえ、1,300 人の客席を埋めることは本当に大変なことだと思う。若い舞妓さんの「未熟な自分を舞台に出してもらえて感謝している」ということば、菊乃さんの「大きな舞台を踏んで変わることを期待している」ということばは本当にそのとおりだと思う。奈良放送局には引き続き取材してもらい、盛り上げをお願いしたい。

○　「伝統を守るために伝統を壊す」ということばが心に残った。京都の伝統工芸の職人もこのまま後継者がいなくなると、品自体がなくなるという話などをよく聞くが、いろいろなジャンルで伝統をつなげていくためには大変な努力が必要だと感じた。格式を考えると、出張座敷を列車で行うことは考えられなかったことだが、置き屋を株式会社にするなどの工夫をしていて、まさに「伝統を守るために伝統を壊す」ことだと感じた。この番組を見て、いろいろな分野で伝統に携わる人たちが参考にすることもできるし、何かで後押しできるかもしれない。ぜひ今後もこうした番組を放送してほしいと感じた。また、列車の出張座敷の大体の料金を知りたいと思った。

○　奈良県には置き屋がたった１つ残っており、その伝統の火を絶やすまいと芸妓の菊乃さんが奮闘されていることを初めて知った。お座敷での宴会には参加したこともない自分でも理解できるような番組だった。お座敷列車の宴会や、置き屋を株式会社に替え、給料制を導入するなど、新しいことに取り組んでいて、「何もしなければ昔のままで、このまま火が消えていくのを眺めていることはできない」ということばは重く、覚悟を感じた。入ったばかりの舞妓さんに 1,300 人の観客が入る劇場の舞台で踊らせるということは、この機会をとらえてステップアップさせてあげたいという思いがよくわかった。長年おしろいを顔に塗り続け、おしろいアレルギーになったことは、芸妓としては致命的なことで、絶望したということばは無理もないが、それでも奈良の花街のために前に向かって進み続ける菊乃さんの姿に奈良の心意気を見せてもらった。

○　大変興味深い一方で、複雑な思いで番組を見た。芸者とは歌や踊りなどで酒席の客

を楽しませる仕事だが、海外では酒席の客を楽しませる仕事はあってもそこに芸事が組み込まれていることはなく、日本独特の文化だと思う。芸妓を英語で翻訳すると“hostess”で、最近は“entertainer”ということばを使うこともある。この番組は、おそらく伝統芸能文化の伝承にフォーカスを当てていると思うが、やはり、置き屋という日本の文化を残す努力とともに男性客を楽しませるところも含めた制度として伝承しようということを見せているのか、あるいはその日本の芸事に焦点を当てて伝承をする努力を見せているのか、どちらだろうかと思った。お座敷の場面で伝統的な男性の客を遊ばせるところが紹介されていたが、世界から見たときに花街といった日本独特の文化がどう見られるのか複雑な思いで見た。

○　兵庫県では有馬で置き屋が１つになっており、観光協会も協力して兵庫県の生活文化として続けていけるよう考えている。奈良では菊乃さんが最後の１人になっても続けていることに勇気をもらった。奈良ではお茶屋もなくギリギリなので株式会社にしたということだと思う。菊乃さんはおしろいアレルギーになっても、裏方に回って頑張ろうとしているが、ベートーヴェンが聴力を失ったのと同じくらいではないかと思う。ただ、最近は芸妓の世界も変わってきていて、女性でもお座敷遊びをしてみたいという人はたくさんいる一方で、芸妓の世界が好きで子育てをしながら続けている人もいる。ぜひＮＨＫでも応援してほしいと思う。

○　奈良でも花街があったことを知り、お茶屋がほとんどない中で続けているのは、本当に革新的だと思った。菊乃さんと同世代なので本当に頑張っているという思いと、若い人たちに接するところを見ていると親近感を持った。番組を見ながら、芸妓さんは必要なのかと実は思っていたが、いろいろと考えていくと伝統文化として必要だと感じた。伝統文化は大好きだが、今は物を買う時代ではなく、エンターテインメントとして楽しむ時間を買う時代だ。これからの市場として芸妓さんは重要になっていくと感じた。また、取材相手との距離感が近い感じがして、臨場感があった。

○　奈良の花街を継承、復興しようと頑張っている菊乃さんを取材した番組ということで、とても楽しみにしていた。番組を見終わって強烈に残ってるのは、プロとして仕事に人生をかけた女性の覚悟だ。今、奈良では芸妓さんをお座敷に呼ぶことで応援しようという動きがある。菊乃さん自身は「奈良・元林院　花街復興プロジェクト」を立ち上げ、奈良に限らず全国的に消えゆく花街の火を灯そうと頑張っている。今回は、後継者が紹介されていたが、彼女たちが残ってくれたらと思うとともに、また菊乃さんのような覚悟を持った人が育っていくかどうかが気がかりだ。一方で気になったのは、番組に奈良らしさが少し欠けていたことだ。奈良県民でも花街があることを知ら

ない人は結構いるので、町並みの映像を入れて視覚的にはっきりわかったらよかった。また元林院の歴史的な経緯をもう少し説明してほしかったと思う。奈良らしさを出す意味では、春日大社との深い関係も紹介するとよかった。今後全国向けに放送するならば、こうした要素が入ると、奈良好きな人にもより見てもらえるし、印象にも残るかと思う。

○　芸妓の世界は、血縁でもなければなかなか入ってくる人が少ない世界だと思う。後継者がいなくなってしまいそうな仕事だと思うが、このように存在することをテレビで紹介すれば、少しでも後押しすることができるのではないかと思う。特に、花街のようにあまり知られていないような世界でこのように頑張っている人がいることを紹介すれば、呼んでみたいと思うのではないか。花街を継承していくチャンスができるように思った。

○　伝統文化を継承するために１人で頑張っていて立派だと思ったし、それを継承していくために置き屋を株式会社にするなど、経営者にもなっているとも感じた。最後の場面で「人生一度きりなのでもっと存分にいろんなことしたい」と話していたので、私も見習いたいと思ったし、橿原での舞台の姿は大変格好よかったと思う。

○　何かしないと昔のままだということで、新しい仕事のあり方を開拓し、経営者として会社を設立し、新しいマーケットを開くにはどうすればいいかと工夫していたので、それは業種が違っても、新しいことを考えている人たちには非常に励みになったのではないかと思う。菊乃さんがお得意様に手紙を書いている場面で、そのこと自体はすばらしいが、コメントの中で「怨念じゃないんですけど」というのがあったが、少し別の言い方をするほうがよかったかもしれない。

（ＮＨＫ側）

番組を制作したのは若いディレクターで、自分でカメラを回して密着取材しながら菊乃さんと関係を作っていたということだ。それで、菊乃さんも弟子に接する感じでストレートなことばが出てきたのかと思う。元芸妓の方たちが番組を見て、菊乃さんの思いややりたいことを理解したという声もあったと聞いたので、番組を制作した意味があったと思う。国際的な視点からの意見は新鮮に感じた。芸妓は、芸も含めてもてなすものであるので、国際展開することがあればそういう視点も考えながら進めていきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

指摘にあったとおり、芸妓の仕事はかなり特殊なので、ナレーションを書くうえでも悩んだ。最終的には女性の人生をかけた覚悟を表現していく方向にまとまっていった。ディレクターが小さいカメラを携えて、かなり踏み込んだことも質問しているが、そういう質問をきっかけに独特な文化も伝えられたと思う。

○　９月２２日(土)の「ＮＨＫ×日テレ同時生放送！テレビ６５年　スポーツのチカラ」(総合 前 10:30～11:25)を見た。生放送で途中ゆるめのところもあったが、武田真一アナウンサーはいつもとテンションが違ったような感じで、チコちゃんやくりぃむしちゅーや日本テレビのアナウンサーも出ており、お祭りのようでおもしろかった。日本テレビが初めて世界陸上を中継するときに、ＮＨＫに生中継のノウハウを聞きに来て、快く教えてくれたという話が紹介されていた。競技と競技の間に何を放送するかを考えなさいということで、その教えが生かされた例としてカール・ルイスが新記録を出したあと、その次の選手がさらに新記録を出したか判明するまでの間に、２人の選手の表情を映像で捉えた場面が紹介された。確かにテレビを見ている者にとっては、競技はもちろんだが、まるでその場にいるようなライブ感が感じられるとより引き込まれると思った。また、2015 年のラグビーW杯の日本の勝利の瞬間を選手や観客が喜んでいる映像だけで放送した沈黙の３９秒の実況が紹介されたが、今後４Ｋや８Ｋのテレビを通して、そこにいるかのように見られる時代が来るようなので、カメラワークなどでいかに私達をそこに引き込んでくれるかにも期待をしたい。なぜＮＨＫと日本テレビがこのような番組を放送するのかと思っていたら、来年のラグビーW杯日本大会の放送権を獲得した日本テレビとＮＨＫで中継を盛り上げていきたいという話をしていた。これからスポーツ中継を見るのもより楽しみになる番組だった。

○　台風２４号のときに、ＮＨＫのニュースが地元の放送局からのニュースに急に切り替わったのを見たが、ほかの時間でも、地元の放送局からのニュースを要所要所で放送していたと聞いた。ふだん見ている地元のアナウンサーが出てきて地元の状況を伝えてくれるのでとても安心した。台風２４号は、台風２１号で地元が甚大な被害を受けた直後だったので、命を守る放送に取り組んでいるＮＨＫに大変感謝をしている。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

平成３０年９月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」および「平成３０年度後半期の近畿地方向け番組編成」についてそれぞれ説明があり、「平成３１年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。会議では、事前に視聴してもらった、「関西人甲子園伝説」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	西田　賢治	(大阪商工会議所　元常務理事)
副委員長	山﨑　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	片山九郎右衛門	((公社)京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	篠　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	添田　隆昭	(総本山金剛峯寺執行長・高野山真言宗宗務総長・高野山学園理事長)
	田辺　眞人	(園田学園女子大学　名誉教授)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」および「平成３１年度の番組改定」について＞

○　ＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋで放送予定の注目番組を知りたい。

（ＮＨＫ側）

１２月の放送開始に向けて、ＢＳ８Ｋでは、ヨーロッパのオーケストラの収録番組や自然番組など、ダイナミックな映像や音響を楽しめる番組を準備している。宝塚歌劇団の公演も８Ｋで収録する予定で、注目番組の一つだ。ＢＳ４Ｋでは、「新日本紀行」などをデジタル化し、以前の放送では見えなかった部分まで鮮明に伝える映像で当時の日本を振り返る番組を予定している。

○　４Ｋ８Ｋ放送を楽しみにしているが、今のままでも見られるのか。

（ＮＨＫ側）

アナログ放送からデジタル放送になった時に、対応したチューナーなどを使って見られるようになったと思うが、現在のＢＳ放送を見られる環境にあれば、同様の方法でＢＳ４Ｋ放送を見ることができる。新たに始まるＢＳ８Ｋは、左旋の円偏波になるので、左旋偏波に対応したアンテナや室内配線が必要となる。１２月の放送開始までにチューナーやチューナー内蔵のテレビも発売される予定だ。

○　ことしは大きな自然災害が相次いでいるが、来年度以降も、これまで以上に防災・減災に役立つ、迅速かつ詳細な情報提供と報道に努めてほしい。２点目は、地域向けの番組でも、地域間の相互理解に役立つような番組は、ぜひ全国放送してほしい。３点目は来年秋に神戸や東大阪でも試合が行われるラグビーワールドカップを実況放送してほしい。１２月１日に開始するＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋ放送については、テレビを買い替えたいと思えるような魅力的なコンテンツを作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

いずれも大変重要な指摘で、自然災害の報道についての指摘は重く受け止めたい。大阪北部の地震以降、大雨、台風、北海道地震と続いたが、西日本豪雨災害のような広域にわたる災害も起きてきるので、そうしたことも想定した体制を整えていく必要性を感じている。地域放送については、地域の課題を地域に伝えることも大事だが、地域共通の課題や地域の魅力を全国に発信していくことは、ＮＨＫの大事な役割だと認識している。来年度以降、さらに全国発信に力を入れていきたい。ラグビーワールドカップの放送権はＮＨＫと日本テレビが獲得しており、９月２２日(土)にはワー

ルドカップ１年前ということで、日本テレビと共同で特別編成を実施するなど、機運を盛り上げていく。ＢＳ４Ｋ８Ｋについては、魅力的なコンテンツを制作すると同時に、しっかりＰＲもして、視聴者の期待に応えるようにしていきたい。

＜「関西人甲子園伝説」
（総合　７月２７日(金) 後 7:30～8:42 放送 近畿ﾌﾞﾛｯｸ）について＞

○　関西人と甲子園に焦点をあてていて、制作者の甲子園に対する愛を感じる番組だった。ゲストで元プロ野球選手の金村義明さんが甲子園に出場していたことを知るとともに、金村さんの高校時代のかっこいい姿を見られてよかった。同じくゲストの登美丘高校ダンス部の元キャプテン伊原六花さんは高校を卒業したばかりだが、「インターネットで見て知っていた」などとコメントしていて、今の若い人たちの感覚がよくわかった。ことしは近江高校の選手宣誓に注目していたが、番組では取り上げられていなかったので、近江高校の活躍は番狂わせだったのだと感じた。あまり甲子園に詳しくないが、番組を見ていて、甲子園にまつわるエピソードが次々とよみがえってきた。

○　番組の各コーナーは、それぞれで特集を組めるくらい内容が豊富だった。ことしは特に関西勢の活躍や、智弁和歌山の高嶋仁監督の引退など、ドラマがあって感動した。高校野球は野球の中でも違うジャンルだと感じるぐらい魅力があるが、その魅力がすべて詰まった番組だったと思う。ヒーロー列伝では、金村さんやＫＫコンビなど昔の名シーンの映像にくぎづけになった。スポーツ界のパワハラが問題になっているが、紹介されていた大阪桐蔭と智弁和歌山の監督に共通しているのは、選手たちに厳しくても愛情があることだ。大阪桐蔭は日本一の練習量だが、ミーティングで選手たちに意見を出させる指導法や、智弁和歌山の高嶋監督はノックや掃除を含め、監督自身が人一倍努力していて、ことばだけではない指導があるから選手もついてくることがわかってよかった。スポーツ界で見習わないといけない指導者がほかにもいると思うので、名監督の特集を組んでほしい。ただ、ＶＲ（バーチャル・リアリティー）での夢の対戦は、急に現実に引き戻された感じで、なくてもよかったと思う。

○　伝説のヒーロー列伝では、別所毅彦選手などが出てくると思っていたのに出てこなかったので、時代が変わったと思った。前半のヒーローや名将もよかったが、アルプス席のことやプラカードガールが甲子園において大きな役割を果たしていることがわかった。長年、市立尼崎が沖縄代表の応援をしてきたことが紹介されていたが、沖

縄代表として首里高校が初めて出場したときの映像を覚えている。甲子園には記憶に残る試合や体験がいろいろあると思うので、そういう切り口もあると思う。市立西宮高校がプラカードガールを目指して人気があることは、新鮮に感じた。高校野球の歴史を調べていくと、関西には発掘できる話題がもっとあると思うので、こうしたシリーズを続けていくとおもしろいと思う。

○　甲子園と聞くだけで青春時代に戻った気がしてとてもおもしろかった。ことしは100回記念でレジェンド始球式もあり、いつも以上に関心を持っていたので、番組を見る人もとても楽しみにしていたと思う。ヒーロー列伝では、ＰＬ学園対池田戦の映像に夢中になったが、当時桑田真澄選手をすごいと思っていたものの、応援していた池田が負けたときの喪失感までよみがえってきて、とても懐かしく思った。ＶＲでの対戦より、むしろ別の試合の映像を見たかったと思った。また、自分が若いころ、甲子園に出ている高校球児たちが大人びて見えると思っていたが、大阪桐蔭の選手たちの練習に臨む姿勢などを見て、頂点まで行くために選手たちが向上心を持ち続けているからだと思った。アルプス席の話題も楽しかったし、ゲストのかみじょうたけしさんのかち割りのエピソードなどもあったので、いろいろな話題を紹介してほしかった。演出としてよかったのは、甲子園球場を建設した鉄道会社の三崎省三さんの話を映像とテロップで紹介していた場面で、夢の球場としてスタートしたことをあらためて実感した。

○　よくある歴代の選手の話だけでなく監督や応援団など、さまざまな視点から甲子園の歴史を学べて、とても楽しかった。プラカードガールについて初代から現役の話まで紹介されていて、阪神淡路大震災のときのエピソードなどもとても丁寧に作られていた。甲子園と一口に言っても、さまざまな人のさまざまな歴史がつまっているとあらためて実感した。ヒーロー列伝に出てきた京都成章の古岡基紀選手は現在一般のメーカーに勤めているということだが、「負けたことがその後の成長の糧になった」というコメントがとてもよかった。大阪桐蔭の取材では、「日本一のものさし」をキーワードに、自分で目標を持って高めていく、強豪校の秘けつがわかった。ことしは暑さ対策が問題になっていたが、職場にいる元甲子園球児が、自分たちは甲子園の暑さに勝つのも戦いのうちだと話していて、選手一人一人の戦い方や思いがあると感じた。智弁和歌山の監督がみずからネットの修繕をしていて、監督のあり方を考えさせられた。一方、ヒーロー列伝では視聴者のコメントとともに懐かしい選手たちが次々と紹介されていたが、それが何年の大会なのかが示されていたら、その当時の自分のことと重ね合わせて見ることができたと思う。また、背景に衣笠祥雄選手の写真が飾られていたが、何も触れられなかったことに違和感があった。

○　プラカードガールをしていた女性が、阪神淡路大震災で被災したときに、当時担当した江の川高校の選手たちから次々と励ましのメッセージが届いたというエピソードがよかった。毎年出場経験者が増えていく中で、こうした思い出を持つ人を見つけてきたＮＨＫの努力と取材力には感心した。

○　ふだんスポーツ番組は見ないが、この番組を見て、甲子園は特別な場所だと感じた。また、甲子園は選手たちの歴史もあるし、試合を見ていた人たちの記憶を呼び起こすものだと感じた。ＮＨＫの丹念な取材に感心したが、ＶＲでの対戦よりも芝生のキーパーやアンパイアなど甲子園を裏から支えてきた人たちの話があれば、番組に厚みが出たように思う。

○　ことしは全国高校野球選手権大会の 100 回目だが、甲子園で開催されるようになったのは１０回目からなので、番組冒頭の伊藤雄彦アナウンサーの「100 回目の甲子園」というコメントが気になった。ヒーロー列伝で紹介された選手はすべてよく知っていたが、ヒーローの原点は 1969 年にテレビで見た松山商業対三沢の決勝戦の延長１８回引き分け再試合だと思った。松坂大輔選手擁する横浜高校と対戦した京都成章の投手は紹介されていたが、延長１７回まで戦ったＰＬ学園の投手に触れなかったのは、現在民放のアナウンサーだからかと感じた。また、歴代最多勝の監督を取り上げていたが、あくまで教育の一環だと思うので、監督が勝利至上主義にはしりかねないと感じた。甲子園の最多勝監督ともてはやすこともあまり好ましくないと思う。市立尼崎のブラスバンドが今でも沖縄県代表校の応援をしているのには驚いた。市立尼崎と沖縄代表が対戦するときはどうするのかと気になった。また、市立西宮のプラカードガールは伝統になっていて、地域を大事にしていることがわかった。一方で、高校野球は高校生のクラブ活動の一環であり、最近はそれほどではないと思うが、甲子園球児をもてはやす風潮は改善していくべきだ。

○　番組で、箕島対星稜の延長１８回の試合の映像が出てきて、家族と見ていたときのことを鮮明に思い出した。高校野球の持つシンパシー、汗、熱さが、スポーツに疎い家族も巻き込み、最後まで一緒に見たのだろうと思う。甲子園に功罪はあると思うが、情熱を傾ける人たちがこれほど出てくることはすばらしいと感じた。ことしは 100 回目だったが、200 回続いてほしいと思いつつ見た。甲子園は、球児たちにとって夏のこの時期でないとできない経験をする場で、プロにはならずに引退する人も含めて、一人一人のドラマがあって 100 回を迎えてきたのだと思う。確かに春の選抜よりも夏の全国大会に熱さを感じる。ＶＲでの対戦はやや退屈したが、伝説の試合を見たあ

とは、自分もゴーグルをつけて対戦してみたいと感じた。スポーツ界のパワハラ問題が出てきているが、選手たちを育てるために、どうするかを考え続けている監督の姿勢には頭の下がる思いがした。

○　番組では、私の世代にとっては懐かしい映像がたくさん紹介されていてよかった。節目の 100 回に大阪桐蔭が史上初の２回目の春夏連覇したのも、とてもよかった。ＰＬ学園の桑田真澄選手は改めてすごいと感じたが、今では、同校の野球部が無くなっていることに時代の流れを感じた。プラカードガールやアルプスのマエストロなどいろいろな方が甲子園に関係していて、いろいろな思いが詰まっていると感じた。プラカードガールをしていた女性が、阪神淡路大震災のときに当時担当した江の川の選手たちから連絡があったというエピソードを見て、甲子園が取り持つ縁のすばらしさを感じた。

○　筋書きのない熱戦が繰り広げられた夏の高校野球 100 回大会にくぎづけになった。「ドカベン」「ＫＫコンビ」などの懐かしい映像だけでなく、甲子園そのものが人生という監督の生きざま、応援団やプラカードガールなど甲子園を支える人たちの様子が伝わってきておもしろかった。甲子園での経験を生かして頑張っている京都成章の古岡選手をとりあげたことは、将来社会人となる多くの高校球児の励みになったのではないかと感じた。ＰＬ学園対池田の一戦では、桑田選手は自信満々で試合に臨んでいたと思っていたが、意外に感じた。１回表の二死一塁三塁で、強烈なピッチャーゴロがたまたま桑田選手のグラブに入っていなければ池田のやまびこ打線に火がついて桑田伝説も生まれなかっただろうと映像を見て思い出した。昨年エラーで優勝を逃した大阪桐蔭は、「日本一のものさし」を合言葉に、きめ細かな練習の積み重ねで史上初の春夏連覇二回目につなげたことがよくわかった。また、厳しい高嶋監督に選手たちがついてくる理由が番組を見てわかった。応援団やブラスバンドについては、高校野球の実況で触れることがあるが、プラカードガールの熱い思いは初めて知った。特に、阪神大震災のときに、平山さんがプラカードガールを務めたチームの選手たちが安否を気遣う電話をしてきた話には、一期一会の縁を大切にしていると感じた。また、大正時代に屋根付きの野球場を５か月で作ったことを知ったが、そのスピード感に驚いた。ことしの 100 回記念大会でも新たな伝説が生まれたと思うので、次の 100 年に向けての盛り上げる魅力ある番組を期待している。

（ＮＨＫ側）

ＶＲで夢の対戦をするコーナーは、番組を制作するうえでとても悩んだ。関連番組が多く放送される中、この番組は、甲子園に関

わる人たちの物語を核にしているが、それだけで番組を楽しんでもらえるのかという思いが湧いてきた。特に、サッカーに比べて野球をする子どもたちが少なくなってきている時代で、桑田選手や田中将大選手のすごさをテレビで見ても遠い世界に見えてしまうかもしれないと思ったのが最初だった。ＶＲを使って、甲子園で実際投げたボールを再現して体験することを通じて、野球、さらには甲子園に夢中になるきっかけになるのではないかと思った。実際、大阪局で実施したイベントでもＶＲ体験には子どもたちが並び、行列もできており、一定の成果を収めたと思う。ただ、制作者としては、テレビ番組との親和性は高いと思っていたが、演出に取り入れる難しさを感じた。

＜放送番組一般について＞

○　８月１３日(月)のＮＨＫスペシャル「船乗りたちの戦争～海に消えた６万人の命～」を見た。2017 年８月１５日(火)の「戦慄の記録　インパール」、８月１５日(水)「ノモンハン　責任なき戦い」の一連の流れの中でできた番組だと思った。偏向しているという意見もあるかもしれないが、机上の空論で作戦を組み立てた参謀本部と現地で苦労した市井の人たちというスタンスで番組を制作していたように思った。ある種の日本の組織の、改まることのなかった欠陥を浮かび上がらせようとしていたのだと思う。戦場の最前線に立った市井の人たちの声をＮＨＫならではの取材力で綿密に取材していたが、おそらくいろいろと評価が分かれるので、それを取り上げるのも勇気がいると思う。

○　昨年、沖縄県の読谷村で戦争遺跡の遺物を少年たちが壊した話に驚いた。最近は極端な歴史修正主義の影響で、戦争を美化するアニメなども出てきており、先の大戦の記憶を継承することが難しくなってきている。だからこそＮＨＫにはこのような番組を頑張って制作し続けてほしい。この番組は、私たちの知らなかった軍属のあり方や船員や漁民が駆り出された実態に迫った非常にすぐれた番組だった。全体構成は、歴史研究者の総論的なコメントはなく、カセットテープを含め、当事者や遺族自身の言葉で番組を構成していく手法がよかった。また公共放送の性格ゆえに、一定の方向に意見を誘導するような姿勢には慎重であった。細部のリアリティーがテーマに重みと深さを与えて、見る者に迫ってきたと思う。軍が担うべき危険な哨戒の任務を軍属が代行させられていたことや、徴兵年齢に満たない漁船民を切り込みの最前線に立たせて犠牲にしたことなどを知り、本当に驚いた。さらに、海軍が民間船の被害を低く見

積もり作戦を遂行したことや元海軍大佐の「輸送・哨戒の任務に当たった犠牲に当初は心を痛めたが、その後何も感じなくなった」という証言は、ことばを失う事実であった。歴史ブームではあるが、日本人として戦争の真実を広く共有するにはこうしたドキュメンタリーという手法は有効だと思った。また、悲しみや苦痛がいつまでも残ることの証左として、７０年以上たっても、毎日おにぎりを供え線香をあげる老人たちの姿を映像として見せたこと、一度だけ証言してその後何も語らなくなった人たちのカセットテープなどは、これから記憶を継承し、日本人がそれぞれの立場でどう考えるべきなのか、大いに勉強になった。この番組がどういうきっかけで作られたのかを知りたいと思った。

○　この番組を見て、小説家の司馬遼太郎が「日清日露戦争のころ、軍隊は国民の税金で賄われており、国民が軍隊を使っていることが共通の認識であったが、その後軍は国家を乗っ取り、太平洋戦争末期には国民は軍の奴隷のようになった。」という趣旨のことを書いていたことを思い出した。戦争が始まると、軍が民間の船を徴用し、輸送船として使用することは日本以外の国でも行われていたが、漁船まで借り出されて前線で本来海軍が行うべき哨戒の任務に就かされていたことに驚いた。また、１０代半ばの漁師までフィリピンへの物資輸送の任務に就かされていたことはめちゃくちゃで、船を焼かれて上陸を余儀なくされたあとは、竹槍を持たされて最前線で米英軍と戦うように命令され、自決用の手りゅう弾まで渡されていたことを聞いて、後に沖縄に米軍が上陸したときときに、軍が住民に自決用の手りゅう弾を渡していたことが頭に浮かんだ。海軍が開戦の２か月前に、輸送船の損害の机上演習を行い、あまりの損害の多さに対して損害を減らすための対策や強化といった方向にはいかず、計算方法を変え、損害推計値をごまかしただけだったということは、太平洋戦争とはどのようなものであったかを考えさせられるものだった。また、このようなずさんな輸送計画のもとに戦地に送られた兵隊たちも悲劇だったと思う。最後に毎年終戦の日が近づくと、ＮＨＫはさまざまな取材を行い、これまで知られてこなかった太平洋戦争と国民のかかわりについて明らかにしてきたが、この番組を見て、証言している方たちが９０代で、戦争を体験してきた人たちは少なくなってきていると感じた。

○　まず、戦争の証言をする方が９０歳を超えた方ばかりで、だんだんと肉声として語れる方がいなくなってきていると感じた。１０代半ばの漁師が一日１２時間の哨戒任務を命がけでさせられ、最終的に軍属扱いにされるということに衝撃を受けた。まさに自分の子どもが、もう一度そのような戦争が起こったときにそこへ放り込まれることになっていくのかと考えざるを得なかった。また、データの改ざんは今も昔も変わらないと感じた。国民に対して正確な情報をいろいろと出していく一方、聴く側もパ

ニックを起こさずに正確な情報を真摯に受けとめる姿勢ができてくれば、いろいろな災害、あるいは、戦争の可能性を少しでも低くすることにつながっていくのではないかと思った。今まさに南シナ海などは物騒な状況になっているが、どういう状況が過去と似ているのか、戦争にどれだけ近づいているか、知りたいと思った。

○　タイトルを見て海軍の話だと思っていたので、民間の漁船や商船、その乗組員たちの話だったことに驚いた。これまで知らなかったが、想像以上に悲惨な戦争の話だと感じた。7,000 を超える民間の船が海に沈み、６万人以上の民間人の犠牲が出ていたことを知らなかったので、貴重な番組だと感じた。マッピングなど事実を提示していくのは、見る側は衝撃を受けると感じた。ガダルカナル島の生存者の報告書の中身や、船員が上陸して餓死した話や、当時の乗組員の肉声が次々展開されていくと、本当に怒りを覚えた。生存者の肉声がテープに収められていたが、「朝も昼も夜も爆撃が続いて、海岸が変形するほどだった」ということばに、映像で見るよりも悲惨さを感じた。ＮＨＫならではの取材力を感じたが、悲惨な史実を伝えていってほしい。また、放送だけでなく、ＤＶＤの貸し出しなどアーカイブスの活用も考えてほしい。

○　番組を見るまでこうした事実はまったく知らなかった。戦争で命を落とした方の中で、一方的に軍属として、非常に危険な状況に置かれた事実に衝撃を受けた。拒否できずに６万人もの方たちが亡くなったことに不条理ややりきれなさを感じた。番組全体は寒々としたトーンでまとめていて、戦争の悲惨さをうまく可視化できていた。また、打電の場面を何度か挟んだり、ジャングルをさまよう場面ではカメラワークを工夫したりしていて、うまい演出だと感じた。沈没した船の被害をマッピングなどで示していたが、赤い点が増えるごとに何人もの方が亡くなったことを感じさせ、見ていて恐ろしくなった。番組を見終わって、ドキュメンタリーにおいては映像での表現が非常に有効だと思うとともに、あらためて番組づくりにおける映像の使い方の難しさを感じた。

○　「こういう事実に驚いた」という話を聞くと、広く視聴者に伝えられたことには大きな意義があったと思う。この番組の大きな成果は、民間から動員された商船、漁船がどこでいつ沈められたのかを突き止めたことだと思う。軍艦については国のデータとして残っているが、民間の船についての情報はない。全日本海員組合がボランティアで調査したことによって、どのような船がいつどこで沈められたのかがわかってきたことを強調してほしかった。海軍は合理的だったともいわれているが、木造の漁船まで動員されていたことや、戦争開戦前から隠ぺいねつ造の計算が行われていたことを伝えたことは意味があったと思う。昔の海員の方から、外海仕様の船と穏やかな内

海航路用の船は違うにもかかわらず、内海用の船でフィリピンまで行くよう命じられたと聞いた。こういう事実や海員組合の資料館も紹介してほしい。また、ナレーションで「全体の何％が」というコメントが何に対する割合なのかわかりにくく、聞いた人は混乱してしまうように感じた。

○　番組冒頭のマッピングで、沈没した民間船の赤く染まっていく感じが海の墓場、血の海のように感じられて、衝撃の連続だった。番組で初めて知る事実に驚く一方で、この残酷な事実を隠ぺいしていたことは今も変わらずあるからなのか、それほど驚かなかった。インタビューを受けられている方が９０代で当時のことを知っている方が本当に少なくなっているので、貴重な証言で、テープに録音されていた当事者の肉声が公開されたことは、私もいろいろ感じる事があったし、知ることができてよかった。これからの人たちは自分で知ろうとしてもなかなか知ることができない事実だと思うので、伝えていくことが大事だと思う。この番組を通して、「戦争が嫌だ」という証言が印象に残っていて、とてもよい番組だったと思う。一方で、これまで戦争について語ろうとしなかった当事者たちがなぜ山下さんには語ろうと思ったのか知りたい。

○　いちばん衝撃的だったのは船の被害のマッピングで、背筋が凍りつく思いで見た。どんどん船が沈み、多くの方が亡くなったのだと思った。もとになるデータはどのように入手したのか知りたいと思った。録音された元海軍大佐の肉声に憤りを感じ、ＮＨＫだからできた番組だと思う。こうした事実を戦争体験のない私が子どもたちの世代に伝えるのは難しいと思うので、番組を通して多くの人に伝えてほしいと思う番組だった。

○　昨年、全日本船員組合が刊行した太平洋戦争を体験した船員たちの手記を読んでいたが、この番組はとてもわかりやすかったし、ＮＨＫが取り上げてよかったと思う。民間の乗組員の被害が、海軍軍人よりも大きかったことが会員組合の資料からわかるので、番組内で海員組合の仕事としてもう少し紹介したらよかったと思う。太平洋戦争当時、海軍が行ったデータを低く見積もっていたが、最近では障害者雇用の問題でも同じようなことが起きているので、ＮＨＫには厳しく追及してほしい。戦争の恐ろしさや愚かしさを伝えるという意味でも大変意義があったと思うし、政治が暴走しないように監視をしておかなければならないという観点からも大変意義の深い番組だったと思っている。また、この番組が大阪局で制作した経緯について知りたいと思った。

○　ことしの戦争関連のＮＨＫスペシャルを、いずれも戦争と平和を考えながらじっくりと見た。生存者の証言などから、徴兵年齢に満たない漁師たちが軍属として無防備な漁船で危険な哨戒任務にあたり決死の覚悟で打電したことや、軍事物資を運ぶ民間徴用船が制海権を失った海で多数沈められ、多くの船員たちが悲惨な死を遂げたことを知り、ずさんな計画で無謀な戦争に突き進み、多くの国民を犠牲にした軍上層部にいいようのない憤りを強く覚えた。関東軍とソ連軍が国境紛争で交戦し日本が大敗を帰したノモンハン事件の責任を、現場の将校に転嫁して自決させる一方で、作戦を指揮した関東軍参謀は責任を回避するという、軍部の無責任体制を悔い改めることなく、太平洋戦争に突入し、不条理な判断が重なって膨大な数の戦死者を出すに至ったと思う。私たちは忌まわしい過去に目を背けるのではなく、戦争の真実を追究し二度と戦争をしないとの強い思いを、１人１人が持つようにならなければ、消耗品のように扱われ、無残な最後を遂げた多くの人たちの無念さは消えないのではないかと感じた。また、戦後も悲惨な生活を余儀なくされた戦争遺児のことも忘れてはならない。終戦直後、軍部は機密資料を焼却したとのことだが、外国政府の未公開資料や個人宅に埋もれている戦争の資料を発掘して、戦争の真実に迫るドキュメンタリーを制作しつづけてほしい。

（ＮＨＫ側）

戦後７３年が経過して、戦争をイメージできない人が多くなってきている。戦争の記憶の風化を防ぐため、毎年夏には、戦争関連のドキュメンタリーを制作している。ドキュメンタリーの手法としては、事実を集積して番組を制作し、視聴者にそれぞれ感じ取ってもらっている。軍部の問題だけでなく、８月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児～」も含め、毎年いろいろな領域・角度から戦争についてバランスよく伝えようとしている。

（ＮＨＫ側）

担当したディレクターが、神戸にある「戦没した船と海員の資料館」を訪ね、６万人もの船員が犠牲になったことに驚き、番組を制作したいという思いからスタートした番組だ。戦争体験者が非常に少なくなっているので、取材には大変苦労があった。一方、取材を進める中で、これまで比較的光が当たらなかった漁船の乗組員の方のことや、輸送ではなく哨戒任務で大勢の方が亡くなっている事実を伝えたいと考えた。沈没した船のデータは、海員組合や市

井の研究者が地道に集めたデータを合算して作成した。現代に戦争のことを伝えていくうえで、日の当たってこなかった事実を積み重ねてわかりやすく提示しながら視聴者とともに考えていきたい。また、ナレーションにおいて、パーセンテージの全体が何かわかりにくかったという指摘については、気をつけていきたい。研究家の山下さんに、船員の方たちが戦争体験を告白したことについては、自分が死んでからであれば公開してもいいということで、戦争の記憶を託したということだ。制作にあたった自分も戦後世代だが、視聴者の方々と共有できる番組を制作していきたい。

○　６月２９日(金)のかんさい熱視線「沸騰！ＫＹＯＴＯ争奪戦～ホテル開発ラッシュの光と影～」を見た。京都では宿泊施設が激増していて、中国人に不動産が買い占められていると聞く。番組では、５０軒不動産を購入した中国人が紹介されていて、エリアごと購入して、通りに名前をつけようとしていることを知り、ここまで状況が進んでいることに衝撃を受けた。京都に観光客がたくさん来ると、いろいろと経済的にもいいと思うが、生活していく中で暮らしている街の形が変わっていくかもしれないと思うと、こうした現実を京都で暮らしている住民もそれ以外のエリアの方たちも、きちんとどうしていくかを、それぞれに考えたり、街をあげて考えたりしないといけないだろうと思った。一方的に悪いということではないかもしれないが、街に住む人がいなくなっても、街としては成り立たないので、なかなか難しい問題だと思う。何となくではなく、きちんと知っていることが大切だと思ったので、随時こういう事実をきちんと伝えてほしい。

○　７月からの２か月間は、「歴史秘話ヒストリア」、８月７日(火)の事件の涙　Ｈｕｍａｎ　Ｃｒｏｓｓｒｏａｄｓ「さっちゃんは生きたかった～大阪釜ヶ崎　女性医師変死事件～」、ＮＨＫスペシャル「ノモンハン　責任なき戦い」など関心を引く番組が多かった。

○　７月２０日(金)のかんさい熱視線「関西にカジノ！？～ＩＲの光と影～」で、円グラフに間違いがあって、訂正された。数字は、円グラフにすると非常にわかりやすくなるが、間違ったイメージを与えやすい。

○　８月２６日(日)のルソンの壺～８月号～「女性が創る“新”マーケット」を見た。女性をターゲットにしながらも商品を一点に絞り込んで成功した企業と、多数の新商品を供給し続けて成功している企業と、対照的なビジネスを紹介しており、とてもお

もしろかった。季節ごとに大量投入するアパレル業界の常識を覆し、定番のバレエシューズに絞りながら、おしゃれや履き心地と求めやすい価格を追求して勝負に出た社長の決断力に大変感心した。一方、300 円ショップは、女性客が訪れるたびに嬉しくなるファッショナブルな商品に出会えるように、女性店長経験者に自分の欲しいものを企画させて月間 400 種類もの新商品を作り続けているが、低価格、高品質の商品の生産を可能にした秘密にも番組で触れてほしかった。

○　８月２９日(水)の歴史秘話ヒストリア「武田信玄“甲陽軍鑑”が語る真実」を見た。「甲陽軍艦」は偽書だと歴史研究者は皆思っていたが、つい最近の発見で史実に基づく資料だとわかったことに本当に驚いた。しかも、ＮＨＫの大河ドラマの歴史考証をしてきた研究者が、かつては偽書だと言っていたが、すごい発見だと言わせたところがおもしろいと思った。また、５月１６日(水)の「ご存じですか？観応の擾乱　武士の世をつくった兄弟ゲンカ」もおもしろかった。

○　「チコちゃんに叱られる！」をときどき見ていて、家族が「ものを考えて生きないといけない」と言うようになった。私も以前に同じことを言っていたのだが、ＮＨＫの影響力の強さを感じた。見解が紹介されたあとに「諸説あります。ご紹介したのは、監修してくださった専門家の見解です。」と小さい文字で書かれているが、確定的な答えのように受け止める人がいるので、注意が必要だと思う。

○　「チコちゃんに叱られる！」を毎週録画して見ている。しっかり調べたうえで真面目にふざけていて、今までなかったようなすばらしい番組だ。

○　現在、風疹の流行が関東地方を中心に拡大しているので、恐らく来年の春先から夏以降に関西でも流行すると思う。流行してからでは遅いので、関心を持って取材を行ってほしい。

○　台風２１号が関西に接近した９月４日(火)前後は、しばらく東京にいたので、関西の状況を知りたいと思っていたところ、９月６日(木)の朝に北海道地震が起きたので、その日のニュースは地震の情報一色になった。特に首都圏にはいろいろな地方の人がいるので、北海道地震の報道も重要だと思うが、関西の状況も伝えてほしいと感じた。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

平成３０年７月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、「ニュースほっと関西」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	西田　賢治	(大阪商工会議所　元常務理事)
副委員長	山﨑　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	篠　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
	田辺　眞人	(園田学園女子大学　名誉教授)
	原　さだ	(財団法人龍神村開発公社　専務理事)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜「ニュースほっと関西」（総合　６月１３日(水) 後 6:10～6:59 放送）について＞

○　「ＳＴＯＰ子ども虐待」の企画は、とても気になる話題だった。大阪局がキャンペーンとして取り組んでいることもあり、とてもこまやかで、一般の人が知らないことに切り込んでいたように思う。翌日の放送が気になり、続きを見たいと思った。多くの視聴者が見ている夕方６時台に放送することで、注意喚起につながると感じた。取材先の児童相談所では「子どもの一時保護が２日に１件」という数字に驚いた。市民が虐待に気づいたときにすぐ相談できる場所があるという、大阪のシステムもすごくいいと思った。

○　それぞれのコーナーは充実した内容だったが、番組全体としてはまとまりに欠けて

いて、少し見にくいと感じた。虐待の問題は、自分は絶対大丈夫だと思っていても虐待に至るケースはあるので、「ＳＴＯＰ子ども虐待」の特集は、本当に興味を持って見た。自分自身、この特集を初めて知ったが、小さい子どものいる母親たちにも見てほしいと思うので、うまくＰＲしてほしいと思う。学校や病院からの通報だけでは虐待が見過ごされる可能性があるので、こうした特集は大事であるし、事前に番組の情報をうまく伝えることで、さまざまな人に広く見てほしいと思う。

○　さまざまなコーナーがあるので、番組全体として見にくさはあったが、しかたがないように思う。ゲームバーの摘発が２分、大阪万博関連のニュースが３分に対し、そのあとの「ＳＴＯＰ　子ども虐待」の企画が７分だったことに、ＮＨＫの良識を感じた。大阪府では、６か所の児童相談所であわせて１５人ほどスタッフを増員したということだが、子どもの虐待は切実な問題なので、全国でも増員されればと思う。「梅雨の体調不良の対策」の話題は多くの人が感じていることだと思うので、テレビを見ながらできる簡単な対処法はよかった。「ほっとタウン」では、忠岡町が日本一小さな町であることを初めて知った。ただ、そこで紹介された店のギョーザ一人前の値段が聞き取りにくかったことや、菅原神社のこま犬がその形を見るかぎりでは獅子ではないかと気になった。「えりの天気」で、兵庫県淡路島でラベンダーを持って帰ることができる場所を紹介していたが、現地への行き方も紹介してほしかった。番組全体としてはまんべんなく、それぞれおもしろいテーマだったと思う。

○　６時半以降は各県からの放送になるので､大阪からの後半部分の放送は初めて見た。児童相談所の企画で「２日に１件保護される」「大阪府で一昨年保護された子どもは 2,148 人」ということを知り、驚いた。子どもたちにとっていちばん安心安全であるべき家庭から一時保護しなければならない判断をくださねばならない大変な仕事だと思う。虐待を防ぐためにいろいろと考えさせられ、心と体に深い傷を負った子どもたちのことを考えると、本当に心が痛んだ。母親から十分な愛情を受けられなかった女の子が、反動から学校でいじめをし、出産後に子どもを捨てて姿を消した話を聞いたことがある。愛情を受けられなかった子どもには傷が一生残るのだろうと思う。学校からの通報で安全が確保されていたが、仮に、人も地域も国も愛せない大人に育ってしまったら悲しいと思う。さらに、地域でできることがあれば具体例も知りたいし、母親の心のケアも必要だと思うので、引き続き取材して周知してもらいたい。大阪泉州桐たんすの中継では、大阪は桐たんすの発祥の地であることや、160 もの工程があることを初めて知り、驚いた。

○　児童相談所が虐待の実態を把握しながら､深刻な事態を招いたことが報道されるた

びにやりきれない思いになる。今回の企画で、同意不要の一時保護の事例が紹介されていたので、現場の方々の大変な苦労と判断をよく知ることができた。自治体が増員や施設増などで本格的な対応に乗り出していることも紹介されたが、表やグラフなどで視覚的に理解できるような工夫をすると見やすかったと思う。現在の法制度の課題として、虐待を受けた児童が転居する場合、その後の経過が分からなくなるケースも説明していたが、今後の運用上改善すべき点も指摘されていて、よく理解できた。２回目がどういう内容だったのかを知りたくなった。次に、斑鳩町の保育料減免措置が正しく行われていなかった件について、教育委員会の教育長の謝罪会見が、「職員は上司に意見を言う。また上にたつものとしては真摯（しんし）に耳を傾ける。」という非常に奇妙な組織論で終わっており、結論がよくわからなかった。国からの減免措置の通達は、各自治体の判断で済ませられるレベルのものなのか疑問に感じた。また、どうしてそのような判断がされたのか。行政の適正な執行をチェックするべき議会が、この３年間、どのような監視をしてきたのか。首長と議会、行政ともに、それぞれの立場で責任があるのではないかと思う。ＮＨＫはどう取材したのか。指摘されずに、そのまま放置した案件がほかにもたくさんあるのではないかと思った。

○　前半の近畿向けのパートで、大阪万博のプレゼンテーションの報道があり、大阪以外ではあまり盛り上がっていないが、できれば大阪が選ばれてほしいと思った。「ＳＴＯＰ子ども虐待」では児童相談所を取材していた。かつて児童相談所の方々の業務の大変さを知る機会があったが、虐待を受けている児童の一時保護のケースが取り上げられていて、以前に比べてある程度迅速な対応が可能になっていると感じた。翌日の企画として「一時保護のあとも取り組み続く児童相談所」を予告していたが、虐待されて乳児院などに行き着く子どもたちはたくさんおり、手続きがどれほど大変かは理解しているが、虐待について日本では法整備が進んでおらず、最悪の結果に至ることがまだある。継続的に取り組んでいるテーマということだが、これからもしっかりとした取材に基づいて情報発信していただき、１人でも多くの子どもたちが安全に幸せに暮らすための世論形成に寄与してほしい。「梅雨の体調不良」は気温湿度や気圧の大きい変化で、自律神経が乱れることが原因だと納得したが、７月から８月は重症患者の救急搬送数が急増する時期なので、水分補給などの体調管理についても伝えてほしい。京都に新たに通信アプリ大手の拠点ができたというニュースについて、大阪ローカルニュースの中で取り上げられたのはなぜかと思った。「ほっとタウン」では忠岡町が紹介されていた。日本一面積が小さいことを売りにしているようだが、１６人の地元の長老たちで運営されている神社があることはすばらしく、ユニークなこま犬が作られた理由を誰も知らないというエピソードもおもしろかった。忠岡町は岸和田市との合併を住民投票で拒否した町だが、地元に対する愛着と誇りが取材を通して

伝わってきた。

○　特に子どもの虐待の問題と法科大学院のニュースが気になった。一時保護される件数の多さに驚くとともに、なかなか難しい問題だと思った。虐待を防止するために緊急かつ職権を利用して一時保護する作業がどうしても必要だということがすごくよくわかった。いろいろな立場の人から通報があってそれを全部受け止めないといけないことは本当に大変だが、主観的な通報もあると思うので、職権の利用の判断も難しいと思った。ただ同時に、子どもたちの耐える力や即応力を育てていく方法も新たに議論していかないと、子どもたちが成人したときに厳しい社会に立ち向かっていくことが難しくなっていくように思う。法科大学院の廃止のニュースは、この国の法曹の根幹をなす仕組みが揺らいできていると感じた。法科大学院ができた当初、三権の一つに携わる人たちをこんなに簡単に量産すれば質の点で大丈夫なのかと懸念していたが、今回の廃止のニュースは、逆に、採算が合わないからやめるのかと感じた。さらに、海外のロースクールと日本の法科大学院ではどのように制度が違うのかということや、その環境がどのようにあるべきかについて一般視聴者でもわかる説明もあればありがたい。また、この国にどれくらいの法曹人口が適当かということを探ってもいいのではないかと感じた。

○　「ＳＴＯＰ子ども虐待」の企画の冒頭で「関西には２７か所の児童相談所がある」という説明があったが、「関西」はイメージが漠然としているので、「関西２府４県で」といったほうがより正確に伝わると感じた。児童相談所の現場がリアルに伝わってきて、非常に説得力があった。２０人ものスタッフがひっきりなしに鳴る電話に対応する映像も臨場感があった。２日に１件のペースで保護されていることにもすごく驚いた。一昨年は大阪府内で 2,148 人の子どもを保護したということだが、最初に関西の児童相談所の数を紹介していたので、関西全体の数字も紹介すればよかったと思う。「子どもは保護されることを理解しているのか」という記者の質問に対して、児童相談所の人のことばを通じて子どもたちの様子がわかってよかったし、保護者に伝える際も「罰するということではなくて一緒に考えていきたい」と話していたのもよかった。「一時保護」の定義をテロップできちんと説明されていたのはよかったが、「児童」が何歳までか説明があるとより深く見られたと思う。とても大切な問題なので、今後も「ＳＴＯＰ子ども虐待」を続けてほしいと思った。大阪泉州桐たんすの中継で、今どきの感覚のモダンなたんすの存在を初めて知ったので、おおよその価格も知りたいと思った。「ほっとタウン」で紹介した忠岡町は、全国でもっとも小さい町であることは知らなかった。また、気象病のリポートではすぐできる対処法も紹介されていてよかった。幅広い話題のニュース番組だと感じた。

○　大阪府北部地震と平成３０年７月豪雨が発生する前の放送で、この番組が平和に感じる内容なので、天災がいかに社会に大きな衝撃を与えるのかを痛感した。「ニュースほっと関西」という番組で、「ほっと中継」「ほっとタウン」「ほっとスポーツ」というコーナーはそれぞれほっとする内容でよかったというふうに思う。この時間帯の民放のニュースは、何かのトラブルをあげつらうような内容が多いように感じているが、ローカルニュースとしてはＮＨＫらしくてよいと思った。虐待の企画については、根本的な問題として貧困や教育との関係など結びつけられれば、日本の社会的な課題を掘り下げていく内容になるのではないのかと思う。今後も関西のいろいろなニュースを掘り起こしてほしいと思う。

○　ニュースや報道番組が集中する夕方６時台で、「ニュースほっと関西」は地域に密着したニュースのほか、現場からの「ほっと中継」、街の話題を伝える「ほっとタウン」、地元選手の活躍を伝える「ほっとスポーツ」とバラエティーに富む身近なニュース番組になっていると思った。國生千代リポーターの「ほっと中継」では、大阪泉州桐たんすの組み手加工は見ごたえがあった。大阪発祥の指定伝統工芸品の大阪泉州桐たんすを独立した番組として取り上げてはどうかと思った。全国一小さい町、忠岡町で櫻井有里沙リポーターが見つけた菅原神社の逆立ちしたこま犬は、「まちけん参上！」にうってつけの内容だと思った。宮司さんもそのいわれを知らず、町並みなども合わせてほんわかとした気分になった。「ほっとスポーツ」では、乾貴士選手や香川真司選手が関西出身だと分かり、ぜひとも応援しようという気持ちになった。山本賀保子スポーツキャスターは、セパタクローという珍しいスポーツや吹き矢なども取材し、みずから挑戦しているが、彼女の取材スタンスがマイナーなスポーツに取り組む若者たちの励みになるので、こういうスタンスを続けてほしいと思う。キャスターやリポーター、気象予報士と出演者はみんなで６人だと思うが、男性は近田雄一アナウンサーだけで、女性の活躍ぶりが光っている。ニュースそのものについては、児童相談所の取材で、児童虐待への取り組みの難しさが伝わってきたが、増加傾向にある児童虐待は一過性のものではないので、ぜひ継続的に報道してほしいと思う。

○　時間的にふだんは絶対に見ることができない番組なので、今回は非常に新鮮な思いで見た。スタジオ、キャスターの方々、細部のＢＧＭなど、番組全体の印象としては大変さわやかで、まるで朝の番組のように感じた。むしろもう少し崩してもいいのではと思うぐらい、すべてにわたってのりが効いた浴衣のようにパリッとしていて、好印象を持った。細部についてはいくつか気になった点もあり、一番気になったのは、冒頭、複数並んだニュース項目の中から次のニュースがピックアップされ、大きく前

面に出てくる際に、バックの色が鮮やかな黄色で塗られていたことだ。文字も青や赤で色がつけられており、少し目がチカチカした。そこまで注意喚起しなくてもいいように思った。そのほか字体は斜体ではなく、シンプルに正体を使ったほうが読みやすいと思った箇所があった。一方、同じ図版を用いた説明で、説明に合わせて文字の色をがらりと変えて、情報が変わったことが視覚的にはっきり伝わってくる場面もあり、これはニュースにおける文字の出し方として非常に有用であり、映像だからこそできる表現だと思った。最後に近年の天気予報は、気象予報士の似顔絵や、「冬将軍」など擬人化された気象キャラクターの登場が多いように思う。若干のうるささを感じてしまった。

（ＮＨＫ側）

近畿ブロックでは６時３０分に各府県のニュースに切り替わるので難しい点もある。大阪の視聴者はキャスターが通して出ており、ひとつの番組として見ているので、もう少しメリハリつけてほしいと思うかもしれない。いずれにせよ、前半に近畿地方全体で重要なニュースを入れつつ、後半も日々できる工夫をしている。

（ＮＨＫ側）

まず虐待の問題だが、これまでも関西、特に大阪では児童虐待が多く、そのたびにニュースや企画として放送してきた。2017 年は関西２府４県で１万 5,000 人以上が児童相談所に通告されているということで、今年度から「ＳＴＯＰ子ども虐待」というシリーズを始めた。大体１、２週間に１回の頻度で放送していて、今回は５回目だった。私がかつて取材した１０年前と比べ、児童相談所の一時保護の対応が速くなっていて、強制力も強くなっている。対応数も増えていて、１日では伝えきれない内容だったので、まずは「保護するときにどのように対応しているのか」、翌日に「保護した子どもをどのように返すか」を放送した。今後も貧困などいろいろな視点から、虐待について伝えていこうと思っている。バラバラで見づらいなど番組構成に関する指摘についてだが、その日に起きたニュース、虐待キャンペーン、桐たんすなど地域に密着した話題、普遍的な問題などについて、短いものと長いものを組み合わせながら、多くの視聴者に見てもらいたいと思いながら工夫している。その中で、近畿地方全体の皆さんに知ってほしいニュースはできるだけ前半に入れている。斑鳩町の保険料の減免ミスのニュース

は、情報量としては少なかったが、ほかの地域でも同じようなことが起きているのではないかと思い、多くの人に知ってほしいので前半に入れた。気象病については、この時期は梅雨に入って１週間で災害が起きやすい時期だったが、一方で災害だけでなく身近で多くの人たちが抱えているような身体の不調も取り上げたいと思っていた。災害が迫るとなかなかそういう話題は取り上げられないので、できるだけ早いタイミングに放送した。７月から８月は熱中症になりやすいので、注意喚起していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月９日(土)の「バラエティー生活笑百科」を久しぶりに見た。土曜日のとてもリラックスできる時間帯に放送される番組で、何も変わっていないので、よかったと思う。気づいた変化は進行が笑福亭仁鶴さんから桂南光さんになっていたということだけだ。漫才で話題を深めていくところも定番で、漫才のところがしっかりしていればいいのではないかと思った。

○　日常のさまざまな問題を取り上げたわかりやすい法律相談の番組の先駆けで、以降民放でも同様の趣旨の番組がいくつか見られる。相談者はいつもベテランの漫才師で安定感がある。宮川大助・花子さんの漫才はあいかわらずキレがあってさすがだった。ゲストの川中美幸さんの芸人顔負けの話術もよかった。この番組のよいところは、２人の相談員が反対の意見を言って、ゲストが自分の見解を述べた後に、比較的あっさりと弁護士さんが回答を述べるところだ。これによって時間の割にかなり内容の濃い番組になっている。この番組は、長年、仁鶴さんが相談室長としてＭＣを務めてきたので、関西のさまざまな落語家、漫才師、歌手、俳優さんが出演してきたのだと思う。ＣＥＯ役の南光さんはおもしろいが、仁鶴さんも元気になって再び出演する姿を見たいと思った。

○　久しぶりに見たが、身近な問題と簡単な解決方法をアドバイスするスタイルは昔から続いており、ついつい見てしまうと思った。お笑い芸人さんによる笑いを通じて、気づかぬうちにアドバイスを受けているというスタイルはなかなかいいと思った。大助・花子さんの喋りがよどみなく、しっかりと話が入ってくると同時にご夫婦の仲のよさや人柄のよさも感じられて、幸せな気分になった。改めて西の人間だと思わされるような気持ちにさせられる番組で、二重にお得をした感じがあった。

○　久しぶりに見て、まさにタイトル通りの番組だと思った。ほのぼのとした笑いの中に、視聴者の日常にあるようなことがちりばめられていておもしろかった。だれもがついていきやすい、雰囲気のよい番組だと改めて思い、長寿番組になっていく秘けつなのかとも感じた。番組の内容は、兄弟で相続を半分ずつ分ける必要はないという結論や、寄与分についての話がすごく勉強になった。アルバイトでお金をもらっていたらもらえないなど、ほかの事例も紹介されていたので、この寄与分についてさまざまなケースがあるのではないかと知りたくなった。３０分では少しもの足りないように思うが、もっと知りたいという気持ちをおこす分にはよかったと思う。民放では２時間番組がすごく多いが、働いているとそれほど時間に余裕はないので、これぐらいコンパクトに日常のいろいろなことが勉強できる番組は、ちょうどよいと思った。

○　非常に懐かしかった。子どもたちが小さい頃一緒によく見ていて、「淡路島や大阪城、琵琶湖は自分のもの」という上沼恵美子さんの楽しい冗談に大笑いしていたが、最近は出演していないことを初めて知った。宮川大助・花子さんの漫才を久々に見たが、本当に絶妙でおもしろかった。３世代で安心して楽しく見られる番組なので、それが長寿番組になった要因かと思う。こういう番組は続けていってもらいたいと思う。また、自分の子どもたちが弁護士を初めて見た番組で、どういう仕事なのかと興味を持つきっかけになった。

○　土曜の昼は自宅によくいる時間帯なので、「バラエティー生活笑百科」は、ＮＨＫの中で昔から一番よく見ている番組だ。この番組の魅力は、生活に身近な問題を、法的に解決するにはどうしたらいいかを勉強できることだと思う。その意味で、今回の相続の問題で寄与分というのがあるとそれも恒常的に家業の手伝いをしている場合は認められるが、暇のある時の手伝いや、時給をもらっている場合は寄与分として認められないという説明はわかりやすかった。ただ、お好み焼き屋からもらった鉄板を自分のステーキ屋の壁の飾りに使うという今回の相談事例が、実際には何件あるのかと考えると、むしろスタジオのやりとりで出てきた、別の事例のほうがありうるように感じたので、扱う事例はこの番組の趣旨を生かしてほしいと思った。仁鶴さんが出演していたときの“間”はとてもよかったので、元気になったら復帰してほしい。

○　土曜日の昼は笑いの時間というイメージがあるので、曜日も時間もピッタリだと思う。最近人気のある若い漫才師が出てきているが、こうしたベテランの漫才師による漫才は本当に安定感があって、見やすい３０分だった。ただ、漫才以外が気になってしかたなかった。出演者が台本を読んでいる感じが強く、桂吉弥さんまでが下を向きながらせりふを言っているようなのが、南光さんとのやりとりが逆におもしろく感じ

られて、すべてがシナリオ通り、打ち合わせ通りだと感じた。７月１４日(土)の加藤一二三さんが出演した回は純粋におもしろかった。ほかの出演者が「シナリオ通りにいってない」と言っていて、だからおもしろいのかと思った。落語家さんも出ているので、ハラハラさせられるような会話や、もっとおもしろいやりとりをしてほしい。

○　ＮＨＫの番組の中で「バラエティー生活笑百科」は大好きな番組だ。よい解釈をすると、台本通りで安心、逆に、アドリブのときや場が凍りついているときはハラハラして、それぞれおもしろく見ている。今回もしっかりと構成作家がいて、台本通りに進行していると思った。いつも出てくる事例は身近でおもしろいと思うが、ステーキ屋の鉄板の事例はありえないと思いながら笑って見ていた。私が誰かに使ってほしいと渡したものを違う目的で使われたらショックだろうと、自分の頭の中で変換しながら見た。

○　なかなか番組を見る機会がないが、青春時代は仁鶴さんの全盛期だったので、番組冒頭で仁鶴さんの声だけが聞こえて本人が出演していないことは、非常に寂しく感じた。３０年以上続いている長寿番組ということだが、私の知るかぎり、作りが全く変わっていないのは改めてすごいと思うし、おもしろかった。大阪の空気感が色濃く漂う作り方が改めていいと思った。以前と比べて、澤登弁護士の話が少し固いのは、演出の一つとも思った。

○　短時間で解決策を示すファミリー向けの法律問題はそれほど多くあるわけでなく、台本通りで類似した相談内容が多いにもかかわらず、なぜ３０年以上も続いているのか不思議だ。相談内容に関心があるのでなく、相談内容をおもしろく紹介する漫才や、南光さんと相談員とのやりとりを楽しみにしているシニアの固定客が多いと感じた。７月１４日(土)は加藤一二三さんが出ていたが、おもしろそうなゲストが出演していることも人気が続いている理由かと思う。相談員のコメントは別にして、弁護士の補足説明はそれなりに参考になる。司会進行が桂南光さんに変わったので、冒頭の仁鶴さんのセリフと似顔絵が気になる。

○　次から次へと移り変わっていく時代の中で、この番組がいまも健在であることをとてもうれしく思った。半ドンで下校した土曜の昼といえば「バラエティー生活笑百科」であり、上沼恵美子さんを知ったのもこの番組で、私にとっては、やすきよ漫才の次に親しみやすい庶民的な関西そのもの、また昭和の時代そのものでもある。仁鶴さんが出演していないのは残念だが、オープニングに声だけを聴いても違和感のないぐらい、自然に入っていけた。台本の流れや掛け合い、安定感のある漫才の、予測可能な

展開から生まれる笑いは安心感を与えてくれる。生活に根差した法律相談に簡潔にわかりやすく答え、さらに確実な笑いで包んでいく。シンプルな番組を飽きさせず、これだけ長く続けていくのは、制作者も出演者も本当に大変だと思うが、番組のさらなる長寿を期待している。

（ＮＨＫ側）

仁鶴師匠は体調が回復次第、番組に復帰するということで、今も相談室室長という肩書き、南光さんは相談室ＣＥＯということで、役割分担している。

（ＮＨＫ側）

「バラエティー生活笑百科」は昭和６０年に始まった番組で、これまで大切にしてきたのは、番組としての安定感で、いかに効率的に制作し、しかも皆さんに見てもらえる番組を作るかということだ。番組が続く中でも、時代に合わせていくことが必要だと感じている。番組を制作していくうえで分析してみると、この番組を見ている方には３つの期待感があると思っている。１つは、相談員のやりとりの中の笑いの部分を重視している方、２つ目はゲストにこんな人が出るからという方、３つ目は身近な問題、法律的な解決法というその情報的なことに興味を持っている方だ。番組が始まってしばらくは笑いの要素で見ている方が非常に多かったと思うが、最近は、３つ目の情報的な要素で見ている方が多いと思う。今回の相談内容がなぜ鉄板の話になったかというと、法律の論点は、贈与としてもらったものを予想とは違う使い方をされた時返してもらうことができるかどうかということなのだが、川中さんは人気のある方なので、ゲストを重視してご覧になる方なら、川中さんに身近なお好み焼き屋の話題が楽しんでみてもらえると考えた。2017年から放送時間が２分延びたときには、情報的な要素に期待されている方が多いと考え、笑いの要素ではなく、弁護士の別コーナーを設けて詳しく解説することにした。取り上げる相談内容は、以前は借金や結婚、離婚など個人対個人の相談が多かったが、最近は個人対社会の相談を積極的に取り上げるようにしている。今回ご覧いただいた回はそうではなかったが、例えば日常生活の中で、こんなことをしてもいいのか、これは法律違反にならないのかというものを時々取り上げる形をとっており、民泊の問題や、ドローンを

どこまで飛ばせるかなど、タイムリーな話題を取り上げ解説していこうとしている。台本を読んでいることが気になるという指摘があったが、基本的に、漫才の中で法律問題を取り上げるので、法律を解説するうえで必要な要素を必ず台本に入れており、漫才部分や相談員、弁護士のコーナーは、台本に基づいて進める形にしている。先ほどの加藤一二三さんの回で「台本どおりいってない」という話があったが、最近はアドリブでおもしろかったところもできるだけ生かしている。番組をあまり変えすぎると、今まで見てもらってた人にご覧いただけなくなることもあるので、今までの仁鶴師匠が続けてきた番組の雰囲気を守りながら、新しい相談内容や笑い、演出方法を加えて、情報性も意識しながら番組を制作していきたい。

○　６月２７日(水)の「ニュース６３０　京いちにち」で、「サムライ茶人」をとりあげていたが、日本茶インストラクターの人が侍の格好で急須でお茶を入れて、その楽しみ方を伝えていた。京都で日本茶をもっと振興させようというときに、急須でお茶をいれようといっても、最近は急須がない家も多い。このインストラクターが、刀のような棒にたくさん急須をさしてお茶をいれていたのは、とてもインパクトがあってパフォーマンスを見た人も「ついつい引き込まれました。」と話していた。番組では、その人が出演する週末のイベントも告知していて、紹介の仕方もよかった。

６月２８日(木)の回では民泊をとりあげていて、民泊事情や地域の住民たちの取り組みを紹介していた。その町に１年で一気に５０軒ほど民泊ができて、このままだと町として機能していかなくなるという課題と取り組んでいる。まちづくり委員会の人が「地域の宿泊客のマナーも勉強してもらいながら、寂れた商店街をまた復活させるつながりができれば」と話していた。京都は民泊が本当に多くなってきており、ホテルもたくさん建設されている状況で、夜には大きなキャリーバッグを持った人たちを頻繁に見かける。こういった地域住民にとって本当に身近な問題に取り組んでいる人たちをもっと紹介してほしい。

○　６月２６日(火)のクローズアップ現代＋「あなたの職場はもう古い！？～イノベーションオフィスの極意～」で、多様な働き方改革が紹介されていた。オフィスを地域に移したからこそ生まれた和歌山の事例として、上空 100 メートルのドローンから伝える特殊なスピーカーが紹介されていた。先端技術を競うコンテストで最優秀をもらったとのことだが、７月１３日(金)の「あすのＷＡ！」でさらに詳しく紹介されていて、普通のスピーカーだと音がかき消されて聞こえなくなるのを、聞こえるように

したことが評価されたということだ。災害時の避難誘導や、過疎が進む地方のために開発したということだが、災害が非常に多い一方で、ドローンの規制が厳しくなっている状況だ。災害が起こったときの伝達手段の一つとして、ＮＨＫがもう少し詳しく紹介すれば、規制が少しでも緩和されるように思う。

○　７月６日(金)に松本智津夫死刑囚が死刑執行を受けたことに対して、オウム真理教の元幹部の上祐史浩氏の記者会見の様子を民放で見た。上祐氏が１０分ほど話したあとに、各社の記者から質問がなかったことに驚いた。ＮＨＫの記者も会見に参加したのだろうか。参加した記者たちが若くて２３年前の事件をあまり知らなかったのかもしれないが、事前の勉強不足のように感じた。

（ＮＨＫ側）

上祐氏の会見にはＮＨＫの記者も参加している。そのときの状況がどうだったかわからないが、重要な会見の時には、しっかり質問できるよう臨んでいる。

○　昼前のＦＭで「天気予報・おしらせ・交通情報」を聞いていたところ、担当するアナウンサーの声がほとんど出ていなかったため、気の毒に感じた。

○　この１か月間、６月２５日(月)のまちけん参上！～あなたの街のおもしろ検定～「滋賀県大津市・石山寺駅界わい」など、滋賀県を取り上げた番組がたくさん放送されている。７月５日(木)のあさイチ「ＪＡＰＡ－ＮＡＶＩ　滋賀・高島市　琵琶湖畔の穴場」では、大山武人アナウンサーが緊張しながらだじゃれを言っていて、とても楽しかった。７月１７日(火)からは３日間連続であさイチのおでかけＬＩＶＥを放送しており、県内では話題になっている。東京にある滋賀県のアンテナショップに行くと、ＮＨＫを見て訪れたという人が多く、滋賀県にゆかりのない人でも「郷愁を感じる。本当に美しい所だと思う。」と話してくれた。ＮＨＫの全国放送を通じて、地域を愛する気持ちを感じとってもらえているように思う。

○　ネットニュースで、７月７日(土)の千葉県の地震の際、緊急地震速報後の中継でＴシャツ姿でディレクターが出演して、状況を伝えたことを知った。働き方改革で人がいなかったのだと思うが、なかなかよいことだと思った。

○　毎月、審議会の冒頭でこの１か月間に放送した主な番組の報告があるが、この番組は見逃してしまったと感じるような番組もある。翌月の番組も紹介してもらっている

が見逃してしまっていることがあるので、ＰＲについて検討してほしい。大学生の息子が先生の勧めでＥテレの番組を録画していたが、若い人に番組を見てもらうために大学を通じてＰＲする方法もあるのではないか。

（ＮＨＫ側）

広報をどうしていくかは重要な課題である。放送を通じてのＰＲだとＮＨＫを見ない人には届かないので、見てもらいたい若い人には訴求しないという議論もあり、雑誌やインターネットを通じての広報にも力を入れている。大学を通じての広報という重要な指摘について、大学での講義などを通じてＮＨＫの番組を見てもらう努力もしているが、いただいた意見を生かしていきたい。

○　６月２９日(金)のかんさい熱視線「沸騰！ＫＹＯＴＯ争奪戦～ホテル開発ラッシュの光と影～」を見た。アジアの投資家が、京都の町屋を猛烈な勢いで次々に買い上げて、なかでも中国の投資会社社長が街の一角を丸ごと買い占めて、通りに中国風の名前を付けたいと考えていると聞いて、京都のせっかくの景観や風情が失われてしまうのではないかと危惧している。行政は残念なことに何の規制もかけようとしていない。インバウンドブームがいつまでも続くと思えず、インバウンド事業に陰りが見えて収益率が低下すれば、私の知るかぎり、投資家も早急に物件を売却して撤退する。後には住民が流出してコミュニティー機能を失い、空洞化した町だけが残る有様になってしまう。ゲストが提言していたが、創造的なルールづくりや地域と共生するまちづくりといった提言に基づいて、目先のことにとらわれるのではなく、生活している人が、魅力を感じる観光都市づくりに今すぐにでも取り組まないと京都が京都でなくなる日が来るのではないかと思った。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

平成３０年６月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、９人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、かんさい元気印「“美”の底力スペシャル」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	西田　賢治	（大阪商工会議所　元常務理事）
副委員長	山﨑　弦一	（日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長）
委　員	市田　恭子	（デザイナー集団 Team coccori　事業代表）
	篠　雅廣	（大阪市立美術館　館長）
	鈴木　元子	（月刊大和路ならら　編集長）
	田辺　眞人	（園田学園女子大学　名誉教授）
	原　さだ	（財団法人龍神村開発公社　専務理事）
	安井　良則	（大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長）
	山舗　恵子	（京都リビング新聞社　編集部長）

（主な発言）

＜かんさい元気印「“美”の底力スペシャル」
（総合　５月２５日(金) 後 7:30～8:42 放送）について＞

○　この番組は初めて見たが、オムニバス形式でよくまとまっていて、見やすかった。文化的景観が近畿の方々の誇りであることや、新しい技術が過去の文化を守ったり、さまざまなものを救済していたりということが紹介されていて、おもしろかった。少し気になったのは、滋賀の放送局のアール・ブリュットに関する説明だ。番組では「子どもや障害者といった専門の美術教育を受けていない人たちによるありのままの心を表現した美術」と説明していたが、アール・ブリュットはもともとヨーロッパ発のもので、精神障害者の方々のアウトサイダー・アートというのがスタンダードな見方で、子どもの芸術は含まない。一般視聴者に誤解を生みかねないと感じた。また、ゲストの皆さんが横に並んで座っていたが、大柄な人がいて、隣の出演者の足元が狭そ

うだったのが気になった。

○　近畿の各放送局の力を結集した番組で、内容が非常に濃く、各テーマはもっと深く掘り下げてほしいものばかりだった。昨年の統計によると、乳がんは女性のがん発生数の第１位だが、京都の大手下着メーカーの取り組みは、乳がんと日々戦わなければならない女性が美を追求しやすいように、優しく導いてくれるものだと感じた。フィギュアについては、新しい試みをさらっと紹介していた程度だったが、非常にマニアックでディープな世界なので、日本の文化として改めて詳しく取り上げてほしい。ゲストでダンサーの大前光市さんのダンスは、大前さん自身の人生を表現していて、美というよりも、見る者に生きる力とエネルギーを与えるものだと感じた。最後のファッションの話題は、神戸タータンの色合いがきれいで洗練されていたが、西成発ブランドの試作品とデザインを担当するおばちゃんたちには圧倒的なインパクトがあり、番組を見終わっても大阪のおばちゃんたちは濃いという印象が残った。番組全体を通してゲストのなるみさんはさすがだと感じた。各局のプレゼンターに適度に突っ込みを入れて、ゲストにも話を振りつつ、どのような題材であってもまとめ、スタジオの雰囲気を和ませてくれる安心感があった。

○　時間を忘れるぐらいとてもおもしろい番組だったが、京都の芸妓さんの映像から始まったのは疑問に感じた。最初に紹介された熊野古道の木漏れ日の映像がすごくきれいで、熊野古道に流れる空気感や神聖なものが伝わってきた。奈良の匠（たくみ）の螺鈿（らでん）の美しさは純粋にすばらしいと感じた。大津のアール・ブリュットの話題では、やまなみ工房の施設長の「教えない」という姿勢から「押しつけないということだろうか」と逆に教えられた気持ちになった。大阪のフィギュアメーカーの新しい仕掛けはとても興味深く、商品もすてきだった。地域発ファッションの神戸タータンは若者発でよかった。一方、西成発ブランドは、もともと経験のない高齢の女性によるもので、「大阪のおばちゃん」の底力に元気をもらった。ダンサーの大前さんの「ひざの下のない部分をあるように想像させてダンスをしている」という話に感銘を受けた。京都の大手下着メーカーはよく取材されているので、なぜ今取り上げるのだろうかと感じた。世界大会でナンバーワンになったということだが、何がどのように認められたかについて詳しく知りたかった。乳がんへの取り組みを主に紹介していたが、ブラジャーの作り方はさらっと触れる程度にして、農業用のブラジャーなどニッチな商品をもっと紹介すれば、新たな美が見いだされたのではないか。番組冒頭でゲストが「関西の美は地域で差別化ができている」とコメントしたが、特に解説がなかったので、どういうことか最後までわからなかった。

○　熊野古道から西成発ブランドまでいろいろな分野で活動する方を紹介していて、とてもおもしろかった。特に印象に残ったのが、生の芸術として紹介されていたやまなみ工房だ。障害のある方の突出した表現というのはよく聞くが、方法論を教えないことで、本人のもともとある力を引き出し、作り手の感動を感動として受け止められるような作品を生み出しているということがよくわかった。熊野古道の皆地笠のてっぺんに桜の皮が編まれていることを今回初めて知った。吉野では、役行者が桜の木に蔵王権現を刻んだことが伝わっているが、そうした神聖なものの一端が紀伊半島全体で民間の生活の中にまで伝わっていることを知って、感動を覚えた。ただ、番組全体として美の底力の「美」をどのように捉えているかは、最後までわからなかった。ダンサーの大前さんは、１月２１日(日)のＮＨＫスペシャル「光と影　ふたりのダンサー～紅白　舞台裏のドラマ～」を見て、ストイックな人だと思っていたが、これほど明るい人だとは知らなかった。こうしたダンスとしゃべりの両方にたけた人など、新たな出演者を発掘すると、番組も楽しくなると思う。

○　どのような美をテーマにするのかと楽しみに見始めた。和歌山の熊野古道は海外のガイドブックでも紹介していたが、欧米からの観光客が非常に多い。番組で紹介した皆地笠だが、材料のひのきの目利きができるような後継者がいない状態だ。番組の放送後には予約が殺到して手に入りにくいような状況なので、後継者が出てきてほしい。また、奈良の話題では、父親に螺鈿の技法を学び、ともに国宝などの修復に携わる漆芸家の息子さんはプレッシャーのある仕事だと話していたが、伝統をつなげていってほしいと感じた。京都の乳がんで胸を失った人のためのブラジャーの話題を見て、ブラジャーを着けることで自信を持って、もっと外に出かけてほしいと思った。大阪の西成のおばちゃんたちはもともと経験がなくてもあれほどの服作りをしていて、うれしくなった。大前さんのダンスには本当に感動した。また、ゲストの皆さんのコメントに愛を感じた。なるみさんの機転の利いたコメントはよかったし、最後の「美とは地域の共同体が大事にしてきたものだ」というコメントには納得した。全体的に元気をもらえる番組だったが、アナウンサー、記者、カメラマンなど各局のプレゼンターがばらばらだったのは何か意味があったのか。

○　地域を知り得るおもしろい番組だった。予想していたとおりの内容がある一方で、京都の下着の話題は意表をついていて、京都の力だと感じた。大津のアール・ブリュットも初めて知ることができて、全体的におもしろい番組だった。ただ、番組全体の主張がわかりづらく、この地域にはこれだけの多様な美があるということなのかと思った。この番組は近畿地方の放送だったが、ほかの地域でも放送したほうがよいと思う。ほかの地域で見てもらえたら、近畿の底力を本当に感じてもらえるのではないか。

ところで、２府４県だけを取材した番組に通称である「関西」ということばをタイトルに使うのは少し気になった。それに、プレゼンターの１人が「寺社仏閣」とコメントしていたが、四字熟語で使う場合は「神社仏閣」だと思うので、徹底してほしい。

○　いろいろな内容が盛り込まれ過ぎて、ごちゃまぜ感があった。番組の冒頭に舞妓さんが出てくる一方で、実際には現代の名工などが出てきたりと、うまくリンクできていないと感じた。ゲストのコメントでいくつかおもしろいものがあったが、「関西のパトロン文化」ということばはしっくりときた。滋賀県は商人の町でパトロン文化もあり、巨匠がいろいろな作品を残しているので、納得した。一番おもしろかったのはフィギュアの話題で、なぜデザイナーの佐藤オオキさんのデザインを採用したのか不思議に感じたが、フィギュアメーカーの社長の「すかしたデザイナーに手にとってほしかった」ということばで個人的には胸がすっとした。ただ、この番組の本筋は何だったのか、関西の美とは何かがわからなかった。大前さんのパフォーマンスはすばらしかった。スタジオでのやりとりに違和感を覚えたが、なるみさんがうまくフォローしていたように思う。

○　この番組は２回目で、今回は統一テーマが美ということで、どういうことで美なのかと思ったが、ある種の多様性なのかと感じた。そういう意味では関西の持つポテンシャルをいろいろな方面から紹介したよい番組だったと思うので、ほかの地域の視聴者に見てほしいと思った。国宝の数は東京が１番で、２位以降は２府４県が占めていることを初めて知って驚いた。この番組のタイトルには、「関西」ではなく「近畿」のほうがよいのではないかと思った。また、１回目の放送の際にも指摘したが、記者のコメントはおとなしいと感じた。

○　内容は非常に盛りだくさんでおもしろかったが、「元気印」とどう結びつくのかと思った。ただ、番組全体としては、大前さんの生きるエネルギーがほとばしるダンスはすばらしく、ゲストのコメントもおもしろくて、楽しかった。いちばんインパクトがあったのは西成発のファッションで、洋服作りの固定観念を覆すようなファッションブランドに、何でもありの大阪という印象を受けた。ものおじせず、あっけらかんと語る大阪のおばあちゃんのエネルギーはまさに、大阪の底力をあらわしていた。これ以外には「不思議の国のアリスみたい」との観光ガイドのマイケル・ローズさんの熊野古道の魅力についての話が印象的で、インバウンド向けの観光には外国人の視点や感性が欠かせないと思った。カプセル入りおもちゃが外国人観光客に人気であることに着目して、デザイナーとタイアップして作って海外に進出しようとしているフィギュアメーカーの宮脇修一社長は、まさに大阪の元気印を体現する人だと感じた。伝

統技術を継承する匠の集積が奈良にあり、奈良の文化を支えているということは非常によくわかったので、うまくＰＲしていけば奈良にもっと多くの外国人観光客を引きつけることができるのではないか。

○　皆地笠の天頂部の桜の皮の、旅人を思いやる気持ちがとてもうれしく、年月を経た作品のつやは実に美しかった。能楽でも笠は大事な小道具だが、製作できる職人はほとんど残っていない。編む技だけではなく、材料を編む形に合わせて切り裂いてゆく技術が難しいらしいし、そもそも材料が整わないので、頑張ってほしいと思う。また熊野古道の外国人の観光ガイドもよかった。熊野古道に魅せられて入ってきた方はとても大事だと思う。先日パリの日本紹介の専門誌の取材を受けたが、多くのページは外国人が美しいと感じた各地の風景や風俗の写真が掲載されており、相当不便なところでも問い合わせがあり、実際に行く人がいるそうだ。映像から静止画を切りとり、出版あるいは、ネット上でそういうサイトを作ることは制約があって厳しいのかもしれないが、ディープな日本、日本人、日本文化を知ってもらうためには、ＮＨＫならできる事があるのではと思う。今回それぞれの地域の話題はみな興味深かったが、一方で全地域共通のテーマではなく、バラバラだと少し思った。個人的には和歌山の熊野古道の話が一番好きだったが、「かんさい元気印」という番組名には京都の下着メーカーの話が一番しっくりくる話題だと思った。また、「かんさい元気印」のロゴは画面に常になくてはならないのだろうか。

○　視聴する前にタイトルだけ見たとき、「女性の美の秘訣」のような内容なのかとワクワクしたが、よい意味で裏切られた。“美”にはいろいろな美しさが存在し、どれも関西らしいものばかりだった。特に、スタジオのなるみさんの関西のおばちゃん代表のような人柄がよく、大前さんとの掛け合いもおもしろかった。前回の「食の底力スペシャル」とは違い、何かに限定されたテーマというよりも多種多様すぎるところがあるとは感じたものの、どれも日本を代表するような美の連続で元気をもらった。和歌山の記者がいい味を出していたと感じた。奈良の国宝に関しては平安時代の技術がものすごく、ことばを失うほどだった。４Ｋスーパーハイビジョンの「四季の美」は壮大な映像で、エンディングに持ってきてもいいと思った。滋賀のアール・ブリュットは、心が温かくなる作品ばかりで、すごい感性だと見ほれた。兵庫の神戸タータンは知らなかったが、おしゃれなデザインで広まってほしいと思った。見終わった後に元気になる関西ならではの番組をこれからも放送してほしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

昨年１１月の審議会での「かんさい元気印」に関するご指摘

も大いに参考にしながら、番組制作にあたった。前回から踏襲した点は２府４県の取材者が、地域がもっと元気になれるよう自分のことばでＰＲすることだ。一方で、改善点は視聴者が見やすい番組構成になるよう留意したことだ。各放送局で提案を募りいちばん元気なテーマを採択した結果、アトランダムに見えないようにするのはなかなか難しかったが、それぞれの取材テーマが生きるように構成した。また、番組が単調にならないよう、スタジオの演出では楽しさと情報性を重視した。プレゼンターのコスプレ、ゲストにブラジャーやフィギュアを手にとってもらう演出、最大の見せ場として大前さんのダンスなどを入れた。何をもって美の底力というのかという指摘についてだが、「美とはこういうものだ」と制作者側が押しつけるよりは、視聴者に関西の美の多様性を感じ取ってもらえればと考えた。また、アール・ブリュットの定義が世界と滋賀ではやや異なることも取材の段階で把握していたが、検討を重ねた結果、プレゼンターが滋賀の定義で説明したうえで、美術に造詣（ぞうけい）の深いゲストの山田五郎さんに本来の定義を解説してもらう方法をとることにした。「寺社仏閣」「関西」についての指摘は制作現場で情報共有したい。ゲストの座り方や印象に関する指摘については、制作者側でも工夫できたように思うので、留意していきたい。ゲストのなるみさんからは、プレゼンターの緊張をほぐすような突っ込みもあり、場が和んだように思う。改めてゲストの重要性を感じた。番組冒頭の舞妓の映像は関西のオーソドックスな美として見せたうえで、番組ではそれだけではない多様な美を紹介するねらいがあった。

＜放送番組一般について＞

○　６月８日(金)のかんさい熱視線「鳴門の渦潮　世界遺産への道」を見て、世界遺産登録は地元の人たちのはっきりとした目標だとわかった。鳴門の渦潮は非常に特異的な自然現象であり、ワカメなど海の恵みをもたらし続けていて、地元の人にとって古代より畏れ敬い、誇りとすべきものだったと思われる。世界的に見て、鳴門の渦潮が顕著な普遍的価値を有しているかはわからないが、普遍的価値を見出すためにさまざまな学術的な調査を実施していることはいいことだと思う。紀伊水道からの潮せき波の流れ、鳴門海峡の地形など知らないことばかりで、水中の渦潮の撮影はすごかった。

渦潮の巨大化は番組で言われていた渦潮の合体によって起こっているものだろうか、確認したい。

○　コンパクトな番組だったが、今後鳴門の渦潮が世界遺産登録を目指すうえでよい番組だったと思う。鳴門の渦潮をめぐる自然科学の知見や、歴史的文献からは当時の人たちのさまざまな考え方がわかった。また、現在も地元では渦潮を大事にしており、それを啓もうするような人たちもいて、学校で出前授業をしている。渦が２つ合体して、大きな渦潮ができるという映像は、もう少しスローでゆっくり見せてもらったら、わかりやすかったと思う。

○　印象深かったのは、世界遺産登録を目指す団体の事務局長を務める「渦まくぞう」さんの出前授業の様子で、こうした地元の人の動きは世界遺産登録を目指すうえで大切だと感じた。学術的なことや世界遺産登録への道などのわかりやすい解説や、２つの渦が合体して渦潮になる映像もすごくよかったと思うが、地元の人の動きと両方がないと世界遺産の登録はすごく難しいと感じているので、とてもよかったと思う。身近に感じたのは鳴門のワカメで、有名でおいしいが、鳴門の渦との関連性や歴史とも絡めて紹介されていてすごくよかった。きちんと網羅されて紹介されていたのはよかったが、番組を見た人も応援したくなるような熱が伝わってくるとさらによかった。

○　先月の審議会の視聴番組だった、４月２７日(金)のえぇトコ「春になると福来る！～徳島　鳴門・佐那河内～」を見て、友達と一緒に鳴門に旅行に行こうと話をしているが、「かんさい熱視線」では、ＣＧやアニメーションで渦潮ができるシステムを本当にわかりやすく解説していたので、一緒に旅行に行く友人にも話してみようと思う。渦が連鎖することを「渦連」ということを初めて知り、おもしろかったし、鳴門にいったらぜひ天然のワカメ汁を飲みたいと思った。

○　結論としてよい番組だった。ただ、世界遺産検定３級だが、鳴門に行ったことのない磯山さやかさんがゲストだったことが気になった。小学校の出前授業で歌っていた歌がもう少しよい歌だとよかった。収集した資料の中で渦潮の記録があるという奈良時代の木簡だが、実物なのかどうかが気になった。潮せき波など難しいことばが使われていたが、鳴門の渦潮ができるメカニズムはわかりやすかった。３０分の番組だが、最初に鳴門の渦潮の特色、次にメカニズム、国内外の渦潮と比べたらどうかという解説があって、最後に、世界遺産にしようと盛り上がっている地元の紹介という構成も非常に説得力があった。

○　前回の「えぇトコ」に続いての鳴門の番組だった。本当に知らないことばかりだったが、渦連やそのメカニズムが非常にわかりやすく説明されていて、本当に勉強になった。歴史的にも、渦潮は怖い対象だったが、江戸時代の浮世絵ではきれいなものとして表現されていたことを知った。出前授業での歌はいまひとつだと思ったが、地元の子どもたちに地元学というか、渦潮の仕組みも教えることは、とてもよいことだと思う。渦潮は見てきれいだが、その価値をどのように認めてもらうかは非常に難しいと思うので、頑張ってもらいたい。

○　コンパクトにまとまっていて、とてもわかりやすい番組だった。広島工業大学の上嶋英機客員教授のコメントからは鳴門の渦潮への強い愛が感じられて、こうした人が学術的調査の先頭に立っていることはいいことだと感じた。出前授業をしていた「渦まくぞう」さんの強烈な郷土愛を子どもたちに見せることは将来どこかで芽を出すのはないか。また、全国で同じような活動をする人へのエールになるのではないかと感じた。番組では、渦潮が生まれるメカニズムをわかりやすく説明していて、自然面と文化面の両方で勉強できた。渦潮のことを知り、さらに迫力ある映像を見たら、視聴者ももっと盛り上がってくるように思う。科学離れといわれる昨今、おもしろい研究をしている方はたくさんいるので、研究室を訪問して紹介するミニ番組があったらよいと思う。

○　前回の視聴番組の「えぇトコ」に続き、ワカメが登場したが、渦潮ができるメカニズムの話や、２つの渦が合体する映像は大変おもしろかった。先週仕事で淡路島へ行く機会があったが、鳴門の番組を続けて見たこともあり、少し足を伸ばして、鳴門の渦潮を見て、お土産も買った。こういう人もいるので経済効果は非常にはっきり出てくると思う。

○　兵庫県と徳島県が、鳴門の渦潮の世界遺産登録に取り組んでいることを始めて知った。この番組で鳴門の渦潮の発生メカニズムが非常によくわかったが、世界でも珍しい自然現象で、文化的価値があることを証明していくことはハードルが高いと思う。大阪府も平成２７年から百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録に取り組んでいて、ユネスコ世界遺産センターへ提出する推薦書作成のための学術的な調査研究と、国内外への情報発信、さらには、大阪メトロの中吊り広告などによる地元の機運醸成に取り組んでいる。世界遺産登録への道のりは長く険しいと思うが、百舌鳥・古市古墳群と鳴門の渦潮がともに世界遺産になれば、関西へのインバウンド観光客はさらに増加すると期待している。

○　今回は大変よかったと思う。世界初かもしれない巨大渦発生のメカニズムを収めた水中撮影で、２つの渦が合わさり大きくなって行くところを見て思わずため息が出た。番組のサブタイトルでこの水中撮影の成功を伝えていれば、更に見たい人が増えたのではないか。またドローンからの渦連を撮った映像も美しくてもっと見たいと思ったが、関西空港も近いこの空域では規制が厳しかったのだろうか。更に地形モデルがとてもよくできていて、理解の遅い私でも淡路島を真ん中に反時計回りの潮せき流が海底地形の影響を受けながら、最終的に鳴門の渦潮、渦連を作っていくのが今回よくわかった。また下手なグルメ番組より食欲を刺激され、ワカメを食べたくなった。

○　渦潮のメカニズムをとても分かりやすく伝えていたので、近くから生で渦潮を見たいと思った。いくつもの自然の奇跡で起こる渦連、下から湧き上がってくる「渦の花」など、初めて知る内容の連続だった。最後は定番のワカメで終わり、前回の視聴番組と少し重なった。鳴門海峡は兵庫と徳島の間の海峡だが、徳島のものというイメージが私にはあった。しかし、淡路でも世界遺産登録に向けていろいろな取り組みがされており、鳴門の渦潮は「鳴門＝徳島」ではないのかと違和感があった。すごく迫力のある映像で見ていて楽しかった。

（ＮＨＫ側）

この番組は徳島放送局との共同制作で、兵庫県と徳島県の県域放送を目的に制作したが、最終的にはそれぞれでブロック放送という形になった。近畿ブロックと四国ブロックの視聴者の皆さんに見ていただくことができ、意義ある新しい取り組みだったと思う。非常に説得力があるというご意見もいただいたが、３０分の番組を、神戸放送局と徳島放送局できちんと担当を分け、それぞれ深く取材ができたことが、その説得性に結びついているのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は地元の方々のさまざまな協力があって、成立した番組だと思う。特に、渦潮の水中撮影の際、船を操縦していたのは渦潮のことを知り尽くしている地元の漁師の方で、最終的な渦の合体の瞬間を撮ることができた。その方を紹介してくれたのは、番組にも出演している「渦まくぞう」さんで、キーパーソンとなっていろいろな方を紹介していただいた。世界遺産を目指したいという熱い思いが、我々の制作意欲を非常にかき立てて、本当にいい相

乗効果だったと思う。巨大化の理由は合体で間違いないかという質問については、専門家に確認がとれている。ゲストの選定については、世界遺産検定を持っていて、なおかつ知名度がある方を探した結果、最終的に磯山さやかさんにお願いしたが、非常によかったと思う。地元の歌でもっといい歌はなかったのかということだが、取材する中で、いちばんボランティアの方々の間で歌われていたのが今回紹介したコマを使った歌だ。木簡については、奈良文化財研究所が実物を撮影した画像を使った。地元の方々の動きなどはこれからＮＨＫとしても引き続き注目していきたいと思う。

○　６月１８日(月)7時５８分に大阪府下で最大震度６弱の地震が発生した。地震発生後のＮＨＫのさまざまな情報提供に感謝したい。ただ、一点だけ苦言を呈すると、１８日夜から１９日朝にかけて、通常診察ができる病院の名前が繰り返し出ていたが、通常診察可能な中核以上の病院は報道されていたよりももっと多かったはずだ。災害時に通常診療の可能な病院をかなり限定的にしかも繰り返し報道されると、他の病院は通常診療ができないのではとのイメージを市民に与え、かえって不安をあおることにはならないだろうか。大変なことではあるが、しっかりとした取材に基づいた情報を、随時更新しながら流してほしい。

○　民放の番組で、地震の影響で美術館のロビーのシャンデリアが落ちたことを紹介していた。実際に調べてみると、シャンデリアのしんちゅうの装飾板が数枚落ちたことを大げさに伝えていたことがわかった。しっかりとした取材に基づいて報道しているかは、メディアによって差があると感じた。

○　今回の地震関連の報道に関して、ネットを利用しての報道の必要性を痛感した。この際、利便性の高いＮＨＫ災害情報アプリも作って、外国人の利用も視野に入れて、駅などに利用のしおりのような印刷物も置くようなことを考えてみてはどうか。大災害の起こった時にいかに正確に最新の情報を届けられるか、誤報を流さないか、やはりＮＨＫは間違いが無いと頼れる形を作れば、視聴者の一層の信頼を得られるのではないか。

（ＮＨＫ側）

震災報道についていただいた指摘、意見を参考にして、今後に生かしていきたい。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」を毎日見ているが、ＳＮＳで話題になりそうなものを盛り込んでいる。６月１５日(金)の回では、昔のトレンディドラマの有名な場面を再現しており、ＢＧＭでは「くるくるまわる、回転木馬」という歌詞の音楽がかかっていたが、少しやりすぎではないかと感じた。

○　６月１９日(火)の２０１８ＦＩＦＡワールドカップ　１次リーグ・H組「日本×コロンビア」(総合 後 8:45～11:30)を京都局のパブリック・ビューイングで見たが、大画面で試合を応援できて本当によかった。高齢者の方や親子連れや仕事帰りに１人で見ている女性など、さまざまな人たちが見に来ていて、スポーツ・バーに行かないような人たちが安心して見られる場だと感じた。また、ＮＨＫのアプリもとても評判になっているようだ。

○　６月１日(金)のえぇトコ「奇跡の“パワースポット”　極上伊勢参り～三重・伊勢～」を見た。番組で紹介された名物のお餅を食べたいと思ったが、これまで伊勢神宮周辺についてはあまり知らなかったので、行きたいと思った。４月２７日(金)の回で、「幸せ」や「福」の文字を出し過ぎだとコメントしたが、今回、出てきた文字は神様に対するものでとても美しく、気持ちよく聞くことができた。

○　「半分、青い。」はＳＮＳを見ながら楽しんでいる。脚本家の北川悦吏子さんは一日に１０回ぐらいＳＮＳでつぶやいており、それも楽しみになっている。北川さんのドラマをいろいろ見てきて、私たちもいろいろな経験をしているのと同様に、連続テレビ小説も進化してきているのかと感じる。

○　１０月から始まる連続テレビ小説「まんぷく」は本当に楽しみだ。男前の俳優が多く出演していて、ヒロインを演じる安藤サクラさんがどのような演技で魅了させてくれるのか、今からわくわくしている。

○　「半分、青い。」はとっつきにくい印象だったが、ＳＮＳをきっかけに、最近少しずつ見始めている。次の「まんぷく」に出演する方たちはすごいので楽しみにしている。

○　この１か月、「かんさい元気印」も含めて、近畿をとりあげたおもしろい番組がたくさんあった。６月１日(金)のかんさい熱視線「芸人のオカンを訪ねて」では芸人と母親の絆、ドキュメント７２時間「大阪・西成　２４時間夫婦食堂」では夫婦の絆やその夫婦と地域との絆を描いていて、非常に見応えがあった。

○　６月２日(土)のＮＨＫスペシャル「ミッシングワーカー　働くことをあきらめて･･･」は、今話題になっている４０代・５０代の働き盛りが長期間にわたって失業するミッシングワーカーを特集した番組だった。自身の健康状態や親の介護などが原因で職に就くのが難しくなるケースもあり、親の年金などに依存して生活する独身中高年が増えているという実態が紹介されていた。こうした人は、失業者にもカウントされないのでミッシングワーカーと呼ばれるということであまり目立たないということだが、非常に重要な課題を提供したよい番組だったと思う。

○　５月２１日(月)のまちけん参上！～あなたの街のおもしろ検定～「大阪市・日本橋」はおもしろいだけでなく、勉強になった。日本橋４丁目の堺筋から西に入ったエリアが、なぜ「五階」と呼ばれていたのか知らなかった。明治２１年から３７年まで５階建ての眺望閣があり、周辺に店が集まってにぎわっていたことから、建物が取り壊された後も「五階」と言われ、今も３階建てなのに「五階」と呼ばれる百貨店があることは、大阪らしくおもしろいと思った。また昭和レトロな路地裏商店街からオタクショップが並ぶオタロードなどディープな大阪も紹介されていて、参考になった。

５月２８日(月)の「大阪市・森ノ宮駅界わい」の回も大阪城を扱っていて、大変参考になった。大阪城の東外堀にラグビー場があったことは覚えているが、埋め立ての経緯は詳しく知らなかった。番組で大阪城天守閣が写る、大阪砲兵工しょうの写真と、砲兵工しょうのいろいろな建物の図面を見て、埋め立ての理由や経緯がよくわかった。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

平成３０年５月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず､｢平成２９年度近畿地方向け放送番組の種別ごとの放送時間｣について、報告があった。続いて、事前に視聴してもらった、えぇトコ「春になると福来る！～徳島　鳴門・佐那河内～」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	西田　賢治	(大阪商工会議所　元常務理事)
副委員長	山﨑　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委　員	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	篠　雅廣	(大阪市立美術館　館長)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	原　さだ	(財団法人龍神村開発公社　専務理事)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜えぇトコ「春になると福来る！～徳島　鳴門・佐那河内～」
（総合　４月２７日(金) 後 8:03～8:42 放送）について＞

○　全体的にとても春らしさを感じる旅番組だった。その土地でしか味わえない食材や郷土料理、地元の人たちの心温まる話など、いろいろな要素がバランスよく入っていて、とてもよい番組だった。テロップのデザインはカラフルで、春の野山に咲く花々のように感じられた。ただ、メインタイトルが出るまでに１分２０秒、オープニングが３分あったので、オープニングが少し長く感じられた。オープニングの最後でサブタイトルを出した際、画面の四隅に筋斗雲のようなものが表示されていたが、もっと

広がりがあったほうがよいと感じた。場所の名前を紹介するときに、表示された地図で画面が見づらくなったので、もう少し軽いトーンでもよかったのではないか。見出しを見ていたら、いりめしとそば米汁のテロップだけ、料理名ではなく素材名を出すときのデザインとなっていたようだったので気になった。番組全体としては、旅人の２人の撮影のしかたも自然体で、行ってみたいと思わせる番組だった。

○　冬に大鳴門橋に行ったときには大きな渦潮は見られなかったので、今度は春に行ってみたいと感じた。番組で紹介された大鳴門橋と海の織り成す景色はすばらしかった。いちご作りをする一家のエピソードには心を打たれたが、１粒 5,000 円の値がついたこともあるいちごには問い合わせが殺到したのではないかと思う。旅人の枝元萌さんが土にまみれる姿や地元の方々への受け答えは人間味にあふれていて、「わろてんか」のときよりもさらにファンになった。大麻比古神社の大楠のご神木を初めて知り、訪れてみたいと思った。自慢の自然の恵みを惜しみなく振る舞う地元の方々の表情が本当に笑顔にあふれていたが、このように地元に誇りを持ち、自信を持っている人はだいたい中高年の人だと感じる。「それを見ているこちらまで幸せになれるような」というナレーションもあったが、最後に、もう一人の旅人の渡辺正行さんの「徳島は人がいい」というコメントで締めくくられていて心が和んだ。

○　放送時間が夜８時台なので、ほかのことをしながら見たが、わかりやすい番組だった。最初からもう一度見たときに、「わろてんか」に出演していた枝元さんがキャスティングされていたので、懐かしくなった。鳴門にはよく行くが、わかめを初めておいしいと感じたのが鳴門のわかめだった。ただわかめを食べると地味に見えるが、豪快にかぶりつく様子は見ていて気持ちがよかった。また、れんこんをきれいに収穫できるようになるまでは３年かかるなど、漁師や農家の方々の努力も伝わってくるような番組だった。出演する漁業や農業に携わる多くの方々からは自然と方言や人柄が出ていて、いいところだと感じられて、行きたくなるような番組だった。食べ物や大谷焼などの紹介だけではなく、人の温かさが詰まった番組で、とても見やすかった。おもてなしの文化が本当に減ってきているので、そういった徳島の人柄がとても印象的でよかったと思う。

○　関西の紀行番組だと思っていたので、徳島を紹介することに違和感はあった。関西から比較的近いので、大鳴門橋に行ったときのことを思い出しながら、見ていた。おいしそうなものがいっぱい出てきたので、番組を見ながらお腹が減った。番組の初めのほうでうず華鯛が出てきたが、「うず華鯛と呼べるのは１０匹のうち １ 匹」ということでどの程度貴重なのだろうかと思い、その基準を知りたくなった。渡辺さんが

めかぶにかぶりつく場面で引き込まれたが、このあとは食の話だけでなく、大谷焼など知的好奇心をくすぐる内容もあったのでよかったと思う。その大谷焼の寝ろくろにはとても驚いたが、信楽焼に似ていると思いながら見続けていたら、登り窯も出てきたので、大谷焼と信楽焼との関連性を調べたところ、信楽焼の職人が技法を伝えたという記述も出てきたので納得した。最初に見たときに「幸せ」や「福」などのテロップが出てきてすり込まれるように感じたが、もう一回見直したときに少し出し過ぎだと思った。総合的にはその土地に暮らす人たちの笑顔や話を見ていて気持ちのいい番組だったと思う。

○　「この土地が好きだ」ということを土地の人のことばで語っているところにとても好感が持てた。旅番組なので、自分で行くとしたらどういうルートで行くかと思ったが、あとで地図を確認すると紹介されたスポットの間が非常に遠かった。どのように移動したのかという情報もあれば、どこに行くかを選択しながら行くことができるかもしれないと感じた。全体的に春めいた温かい雰囲気の番組だった。

○　今回は関西を飛び出して、徳島まで遠征していた。徳島県のことばのイントネーションはほぼ関西弁で、徳島県の方々は四国の一部ではなく近畿地方だと思っている人が多いという印象だ。職場の徳島県出身者に、徳島県のおいしいものを聞いてみたらみんな魚と答えた。その意味ではうず華鯛が不漁で、魚料理については少し盛り上がりに欠けて残念だった。ほかには鳴門市のわかめやれんこんが紹介されていたが、鳴門海峡の潮の流れや吉野川の水と肥沃な土が生み出した恵みは関西地方にも出荷され、関西の人は子どものころからお世話になってきたのだろうと思う。佐那河内村のブランドいちごを使ったいちご大福はすごくおいしいだろうと思った。それから菜の花畑もよかった。菜の花を添えたいりめしやそば米汁は実においしそうだった。番組全体を通じて地元の方々が優しくて温かく、特に女性たちがよく話しよく笑い、明るく元気でたくましい姿を見て、温かい気分になれた。来月、四国の８８か所霊場巡礼の地を訪れる予定なので、この番組を見られて幸せだった。

○　地元の人たちのごく自然な明るさを、渡辺さんと枝元さんのコンビが実にうまく引き出していたと思う。「春になると福来る！」という番組名を見て、紀淡海峡の春のふぐが出てくるのだろうかと期待してしまった。「平家物語」などから徳島には暗いイメージを持っていたので、逆に桜と空のコントラストが美しい映像や、渦潮が近くから撮影された映像を見ていて、もう少し見ていたいと思った。菜の花畑も本当にきれいだったが、夜の８時台の放送なので、菜の花の漬物を思い出してお腹がどんどんへってきた。こうしたことすべてが、徳島の福を感じることにつながっていると思った。

コントラストがきれいな映像を見たので、さらに欲を言うと、藍染め用のかめとして大谷焼の紹介をしていたところで、藍染の美しい作品も見せてほしかったし、大かめを桶として使われている実際のシーンも見たかった。全体に盛りだくさんだったが、オープニングのシーンを見ながら、土地のことや風景もよくわかり、ロケの大変さも少し感じながら、楽しんで見ることができた。

○　本当に気持ちよく番組を見ることができた。鳴門の海や吉野川など、ダイナミックな自然が最初に次々とでてきて、ワクワクしながら見始めた。船上からの波すれすれの映像がダイナミックで、臨場感もあり、とてもよかった。朝日の美しさやわかめやめかぶなどのみずみずしい緑を見ていると、大画面のテレビで４Ｋの映像で見たいと思った。うず華鯛という名前を初めて知ったが、すごく稀少と言われるブランド鯛ということなので、基準をもう少し聞きたかった。めかぶやいちごももちろん食べたいと思ったが、旅人の２人の食べ物のコメントがもの足りなかった。すてきな映像から想像するのも楽しいと思ったが、「ジューシー」「おいしい」だけでなく、見ている人が想像できるようなコメントがあればよかったと思う。最後は、徳島の人のおおらかな人のよさで締めくくっていたが、日々のニュースでもあまりいい話を日本で全然聞かないので、日本もえぇトコがまだまだあると思ってすごく気分良く見終わることができた。

○　大変いい番組で春を感じることができる番組だった。わかめと鯛は現地で食べたことがあり、絶品だった。番組を見て、訪れてみようと思った人がずいぶんと増えたと思うので、経済効果という点で大きな貢献があったのではないか。女性たちが和気あいあいと楽しそうだった佐那河内村について調べてみると、2014 年に日本創成会議が発表した消滅可能性都市では、佐那河内村の消滅可能性は 71.6％という大変高い数値になっていた。このような日本の原風景や生活を残していくためにどうしたらいいか。ＮＨＫでもそういう視点で考えていただけたらと思う。

○　春の鳴門の渦潮の映像は大変迫力があったが、海や川、山の幸を授かって暮らす人たちの様子が生き生きと伝わってきたのが何よりもよかった。佐那河内の人たちが「ここは 1 番ええとこや」と口をそろえて話していたが、もっともだと思う。れんこん堀りや菜の花を摘む女性たちの福々しい笑顔や和気あいあいとした様子から、人々の生きる喜びが伝わってきたように感じた。渡辺さんと枝元さんはすっかり地元に溶け込みすてきな笑顔に囲まれて郷土料理を堪能していたが、２人とも福のおすそ分けにあずかってとても幸せそうで、番組にぴったりの出演者だったと思う。樹齢 1,000 年の大楠がある大麻比古神社や寝ろくろを使って藍染用の大かめを作る大谷

焼の工房の紹介もあって、春の徳島のえぇトコを紹介したよい番組だったと思う。

○　いのちみなぎる春の季節に、鳴門という土地で春の恵みを実感させる番組だった。鳴門海峡がもたらすうず華鯛としゃぶしゃぶにもできるわかめという動植物に象徴される海の華。れんこんや藍を育てる吉野川が運んだ肥沃な土地がはぐくむ川の恩恵。そして、大粒のいちごや菜の花の豊かな佐那河内に代表される山里の福と鳴門の春の豊かさを満喫した。「豊かな大自然で幸福が生まれる」ということばに説得力があった。さて、大谷焼の原料の土も吉野川の恩恵だろうか。さらに気になったのは、大麻比古神社の「クスノキ」に「楠」という字が使われていた点だ。現地での表記に従ったものだろうが、厳密にいうと楠は「クス」、「クスノキ」は樟で、本来は別の種類の木のはずだ。今では混用されてしまっているが、少し気になった。

（ＮＨＫ側）

「えぇトコ」は、平成２７年度までは金曜８時に放送していた。その後２年間は土曜の朝１０時に移設していたが、もう一度戻し、金曜日の夜間に編成した。また、今年からは、関西の２府４県のエリア外にロケ地を取り込み、取材した現地局に映像も提供する試みをしている。こうしたことがどのように受け取られるかという観点から見ていただくことにした。

（ＮＨＫ側）

「えぇトコ」を金曜夜８時台に戻したということと、あとは近畿の方々が隣接した地域の旅も、楽しんでいただけるようにということで、ご覧いただいたが、楽しんでいただけたようでとてもよかった。

（ＮＨＫ側）

この回が近畿以外を紹介する初めての回だった。関西では地元ネタが強いという先入観もあり、果たしてそのエリアから出たものがどう受け入れられるのかと心配していたが、貴重な意見に励まされた。地図のスーパーは事実に基づいて細かく書くのではなく、旅のガイドとなるようにもう少し見やすい形にすることや、移動を分かりやすくすることなど、今後の参考にしたい。このロケに同行したが、地元の方々が非常に自然で明るくて、こういうところで暮らしたいと思うような、その土地の力に毎回驚く。ロ

ケをする度に元気になると感じていて、それを番組にも映し出していきたいと考えている。うず華鯛の定義についてだが、「大きさ」も一つの基準となっているようだ。

＜放送番組一般について＞

○　４月４日(水)の「発見　蘇我入鹿の棺　よみがえる“大化改新”」を見て、聖徳太子が活躍した時代の前後が漠然と飛鳥時代と思っていたが、飛鳥時代とは蘇我氏が演出し、都を自分の本拠地に置かせていた時代だったことを初めて知った。日本書紀は蘇我氏を滅ぼした側が作ったものだが、蘇我氏は渡来人を束ねていて仏教を招来し、その後の日本の礎となる多くの事業を行っていたことは間違いないと思う。蘇我入鹿の暗殺場所については疑問を持たずに屋内だったと思っていた。石舞台古墳はかなり前から蘇我馬子の墓であると言われていて、その付近に蘇我蝦夷と入鹿の棺が入鹿の墓に一緒に埋葬されているという説は、近年の調査によって浮かび上がってきた新説であり、興味深かった。当時起こった事件とも矛盾しないと思った。番組では、「大化改新」は 645 年と紹介されていたが、私が中学や高校時代に習った日本史では 645 年の蘇我入鹿の暗殺と蝦夷の自殺による蘇我氏本家滅亡の事件を「乙巳の変」と言い、翌年の 646 年の正月に改新の詔が発せられて、「大化改新」が始まったと習った。最近の解釈を改めて教えてほしい。

○　蘇我氏が影の天皇であったことは知っていた。聖徳太子の墓がある叡福寺の隣に蘇我氏を奉っている蘇我寺があって、聖徳太子との因縁が深いということがわかる。当時の人の服装については、天寿国曼荼羅繍帳といった絵画的資料からきちんと再現しており、歴史的な研究をふまえたうえで番組制作していることがよくわかった。時代考証をしながら歴史番組を作るという姿勢はよかったと思う。

○　興味深い番組だった。以前から感じていたが、背景のＣＧに流れる細かい模様の色と、井上あさひさんの着物の風合いがあわないと思う。ＣＧの模様の大きさや流れる方向を少し工夫すれば、井上さんの顔と着物も生きるのではないか。2017 年１０月１３日（金）の歴史秘話ヒストリア「聖徳太子の棺　伝説のその先へ」と関連づけたら、もう少しスムーズに見られるのではないか。聖徳太子が亡くなり蘇我一族に権力が移っていくこと、そして討たれるまでのことは、過去の番組を引用しながら、歴史的な流れが見えるとわかりやすいと思う。石棺が移されたという仮説があったが、手前の蝦夷の家型石棺の蓋が割れていたのは移動によるものなのだろうか。また、どちらの石棺の保存状態がよかったのかも映像では少し見にくかったので、知りたかった。

また、各邸宅のあったイメージを地域の写真の上に載せた映像は、全体像がわかりやすいと思ったが、もう少しゆっくりと見たかった。全体的にいろいろな意味で満足した。

○　非常におもしろかった。蘇我入鹿の暗殺、蝦夷の自殺まではわかりやすかったが、そのあとは時系列で話が展開したほうが理解しやすかったと思う。土地勘もあまりないので、たくさんの寺や遺跡、蘇我氏の人たちがいろいろと出てきて、それらを結びつけていくのが難しかった。ふだんニュースで新しい発見が単発で報道されるが、自分の頭の中で整理して考えることはなかったので、この番組を見て全部つながった。最近、子どものころに習った歴史がいろいろと変わってきているという話を友人としていたので、歴史の新しい発見についてはこの番組でもっと紹介してほしいと思う。

○　番組を放送しているときに偶然見たが、中大兄皇子が暗殺する再現映像の場面では、歴史にこんな記述が残っていたのかと家族で話が弾み、興味をかきたてられた。この番組の中で、昔習ったうろ覚えのことがどんどん出てきた。去年飛鳥を旅行して「蘇我入鹿の首塚」などロケ地と同じような場所をめぐったが、改めて飛鳥を訪ねたいと思った。

○　中学校受験レベルでしか「大化改新」の知識はなかったので、歴史的な建物や名前が出てくると頭が混乱したが、大学教授や考古学の研究者などさまざまな専門家の方の説明があったので、見終わったらふに落ちた。飛鳥には一度も行ったことはないが、かなりの月日が流れた今でも、発見されることがあるということが印象的だった。一番印象的だったのは菖蒲池古墳の石の棺が映像で見られたことだ。多分めったに見られないことなので興味が湧き、飛鳥という土地自体にも興味がわいた。

○　歴史に疎い私でも見ごたえがあっておもしろいと感じる内容だった。暗殺の場面で配置図が示されていて、あんなに簡単に暗殺できたのかと少し疑問に残った。専門家の本当に地道で丁寧な発掘作業の様子が紹介されていたが、このような方々の苦労により歴史がひもとかれていくのかと感心させられた。調査の手が入っていないものが今後どのように解明されていくのか楽しみだと思える番組だった。

○　奈良の古代史のもので、ここ何年かの考古学的な成果や考察がとてもわかりやすくまとめられていておもしろかった。いちばんよかったのは、遺跡の位置関係を実際の写真にあてて示していたことだ。もう少しゆっくり見せてくれたらよかったが、実際に飛鳥に行っても、このように大局的に全体を見渡すことはなかなかできないので、

政変の舞台と蘇我氏のゆかりの地の関係などを鳥観図で示してくれたことはとても理解を助けていたと思う。ドラマの進行にあわせて日本書紀の記述を紹介していたが、歴史書を読むおもしろさを疑似体験させてくれて、非常に新鮮だった。こんなに細かいことまで書かれていることは初めて知った。日本書紀によると乙巳の変は大極殿で行われたという紹介があり、その後に平城京跡の大極殿のＣＧが流れたが、この場面でそのＣＧが入ることに違和感があった。再現映像で入鹿の遺体がついじ塀の前に置かれていたが、板蓋宮についじ塀があったことに少し疑問に思ったので、飛鳥の教育委員会に問い合わせたところ、少しだがついじ塀もあるということで、新しい発見があった。また、菖蒲池古墳の石棺の中が赤と黒の漆で塗られていたとあったが、その色の違いはなぜなのかと興味を覚えた。最初は槻の木の広場の話から始まり、最後にまたそこに戻ってきて槻の木と首塚の関係にも少し触れていて、歴史のダイナミズムなどを感じて鳥肌が立つような楽しさがあった。

○　大変おもしろい謎解きで最後まで集中して見ることができた。学生時代に日本史の先生に触発されて、邪馬台国の本などをいろいろと読みあさった記憶がよみがえってきて、大変懐かしくなった。１０年にわたって発掘している専門家を紹介していたが、本当に時間をかけて発掘作業をしていることに頭が下がる思いがした。歴史の授業は退屈なことも多いが、こういう工夫があるともっと歴史に興味を持つ人が増えるのではないのか。大変いい番組だったと思う。

○　映像で再現していて、大変わかりやすく、歴史番組の関心を高めるいい企画だった。タイトルの付け方もなかなかよかったと思う。昔の教科書で屋内で暗殺された入鹿の首が飛ぶ絵を非常に印象深く覚えていたが、今回ＣＧで再現した映像を見て、屋外説のほうが正しそうだと感じた。これまで天皇をしのぐほどの勢力を持っていた蘇我氏がなぜ一瞬にして滅びたのかということに疑問を持っていたが、今回その背景に渡来人の存在があったという説明を聞いて、謎が解けたように感じた。菖蒲池古墳から見つかった棺の中に内視鏡を入れたということだが、人物を特定するような証拠が、見つからなかったのかどうか大変知りたいと思う。

○　新しい調査や発見をもとに、乙巳の変の立体的な実像を、新しい学説を取り入れて描いた興味深い番組だった。破壊され埋没させられた巨大な方墳・小山田古墳を蘇我蝦夷の墓と考え、並び立つはずだった菖蒲池古墳を入鹿の墓とし、ともに飛鳥の西口の遺跡とする点。大量の鉄クズやオンドルらしい遺構で示された渡来人の拠点。馬子の墓とされる石舞台古墳の南の稲目の墓の可能性の高い都塚古墳など、近年の発掘の成果が盛り込まれ、具体的な形で蘇我氏と飛鳥のかかわりを伝えていた。ヤツラの舞

いの解説もわかりやすかった。図像の使い方で２点、気になった。山背大兄王の説明に使われた伝聖徳太子像には中央の像が大兄王ではないかという説が出されるほど、近年疑問が出されているし、入鹿殺害の場面については、たまたま使用された歴史教科書が多武峰絵巻を載せていただけで、一般的に必ずしもあの絵巻であの場面が理解されているわけではないと思う。また、大胆な新説が取り上げられている一方で、旧来の考え方から離れていない点なども気になった。特に大化改新ということばと乙巳の変との関係には注意が必要だ。いずれにしても、蘇我氏と大王との関係はまだ判然としないと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＣＧと着物の柄のバランスや番組構成などの指摘は、今後の番組制作に生かしていきたい。ＮＨＫの歴史番組は非常に古くから制作しているが、「歴史秘話ヒストリア」は大阪放送局が中心となって 2009 年から水曜夜間の番組としてスタートした。2016 年に金曜の夜８時台に移ったが、今年度から水曜の夜１０時台に戻り、第 1 回目がこの番組だった。この番組は２０年以上考古学の最先端を追っているディレクターが制作したもので、昨年の聖徳太子を扱った番組も彼が制作している。

（ＮＨＫ側）

乙巳の変と改新の詔の関係についてだが、戦後直後の歴史学界では、乙巳の変と改新の詔はそれほど高い評価をされておらず、改新の詔は、奈良時代以降に作られたものではないかという説が有力だった。つまり乙巳の変と改新の詔というのは比較的分かれた状態で理解をされていた。その後、改新政府が遷都した難波長柄豊碕宮の発掘の成果などから、乙巳の変を行った人たちが改新の詔をなし遂げたのではないかと合わせて理解されるようになった。以降、教科書でも乙巳の変から改新の詔まで含めた 645 年をスタートとする２年間を大化改新というふうに合わせて呼ぶようになってきている。そのため、この番組も 645 年に関して大化改新と表現した。また、棺についてもいくつか質問があったが、ほとんどわかっていないというのが事実だ。番組にはいろいろなことがつまっていて、もう少し基本的な部分からゆっくり説明できたほうがよかったかもしれない。今後の番組制作では留意していきたい。

○　５月８日(火)の「ニュース６３０　京いちにち」に、釜師の１６代大西清右衛門さんが出演し、展覧会の話や特色のある釜の話をしていた。本人が出演していると、説得力があって、ほかの釜も見てみたいと感じた。

○　「バリバラ」では、最近よくＬＧＢＴをテーマにとりあげている。とても深い内容でコメントするのにも力がいるような番組だが、考える機会を与えてもらっていると感じる。世の中では多様性やダイバーシティーということばが多用されているが、この問題を考えたり実践したりしている人がどの程度いるのだろうかと友人とも話している。

○　４月２０日(金)の「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＬＩＮＥ」で、国際放送のキャラバンの滋賀特集をアプリで見た。インタビューに答えていた人はほとんど知っており、この人はこんなに英語を話せるのかとローカルな目線で見てしまったが、紹介のされ方もおもしろかった。ただ、一部のリポートの英語がたどたどしく小声で聴き取りにくかった。もっと英語が聞き取りやすかったら、世界にもっとＰＲできたと思う。

（ＮＨＫ側）

同じ週に和歌山、奈良、大津でキャラバンを行ったが、リポートによって、英語の能力に多少ばらつきがあった。国際放送でも時々、英語が一定のレベルに達しない場合、英語が堪能な人が別にコメントをつけるケースもある。

○　連続テレビ小説「半分、青い」の主人公が同じ世代なので、見ていてとても楽しい。５月１４日（月）の回で「セクハラ」ということばが出てきたが、ほかにも当時には使われていなかったのではないかと思うことばがあり、気になった。

○　「半分、青い」は時代物でなく、現代を扱っていて、まもなく自分が生まれた年代に入るので、楽しみにしている。

○　５月１４日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ラスト・ミッション　本田圭佑のすべて」を見た。この番組でいちばん好きな場面は最後の「プロフェッショナルとは」というところで、「ケイスケ　ホンダ」という回答は本田選手らしかったが、後味の悪さもあった。この番組では胸に刺さることばがいつもあるが、「ハリルのやるサッカーにすべてを服従して選ばれていくことのほうが僕は恥ずかしい」というこ

とばしか頭に残らなかった。日本代表のハリル監督の退任のタイミングだったのは偶然だったと思うが、個人競技ではなくチーム競技で、監督の指示するプレーをするのではなく自分の意志を貫いたほうが正解だという姿勢はすごいと思うが、会社に勤めていたら絶対に認められないことだ。「この男は、本当に“必要”なのか」というテロップも突っ込んでいてすごいと感じた。

○　５月６日（日）のＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第１集「大海原　青い砂漠を生き抜く」の再放送を偶然見た。なぜこんなに動く魚の近くで迫力満点の映像が撮影できるのだろうと感じた。美しい映像にくぎづけになって、最後まで見てしまった。ＢＢＣとの国際共同制作で４年もの時間をかけて海の隅々まで撮影した記録で、小型カメラをサメやクジラの背中につけた目線で、海の世界を撮影することを可能にしたという番組だったが、カメラマンが呼吸するときに発生する泡が全然見えず映像がきれいだった。亡くなったクジラが、えさのないところで、イワシの群れや何千頭のイルカやマグロに食べられてしまう映像や、その亡くなったクジラが海面の近くから徐々に下がっていき数ヶ月で骨になって海底に行く映像など、すごく興味深かった。次の第２集も見たいと思える番組だった。

○　アイドルグループのメンバーについての問題をＮＨＫのニュース番組がトップニュースにしていたようだが、それほど重要なニュースだろうかと職場の同僚が話していた。

○　４月２６日(木)の「ニュースウォッチ９」でアイドルグループのメンバーが起こした問題を番組冒頭で放送しているのを見て、違和感があった。２月にも日本相撲協会の理事選挙で貴乃花親方が落選したことを冒頭で報じていたことにも違和感を覚えた。

○　４月２２日(日)のこころの時代「古（いにしえ）の大和へ」を見た。元春日大社権宮司の岡本彰夫さんが話をしていたが、非常に尊敬している先生だ。中世近世の神職の世界、神祭りの世界、趣味に生きる旦那の世界をリアルにみにまとっているような人で、こういう人が今も存在していることが、奈良にとって非常に貴重なことだ。岡本さんの話を全国放送で流していただいたので、こういったことを考えている人がいることを日本の皆さんに知っていただけたというのが非常にうれしかった。

○　４月２１日(土)のわろてんか　スピンオフ「ラブ＆マンザイ～ＬＯＶＥ　ａｎｄ　ＭＡＮＺＡＩ～」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～8:59)を見た。オムニバス形式のドラマで、ど

れも非常におもしろくて何回見ても飽きなかった。風太とトキの玄人はだしの掛け合い漫才は非常におもしろく、もっと聞きたいと思った。それから、風太がヤキモチを焼くものの自分の思いをトキに伝えることができず、トキがじれったく思う場面の、濱田岳さんと徳永えりさんの演技が絶妙だった。

○　４月２９日(日)のルソンの壺～４月号～「“自然”をビジネスに生かす新発想」を見た。今回はアウトドア総合メーカーの辰野勇会長をスタジオに招き、コメンテーターの真山仁さんが経営哲学を聞き出していて大変興味深かった。過疎化が進む鳥取県大山町の登山口に通年営業の店を出して価値観を共有する仲間を増やしていき、年間130万人もの人を集めたという話に感銘を受けた。経営者をスタジオに招き、経営哲学について真山さんと真っ向から議論するという企画をどんどん取り入れていけば大変おもしろい経済番組になるのではないかと感じた。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局

平成３０年４月ＮＨＫ近畿地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ近畿地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ大阪放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、かんさい熱視線「“関西人は骨が弱い”ってホンマ！？」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	西田　賢治	(大阪商工会議所　元常務理事)
副委員長	山﨑　弦一	(日本労働組合総連合会大阪府連合会　会長)
委員	浅野　秀剛	(あべのハルカス美術館　館長)
	市田　恭子	(デザイナー集団 Team coccori　事業代表)
	片山九郎右衛門	(公益社団法人京都観世会　会長)
	小林祐梨子	(スポーツコメンテーター)
	鈴木　元子	(月刊大和路ならら　編集長)
	田辺　眞人	(園田学園女子大学　名誉教授)
	原　さだ	(財団法人龍神村開発公社　専務理事)
	安井　良則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)
	山舗　恵子	(京都リビング新聞社　編集部長)

（主な発言）

＜かんさい熱視線「“関西人は骨が弱い”ってホンマ！？」
（総合　３月１６日(金) 後 7:30～8:00 放送）について＞

○　今回の「かんさい熱視線」では、女性高齢者に多い大たい骨骨折の発生率が、日本国内では関西が最も高いということから、その大きな要因となる骨粗しょう症について考察している番組だった。ほかの地域と比較して関西に骨粗しょう症の人が多く、大たい骨骨折の発生率が高いということは初めて知った。７５歳以上の女性がしりもちをついたら、骨折するというのはよくあることだと思っていたが、ほかの地域とは違うのかもしれないと思った。これまで骨代謝に関連して骨粗しょう症の予防に重要

なのはカルシウムやマグネシウムの多い乳製品やほうれん草などの食品、そしてビタミンDが多く含まれる魚類等の食品を摂取し、ビタミンDを活性化させるためにある程度紫外線を浴びることが重要であるとされてきた。その意味では、特に東北や北陸のほうが冬場に日光を浴びる時間が短くなるので、関西人よりも骨粗しょう症となる人の割合が高いと思い込んでいた。そのため、この調査結果は予想外だった。骨粗しょう症予防にはビタミンKも重要で、ビタミンKを多く含む納豆の消費量が、骨粗しょう症の発症率に関連しているというデータも初めて知ったが、とても重要だと思う。ヒップホップダンスもいいが、膝の関節を痛めている方には勧めにくいので、もう少し、関西人も納豆を食べる習慣を身につけるよう強調してもよかったとも思う。血液が血管内で固まらないような薬を内服している方にとっては、ビタミンKが薬の作用を阻害するので、番組では納豆の取り上げ方が遠慮がちだった気もするが、最近ではビタミンKの影響を受けない薬が開発され、臨床の現場でも広く用いられつつあるので、もっと関西人に納豆を推奨できる時期も近いと思う。今後は、私自身も、女性の骨粗しょう症の方に、納豆を勧めたいと思う。

○　番組のつかみがよかったので、番組が短く感じられた。私自身、関西の人はせっかちだからおっちょこちょいでこけるのだろうと思っていたら、町でインタビューされている人たちも同じようなことを考えていたので、自分が番組に参加しているように感じた。納豆の消費量の少ない地域は骨折の発生率が高くなっていて、あらためて納豆を食べないといけないと感じた。家族の病気をきっかけに食卓に出なくなる食品もあるので、医師のアドバイスがあると再び食べるきっかけになる。ほかの病気もふくめて、摂取するとよい食品やいけない食品のチャートも示してもらえるとありがたかった。

○　今回は、「かんさい熱視線」の中で、比較的バラエティー色の強い作りになっており、時々突っ込みながら見ることができて、楽しかった。せっかちの話を大阪の人に聞いたり、化粧の濃い大阪のおばちゃんたちが出てきたりというのが時々あったが、「関西人イコール大阪人」みたいなものが濃く出過ぎてるのではないかと感じた。特に骨折率の全国分布図では、兵庫と和歌山が高かったので、関西の捉え方がよけいに大阪に寄りすぎていると感じた。ただ、近畿大学の伊木雅之教授のコメントで「関西人のせっかちというよりは、負けず嫌いで野心的なタイプAの人」や「化粧が濃いというよりは日焼けどめの塗りすぎがよくない」など、しっかりとフォローされていたのがよかったと思う。また、岩手医科大学の坂田清美教授の納豆の話も説得力があって、いろいろな説明もおもしろかったが、岩手に行く飛行機の翼の映像は必要なかったと思う。押しなべて、とても気軽に見られて、だからこそ、大事なことがすごく心

に残ったのだろうと思う。番組に突っ込みながら見ると、それを誰かに話したくなるので、伊木教授のコメントも心に残り、実践してみようと思った。

○　「かんさい熱視線」は比較的よく見る番組だが、今回は本当に楽しかった。大たい骨骨折をテーマにしているが、骨密度の話が出てこなかったのは、骨密度と骨折のしやすさは必ずしも関係ないからだろうか。番組では骨折全体の話ではなく、大たい骨骨折だけを取り上げているのはなぜか。また、骨折の部位によって傾向が違うのかが気になった。納豆は、学生のとき、同じ関西でも京都では食べるが、大阪では食べないのかと思ったことがあるので、調査結果を見てなるほどと思った。また、ゲストのオール阪神さんが、妻の高田良美さんと一緒に出演していたせいか緊張していて、真面目で、逆におもしろかった。

○　喫煙や飲酒など明らかに体に悪いことではなく、普通に生活していても生活習慣によって、大たい骨骨折を引き起こすことに非常に驚いた。特に納豆の消費量と骨折率の相関性を示す地図にあらわれていた。番組の構成も、３つの話題にそって自然な流れでとてもよかった。ただ、骨折をテーマにしていたが、大たい骨の骨折に絞っていたのはなぜか、その理由がわかればもっとおもしろかったと思う。また、納豆を食べない人は、ほかによい食品があるのかが、気になった。日焼け止めの使用頻度と骨折率の相関をあらわす棒グラフが紹介されていたが、近畿の女性の日焼け止めの消費動向もわかれば、よりおもしろかった。また、司会のことばづかいで違和感を覚えたところが２か所あった。ゲストの紹介で「オール阪神さんの妻の高田良美さんです」というコメントがあったが、「オール阪神さんの奥様の」ではないかと思った。ゲストの伊木教授を紹介するときに「この報告をまとめました伊木先生です」というコメントがあったが、ニュースであればいいのかもしれないが、本人がスタジオ出演しているので「まとめられました」としたほうがよかったと思う。最後は急いで終わった印象があったので、もう１度ゆっくりとまとめ直してもらえたらよかったと思う。番組によると、自分の出身地は大たい骨骨折が多いが、納豆を食べるし、県民性もおっとりしているので疑問に感じた。番組で知ったことを親にも伝えたいと思う。

○　「関西人は」というタイトルは気になったが、最近、私の職場の６０代以上の人たちが続けて３人も骨折をしているので、実にタイムリーな内容だった。あらためて思い返すと、高齢になってから転んで寝たきりになってそのまま動けなくなるということはよく聞くので、大たい骨骨折は本当に多いと感じた。和歌山県は納豆の消費量が最下位ということで、納豆を食べない人の骨折率が高いという結果に突っ込みを入れながら番組を見た。「納豆の消費量と骨折の関係性はわりとはっきりしている」とい

うコメントや、「骨折はせっかちに多いというデータはないが、タイプＡに多い」というコメントに納得した。日焼け止めを過度に塗ると、骨密度が低下するということに驚いたが、血液検査によって分析していたので納得した。和歌山県では予防としてヒップホップダンスを取り入れていることは知らなかった。最初は「関西人は」というくくりで受けねらいなのかと感じたが、しっかりとした分析をもとにわかりやすく説明をしており、３０分の番組が短く感じられた。骨密度を気にしている女性たちに見てもらいたい番組だと感じた。

○　「大たい骨骨折は兵庫や和歌山に非常に多いのはなぜか」という身近な疑問に注目し、原因究明を理路整然としていて、本当に説得力のある番組だった。ただ、「関西」という地域はないと思う。「かんさい熱視線」のように抽象的な意味合いで使うのはともかく、地域名として使うのは不適当に感じた。また、「せっかち」よりも「イラチ」ということばのほうが合うと思う。「ヒョウ柄、ど派手のおばちゃん」は私の地元にはいないので、関西全体のこととするのは無理があると思う。私自身は納豆を食べないので、それに代わる食べ物や方法も紹介してもらえるとよかった。

○　とても興味深い番組だった。大たい骨骨折に注目したところがとてもよく、見やすい番組だった。家族がしりもちをついて、大たい骨骨折で入院しているので、本当にタイムリーで勉強になった。骨折予防にはビタミンＤやビタミンＫが重要で、カルシウムだけではないことを、「関西人は骨が弱い」と結びつけていたところがよかったと思う。骨折する割合が最も高いのは大阪ではなく兵庫がトップだったことがとても意外だった。また、東北は寒くてあまり外に出ないイメージなので骨折が多いのかと思っていたら、逆の結果だった。日焼け止めや納豆のことも納得した。ビタミンＫを多く含む食品の中で、納豆は食べやすく含有量も特に多いので、食べなくてはと感じた。自分自身を振り返ってみると、納豆はよく食べるし、メークもそれほどしないので、せっかちな面にだけ気をつけようと思った。とても見やすくあっという間の３０分だった。

○　３０分間とても楽しく見られた。日焼け止めや納豆などキャッチーな点に注目できる番組だった。番組の冒頭から突っ込みを入れるところがたくさんあり、突っ込みを入れながらもしっかり勉強できる、おもしろい番組だと思った。大たい骨骨折の経験者の藤田征夫さんははやる気持ちに体が追いつかなかったということだが、私自身もとてもせっかちで早口なほうで、将来大たい骨を骨折してしまうのではないかと思った。私も納豆が食べられないので、納豆の代わりになるものを食べないといけないと思った。滋賀県の納豆消費量が多いとのことだったが、大企業の工場が多く、県外出

身の人が多いからではないのかと感じた。また、滋賀県は男性の平均寿命が１位になっているが、1,000 年前から発酵食品を食べていることや、湖魚を食べていることが骨を強くする要因になっているのではないかと言われており、今後そういう視点での番組作りもお願いしたい。

○　２月に、１人暮らしをする高齢の母親が部屋で転倒し、大たい骨を骨折をしたので、大変興味深く見た。主治医の先生からは、高齢者が大たい骨の骨折をきっかけに寝たきりや認知症になることはよくあるので、しっかりリハビリをさせるよう言われた。私の母親は納豆を食べていなかったが、骨粗しょう症ではなかったので、100％あてはまる話ではないように思う。番組では、データをしっかり提示して、専門家の解説もあったが、大阪的なノリの部分もあり、一抹の不安もあったが、ほかでも話を聞いて本当なのだろうと確信した。2016 年９月１９日(月)のＮＨＫスペシャル「私たちのこれから＃健康格差　あなたに忍び寄る危機」（総合 後 7:30～8:43)で健康格差の問題を取り上げていたが、大阪は全国でみても健康寿命がかなり低いランクだった。今回の番組は骨の問題だったが、健康寿命をいかに延ばしていくかという視点で番組を作ってもらえると大変ありがたいと思う。１月７日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ人体　神秘の巨大ネットワーク　第３集　“骨が出す！最高の若返り物質」でも骨に衝撃を与えるのはいいという話はあったが、生活していくうえで気をつけるとよい点やこうした運動がいいといったトータルな視点で、健康寿命を考える番組も作ってもらえるとありがたいと思う。

○　番組のタイトルは見てみようかと思わせるもので、番組全体も非常に大胆な仮説に基づいたおもしろい内容になっていたと思う。関西の女性の厚化粧が骨折率の高い原因だと聞いて「ほんま？！」と思ったが、日焼け止めクリームの使用頻度が高いとビタミンＤが減って骨密度が低下するという説明に納得をした。ただ、和歌山県には農漁業に従事している方が多く、日光に当たることも結構多いと思うので、和歌山の骨折率が高いことは意外だった。また、ド派手な厚化粧とよく言われる大阪の女性よりも神戸の女性のほうが骨折率は高いこともふに落ちなかった。納豆嫌いが骨折の一因という説明を聞いて納得したが、科学的な根拠はないと言われても、やはり信号が変わる前に９割の人が歩き出し、歩くスピードが世界一と言われているイラチな大阪人の性格が骨折の最大の原因ではないかと思う。大胆な仮説も伊木教授らの調査や何人もの研究者の取材に基づき十分検証された番組なのだと思い、大変おもしろい番組だった。新年度の「かんさい熱視線」も、大阪出身の伊藤雄彦キャスターが、関西のホットな出来事をユニークな視点で掘り下げていただくことを期待している。

（ＮＨＫ側）

総じて「説得力がある」あるいは「あっという間の３０分だった」という感想をいただいたので、見やすい番組だったのではないかと感じた。この番組は、「かんさい熱視線」の中でも世帯視聴率が高い水準だったので、一般の視聴者も同じように感じて見ていただけたのだと思う。

（ＮＨＫ側）

この番組がそもそも立ち上がった経緯は、昨年秋に公益財団法人骨粗鬆（しょう）財団と国が「中高年の大たい骨骨折の発生割合が、近畿地方で際だって高い」ことを示すデータを公表したことだった。「西高東低」が明らかで、何らかの原因があり、このようなデータが出てきたと専門家が見ていることが取材を進めて分かった。われわれとしては特に関西で骨折の割合が明らかに高いということで、これはしっかりと深掘りして原因まで突き止めようという意気込みでのぞんだ。ただ、あまりに真面目に伝えるとかなりお説教臭くなってしまうので、きちんと仮説を立てたうえで、われわれのほうでおもしろくアプローチしていこうと考え、「ヒョウ柄、厚化粧」という表現を用いた。関西の中で、納豆の消費量も骨折の割合もばらつきがあるという指摘については、専門家にブロックごとの数値も出してもらったところ、確かに各県で多少のばらつきはあるが、関西、東海、九州などブロックごとで見た時に、関西全体で納豆の消費量は低く、骨折も高いと言えるということだったので、今回は関西としてまとめることにした。さらに、骨密度に触れなかったことについては、専門家によると、骨密度が高ければ骨折が防げるとも言い切れないということだ。鉄筋コンクリートを例にすると、硬いコンクリートでも、鉄筋が入っていないともろくなってしまう。鉄筋のような丈夫さをきちんと担保するのがビタミンＫで、特に納豆に含まれているビタミンＫ２の効果が高いということだ。骨密度だけが高ければいいという誤解を防ぐために、今回はあえて骨密度ということばは使わなかった。また、番組の中で、納豆の代替の食品としてブロッコリーなども紹介している。

○　今回の番組ではビタミンＫ２が非常にポイントだったと思うので、今後もさらに関西の人たちに伝えていってほしい。骨粗しょう症が原因となる

骨折は、女性の健康寿命を著しく低下させていると思うので、今後も啓発をお願いしたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月２３日(金)の「しが鉄～びわ湖１周サバイバルクイズ～」(総合 後 7:30～8:43 滋賀県域)を見て、少し長く感じた。テンションの高いナレーションで番組が始まったが、ＮＨＫのアナウンサーが読んでいると知り、芸達者で驚いた。滋賀県在住者としては、リアルなかかしの話題は知っていたが、知らない情報もたくさんあった。参加者は４チームに分かれていたが､｢赤こんチーム｣｢お魚チーム｣などのチーム名は、おなじみの赤こんにゃくやびわ湖の湖魚からきていると､滋賀県民ならわかるとは思うが、もう少し説明があってもよかったと思う。

○　滋賀県民ではないので、電車内で盛り上がっている雰囲気とは温度差を感じて、１時間以上の番組がかなり長く感じた。問題がずっと続き、脱落者が出ても何も感じなかった。例えば、年齢で分けるなど４チームのカラーが出ていたら、脱落者が出てもおもしろかったと思う。１問目から全チーム正解で淡々と進んでいったことも長く感じた原因かと思う。ただ、問題自体は、後半になるにつれてご当地ネタや雑学ネタなどバラエティーに富む問題もあって、おもしろかった。

○　こうしたご当地クイズは地域振興にとても役立つと思う。県内の人にとっては愛着を深める一方で、県外の人にとっては興味を持って観光に訪れるきっかけとなる。びわ湖を一周できる鉄道の車両内でクイズをするこの番組は､滋賀県の特徴を生かした視聴者参加型番組だと思う。こういう番組を、近畿の各放送局でも制作して、県内外に発信できたらおもしろいと思う。県民ではない私としては、和邇駅周辺の小野神社にまつられているお餅の神様の名前を知りたかった。

○　地元を知らずに出て行ってしまう子どもたちが多いので､このイベントに参加した子どもたちにとって､地元出身の有名人と県内のことを勉強できたことはとても貴重な経験だったと思う。私の地元でもぜひお願いしたい。クイズになっていたが、湖魚を運ぶ電車があったことなどは、勉強になった。若いころ、滋賀県の人に「びわ湖の水、止めてしまうで」と言われたことがあるので、番組でそのフレーズが出てきたときに懐かしく思った。

○　「今回のしが鉄は」と始まって、滋賀県の人はいつもこんなハイテンションな番組

を見ているのだろうかと感じたが、見ていて元気になると感じた。参加者に子どもがいたり、夫婦がいたりで、和気あいあいとしてとても楽しい雰囲気でよかった。県域向けの番組なのでわからない部分はあるが、魚の種類など雑学的にも楽しめて、出演している芸人さんも安心して見られた。小さいころから鍛えられているのか、びわ湖の魚の名前を聞くと皆さんが答えていたので、びわ湖を愛してやまない滋賀県民の郷土愛に驚いた。

○　この番組は滋賀県向けのローカル番組だが、出演するタレントがすべて滋賀県にゆかりのある方ばかりで、滋賀県愛にあふれた番組だった。非常にローカル色あふれるクイズ番組で答えがわからなかったが、参加者の高い正答率に驚いた。大阪だったら絶対に文句が出ると思うが、４チーム中得点の低いチームが強制下車させられるのは、クイズに対する真剣さを増す効果があって、こちらもハラハラして見た。真綿とは絹でできていることを初めて知り、勉強になった。

○　「しが鉄」という番組名なので、電車が走る音で始まると思っていたら、にぎやかな車内で、参加者が高いテンションでクイズに参加していて、どきどきしながら楽しめた。滋賀県はよく知っているので、見たいポイントや、出題された場所とクイズの内容にギャップを感じた。電車は大津駅から出発したのに、なぜ和邇駅のクイズから始まったのだろうか。びわ湖を一周しようとすると乗り換えが多いので、この特別電車がふだんから走っていたら便利だと感じた。車内の映像が多いので、出題されてから答えが紹介されるまでの時間などに、車窓から見える風景も見せてほしいと感じた。

○　楽しく見た。びわ湖を一周する「しが鉄道」というのがあったら、一日乗ってみたいと感じた。鉄道会社をモチーフにしたゲームの曲がＢＧＭで使われていたこともあるが、電車が走るエリアとは違う地域のクイズが出題されていることに違和感があった。びわ湖固有の湖魚や地名についてはもっとしっかりと見せてほしかった。番組にマッチョな男性ばかり出てきたので、滋賀県にはそういう男性が多いイメージがついてしまった。クイズを通して、びわ湖の今と昔がたくさん知ることができて楽しかった。ただ、びわ湖を一周する鉄道に乗るのであれば、車窓からの映像がもっとあったらよかったと思う。

○　びわ湖を一周する特別列車だともっと強調したらよかったと思う。滋賀県向けの番組だったからか、特に後半のクイズは県外に住む私には非常に難しかった。品が悪いかもしれないが、信楽の腹鼓大会のチャンピオンの立派なおなかを出演者にも一緒に打ってほしいと感じた。一方で、地名のクイズでは、お笑い芸人の解答に突っ込む場

面はカットしたほうがよかったと思う。全体的に楽しいとは思ったが、県外で放送するにはわかりにくい内容と感じた。

○　赤こんにゃくや湖魚のおいしさを知っていて、滋賀県には詳しいと思っていたが、紹介された内容はほとんど知らないことばかりだったので、とても楽しく見ることができた。ただ、番組が少し長かったので、最後はしんどくなった。琵琶湖大橋の修理の問題はどこの橋でも同じではないかと感じた。また、偶然かもしれないが、マッチョな男性がなんでこんなに多く出てくるのかと感じた。難読地名の問題はおもしろかったので、地名の由来についてもう少し掘り下げてもよかったと思う。

○　ご当地検定のバリエーションの一つと感じた。滋賀県民ではないのでどの問題もまったくわからなかったが、７歳から７８歳までの参加者 120 名がクイズに懸命に解答する様子を見て、みんなで滋賀県を盛り上げようとする熱気が感じられた。鉄道会社や滋賀県民をうまく巻き込みながら、ローカル色満載の郷土愛を育むいい番組になっていた。ただ、車窓からの風景も流してもらうと、他府県民も楽しむことができたと思う。いずれにしても、７３分の放送時間は長いと感じた。

（ＮＨＫ側）

大津放送局のホームページでイベントへの参加者を募集したところ、アクセス数は通常の数十倍あり、ホームページの周知につながったと思う。この番組は、放送の１年半前から鉄道会社と交渉するなど、大津放送局では総力あげて取り組んだ。途中のクイズについては、解答だけでなく、もう少し解説も入れれば、視聴者との温度差や時間の長さも感じさせなかったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

今回、鉄道好きにはわかる緑色の車体が、通常にはないびわ湖の東側のルートを走ると告知したところ、イベント当日にはかなりの鉄道ファンが集まり、ネットを通じて全国に発信された。近江富士と緑の車両が一緒に撮れることはまずないことなので、ネット上の鉄道ファンからは大きな反響を得ることができた。ＮＨＫのイベントの参加者は通常年配の方が多いが、参加者の４０％が３０歳以下と若年層にアプローチできたのは成果だと思う。滋賀県内の各市町村の協力を得て、地元の人しか知らないようなことも紹介することができた。一方で、７３分の番組を演出するうえでは

反省点も多々ある。カメラの人員配置に工夫すれば、車窓からの風景をもう少し撮れたのではないかという点は心残りなので、今後の番組作りに反映させていきたい。

（ＮＨＫ側）

この番組は滋賀県向けの番組だが、ＮＨＫは４月からの３か年経営計画の中で、各地の実情に応じて地域放送のサービスの充実に努めている。全国や世界に発信する放送、近畿全域にむけての放送、各府県向けの放送という、３つのベクトルをどのような配分でいくかを考えながら取り組んでいる。この番組は大津放送局が滋賀県向けに行うサービスの一環だったが、地域放送のサービスをどのような形でとっていくことが望ましいのかという観点で、ぜひ今後ともご意見をいただければと思う。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」の第一週を見たところ、とてもおもしろかった。主人公たちの子ども時代が描かれていたが、子どもたちだけの世界があると感じられて、印象に残った。子どもたちのたあいない会話や遊びがドラマのおもしろさにつながっていて、新鮮に感じた。

○　４月７日(土)のＮＨＫスペシャル「＃失踪　若者行方不明３万人」について。行方不明で届けを出される１０代、２０代の若者は、全国で３万人を超えるということだが、問題の根底には、大人になる前に十分に社会性を身につけられていないことがあるように感じられた。

○　連続テレビ小説「わろてんか」を楽しく見ていたので、終わってしまって残念だ。最終週に終戦の時代をもってきたことはとても斬新だと思った。吉本せいさんの生涯をモチーフにしたドラマだったこともあり、毎日のように家族も一緒に見ていた。ドラマを見ている私の隣で、家族がＳＮＳを見ながら投稿されているメッセージを教えてくれるので集中できないぐらいだったが、そのうちそれが楽しくなってきた。「あさイチ」で濱田岳さんが「信頼と実績の徳永えりさん」と話していたが、数日後にドラマで濱田さんと徳永さんの掛け合いがでてきたときに、ＳＮＳでは「信頼と実績の徳永えり」という投稿があって、視聴者は新しいテレビの見方をしていると感じた。私が子どものころはお茶の間で家族とテレビを見ていたが、今は１人でテレビを見ていてもＳＮＳを通じて一緒に見られるので楽しく感じるのではないか。ＢＳの朝７時３０分からの放送では、ＳＮＳでのつぶやきは全くないが、８時からはたくさんつぶ

やきがあがってくるので､録画で見るよりもリアルタイムで見たほうが楽しいと感じた。

（ＮＨＫ側）

「わろてんか」では、出演者がＳＮＳに写真をあげるなど、ネットでの発信にも力を入れていて、若年層への訴求も重視している。

（ＮＨＫ側）

若年層にも接触を広げようということで、部を越えた若手職員でチームを作り、ＳＮＳで好まれると思われるものを考えて、随時配信していく形を取った。実際、わろてんか「“胸キュン”動画」の再生数が増加するなど、成果を上げることができたと思う。

NHK 大阪放送局
番組審議会事務局